

アネお前の様な美麗のに突當られりやア本望でござへやすト戯言をいふを聞娘は心なちざる體ながら 女アノ鎌倉の尼寺へ參るには何様參つたら宜ござのませうト尋る返事もせぬ中に足音高く地ひびきをさせてたしかに娘の追手かと被察たる二三人がはやくも此所へ近付ける

必竟此娘の安否は奈何亦追來りし者どもは何者ぞ其委しきを知らんとならば次の巻をよみたまへかし

春色梅美婦禰卷之十了

春色梅美婦禰卷之十一

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第二十一回

そもく牛頭天王と申奉るは神代に御勢ひ猛き御神にて素盞烏尊といへり然ば人皇五十六代清和天皇の御宇に播磨國より山城國八坂の郷に遷座ありて本朝死勇の尊神と崇め奉る事最古し其故は清和天皇の貞觀十八年より今天保十二丑年までは九百六十六年になれど猶それより古く人皇十二代景行天皇の四十年に日本武尊東夷を征伐の御時夷退治の大願を素盞烏尊に祈り給ふとて始て東國にこれを祭り給ふが最初なりその素盞烏尊の鎮座まします御社は武藏國豊島郡忍の池の西北なる根津大權現則これなり實に武運長久怨敵退散癘病除の祈りには江武におゐて根津權現に勝る神靈はあらじ名にしおふ日本武尊の武勇にて尊み給ひし御神なれば素盞烏尊の神功は申もなかく、龜略なるべしこゝに根津の社は千七百二十二年のむかしより在せば山城國なる祇園の社より古き事七百六十餘年の以前なり亦牛頭天

皇と異名を稱申兩部習合の説にして諸書にしるしてありそも神代の遠き昔素盞烏尊の餘りに猛く荒々しく在しければ天照太神の御勘當をうけ給ひて日本の國の中に住給ふことかなはずはるゝと琉球國までさすらへ巨旦大王といふ人の家に近付宿を乞たまへども巨旦は情を知らぬ財主なれば厳しく斷て尊を入れず却て害し奉らんと計る此節は素盞烏尊も勘當の御身にて勢ひなければ詮方なく其所を退き蘇民といふ貧しき者の家にいたり宿を求め給へば蘇民はいと貧しといへども慈悲深き者なれば尊を勞り御宿をいたし粟の飯を進め奉る折節異國より暴疫鬼の押來る事を察し給ひ蘇民が家の入口に茅の輪を造り神法を行ひ這を除給ふ其翌日より一村の人ことごとく疫病にて煩ひ死にけれども蘇民の家内は障なく疫病をのがれたり斯て尊は蘇民に別れたまふ節仰せられけるは此後もまた疫病の流行時あらば蘇民將來子孫と書て門口に張置ば疫鬼の家内に入事あたはじと教へ給ひしといふ實にや勇々しき尊の御功ならずや後生いよく神力あらたに在ゆる日本國中此素盞烏尊牛頭天王武塔天神とも申してまつるを祭らざる所なし別て繁花の町々には此所彼所にて尊の神輿を修造て氏子中を渡し疾病を追しりぞける事を祈る六月の祇園會は三才子も知りたる事ながら因に依てこゝにしるせり再説天王祭りの神燈大行燈を仕舞かゝりし其所へ周章逃來る一人の娘問もなく追來る二三人先に立たる一人は出刃庖丁の研すましたるを右手に引提後に續きし二人の男

は三四尺ばかりなる棒を持って馳來る娘は若衆の四五人立し軒下の暗き方へ隠れるを若衆は早くも推して背後の路次口へ入れて遣る所へ近付三人が虎熊平八モシ今此所を十八元になる娘が通りは仕やせんかネエナ娘が今道を聞たッけ何だか息をさらして驅て行たア虎何所の方へ行やしたネ然さ何所へ行たか先は知らなひが此先の横町をまがつて逃て行たアまだ遠くは行めへ平そふでござへますかネ虎憎ひ女だア盗人めがト言ながら欠出して行脊後見送りて壯年等が娘を隠せし路次に入小聲になりて信切にトキニマア危ひ目に合所だつけノウエさればサ一人の野郎めはびかゝる光る刃物を持って居やアがつたゼエエコウ姉さんお前マア何様したのだから何でも餘程悪ひ事でもしたのか彼奴等に捕まると殺されでもする様だゼ刃物を持って來た奴は大方お前の文をだらふ何でもおそろしい面をして追欠て來やアがつたがお前の丈夫じゃアないか縁があつて此様なに隠してあげたくらゐだから其道筋をはなしなせへ兎てもものことに難義を救つて向ふへ掛合を付て上やせうお前一人が逃出して來たのか密夫も同伴に逃たのかト四五人寄り壯年等が密夫などして丈夫に見咎められ逃出したる様に推量なせしかば其趣に間かゝれば娘はいと恥かしく亦悔しければにや涙ながらに身の上をあらまし咄して聞せけるこれよしを以前へもどして女のことばがきならず本文にばらついでこの女がにげきたりしわけをくわしくす千種にすだく虫の聲亦二ツ三ツ飛螢夜風は涼しき田

甫の呷道宙を飛する四ツ手賀籠掛聲もせずはしりつゝ往來よりは一丁ばかり西の方なる森の中の茅家の前へ賀籠を下してかこ虎サア姉御此方へ出被成かこ平ヤレ〱足に正體がなくなつたアかこ熊コレ〱愚痴を言やるナ肩と足を勞らかした代には今夜親方が樂んだ跡じやア此方等にも樂しませて夫から何所へか連れて行やア一ト包になる品物だア有がたく思やナトいふ中にはや手を取て駕籠の中より引出すは月の光に潤はしき色をましたる一個の美人四邊を見まはし驚く風情これ則別人ならず彼婦多川に居たりし彘吉が柳川亭をも振捨て尼寺へ行んと途中に雇ひたる駕籠の者どもが思ひもよらざる悪人にて鎌倉へ行路を違てかゝる所へ連來りしなりくめヤレ〱こゝは道中の宿屋ではなひねへ虎知れた事サ本街道をうか〱行とお前の家内からは追人が懸らふし此方の胸算用も悪ひから田舎道を横筋違に此様な所へ連れて來たのサ〱サアまづ今夜ア此家へ止宿と極なせへ不斷は明てゐる宅だから諸道具もなし火の氣もなし不自由でいけねへが其代りには隣家は遠し往來の人は通らず高聲をしても聞人はなし何を何様せうと遠慮は不入のサ

ト勝手なる戯言を吐ながら三人かゝりて彘吉をとまひいと古びたる草の家の内へ引入れ燈火を照らし兼て調ひ置ぬるか酒肴など取出し彘吉に酌を言付て酒汲かはす其風情はなか〱駕籠かきの躰にはあらず昔繪本の大江山酒呑童子の有さまにて彘吉をさ

ながら我ものと言ぬばかりの取扱ひ頓て不法の行ひもなしかねまじき様なれば彘吉は怖さ悔さしに物をも不言に居たりける

虎コウち彘其様に鬱情で居る事アなひゼ此身をばわすれてしまつたかコレまんざら知らねへ顔でもあるめへかくめヤ私やア些も覺えて居ませんヨそして駕籠やさんに心易くした事はありませんものヲ虎コウ〱其様に此身を安く下直に言つて呉る事はなひぜまさかに此身も腹の中からの駕籠かきではなひはナこれでも近頃まで深川通とも言はれて一人ヤ半分は和哥町に情人も持て居た藝やの虎さんだア今じやア零落て此様な所へ來ては居るが内證まで駕籠かきを仕ては居なひゼ以前其方が彘吉と呼て出た始めに知己になつた事もあるぜ其時分から念がけて居たが縁があればこそ此様な珍らしい所で出合はれる事が出来たのだ。モウ斯して隠れ家まで見せた上じやア否應は言せねへ所詮此方は命がけてする仕事だから覺悟して自由になるが能ト憎々しくも手込めの詞退れがたなき彘吉の難義詮方なくぞ見へにけり

斯て三人の悪人等は飽まで酒食を盡しければ虎八は彘吉の膝を枕とし其餘の二人も酒機嫌に倒れて正體なかりしが彘吉は一生懸命に神佛を祈つゝ頓て其家を逃出し東西南北の當所もなく右よ左と欠走りやう〱に町家へ出て彼天王の太行燈を仕舞場所へ逃

來りしなり此旨趣を壯年等にはなしければ祭場の人々は齒をかみならし

▲「イヤハヤそりやアマアとんだ嘶しだアそれが實正ならば今追欠て來た奴等ア勾引だナ
アト言へば友達も一同に ●「エ、コレはじまりから其わけを聞て居るのだと彼奴等をたゝ
き倒してこり／＼させて遣るものヲ ×「脊後を追欠てもモウ捕へる事は出來めへか ●「イ
ヤしかし盗人猛々しいといふから今にまた此所へとつて返して來るも知れなひからママ
ア頭の宅へでも連れて行て止宿せてやるが宜からふト

さしも實意の壯年氣質俄に人々が頼母しくお糸を介抱して其町内の頭だつたる人の家
にぞ伴ひける

第二十二回

夜は更たれども涼風に働き安しと夏の空星もきらめく銀河自然と秋へ近くなる冷氣を催す
時刻なりしがお糸を頭の家へ伴なふ若衆のはなしを聞て立出る二十三歳の婀娜なる女此
家の娘にて名はお稻といふ。お糸と顔を見合せていね「ヲヤ糸吉さんかへママ何様被成だへ
サア／＼お上りなくぬ」ヲヤ／＼小稻さん寔にお久しふござぬますネエト互に挨拶をするを
看て此家の主市郎兵衛 市「ヲヤお稻の友達かいね」ア、和哥町に居た時は姉妹の様に爲た

だアネ 市「ハア然か夫じやア猶更の事だ遠慮なしに奥へ行て娘と二人ではやくママ休み被
成定めて勞れもあらふ。サア／＼かまはず奥へ行なせへくぬ」ハイ有がたふいね「アレサ遠慮
なくお上りな私ばかりで誰人も外には居なひはネト無理に伴ふ奥の方市郎兵衛は子分の若
衆に向ひ 市「サア／＼餘り夜がふけるから些も早く休むが宜らふ残つた片付ものは明日に
するが能ゼまた間違でも出來ると惡ひから」ナニ最早不殘片付て仕まひやした残つたのは
職のわくばかりだから兎てももの事に片付て仕まひやせうといふ折から表の方にて何やら物
騒がしく若衆の聲にて ▲「ヤイ／＼逃すな／＼頭の家へ引ずり込がい、太エ奴だ ●「はや
く白刃をたゝき落さねへと行けねへぞ長齋でたゝき倒せ／＼ト大勢さはぐを聞付てお糸を
送り入たる若衆も得物／＼を引提々々木戸の方へ欠出し行ば市郎兵衛は驚きながらも表の
戸をア支度をして一腰を帶し 市「お稻ヤ此身が歸るまでは鍵をかけて置て戸を明るなヨト
言捨にして市郎兵衛は喧嘩の場所へ欠出し行

斯て市郎兵衛が欠付て見れば前段にしるしたる籠虎籠熊籠平の三人がお糸を追蒐來り
て見失ひまた欠行しがとつてかへし様子を聞付て若衆にお糸を隠せしならんと咎め懸
りしが争ひとなりし事なれば弱さを助ける壯年の氣性も揃祭の元氣元來非道の惡者を
憎み腹立ありける所へ身の程知らぬ虎に熊強しといへども人面獸心また籠平も平なる

奴にあらねば天罰を恐れず俠客の只中へ飛で火に入虫同前こゝに憂目に出合ふは疫病神を拂ひ清める牛頭天王の神徳なるべし

●「ヤイ此盗人めエ女を匂引損なやアがつて此方等に向つて懸るとは呆れた畜生だぜ ▲ナニ／＼かまはず踏倒して繩で轉るが能く面倒だアたゝき殺せ／＼ト大勢集りて刃物を打落し頓て三人の者を繩にてぐる／＼巻にせしかば市郎兵衛は壯年等をなだめて強くは打せずされども餘りに公をおそれざる曲者なれば後々の見こらしめにもなるべしとて文注所へ訴へ奉りしかば聽衆の頭の糺させ給ひて三人ともに首を刎て後々の悪人を懲しめ給ふを難有けれ這は乍併日數も過後の事と察したまへ偕も其夜も明ければお稲はお糸に食事などを進めし上父の市郎兵衛に終夜聞たる由にてお糸の身の上を委しく語り聞せしかば市郎兵衛これ聞いて笑ひながら「車なるほど女子どもとは言ものゝ餘り氣の狭ひ了簡を付たものだノウ誰人も六借言わけでもなひのに自身ばかり落度の様に三人の中で只一人身を引て尼になるなんどといふ不所存な事があるものかナそしてマア其様な美麗顔て夜道を一人歩行をするから昨夜の様なあぶなひ目に逢たらふじやアなひか折能夜中に若い衆人が往來に居たればこそ此家へ隠して貰ふ様にもなつたのだアナ必ず氣を小さくもつて親姉妹に歎げきを懸る様な事を爲被成ないが能ネマア／＼二三日お稲と二女で和合遊んでお在被成其中に

自己が考へて三方四方の治りの宜様に落付て上るから何でも私に任せて置被成ト市郎兵衛が信切に請合ばかりか小稲は姉妹が久しぶりに出會し如くに睦ましくお糸の側を片時もはなれず實意を盡すにぞお糸も嬉しく心安堵市郎兵衛の詞にまかせて此家に四五日身を忍ぶ様にして居たりしが柳川亭にてはお糸の母は書遣を見るより狂氣の如くお京の許へも内々に知らせしかばお京は驚き悲しみて母にもなか／＼隠し置事ならずと其趣を告るにぞこれも同じく恟りして詞も出ず周章騒ぎ早速柳川亭にいたり涙ながらに兩親同志火急に相談を遂て心利たる人々を頼み尼寺の方へ遣はし途中より聞合せて貰ひながら尼寺まで聞合せければ一向に似寄し事もなしといふ沙汰にて尋ねに行し人々の手を空しく歸りしゆへいよ／＼歎き悲みて尼寺へ行と遺狀をしたれども海河へなど沈みしか又は途中にて不慮の災難を受けて苦しめ危き事に逢ては不居かと案じ惱ど如何にとも詮方なければ兩母は神に祈り易者を頼み種々なれど便なく途方をうしなふばかりなり然ば柳川亭の隣家の者も隠すとすれど聞傳へて見舞に来る各々實意の世話をして彼是と尋ねに如在はなかりしがお糸が家を出しより三日目の日中過夕立雨の降て往來の人も途切れたる折節茶見世の戸を半分おろしてあるを這入るは隣家の内儀一人の女を伴ひてお糸の母に呷きすゝめ彼女を奥へ通しければ長屋の内儀も言合せしか表と裏口より二三人入來り母なる人に拶挨し各ひそめき寄

合つゝ一人が立て茶碗に水を汲來り盆の上に載てさし出すを母は請取り隣家の内儀が連來りし女の前に備つゝ頓て水を手向るに及けり是なん降巫といふものにて斯る折には人々が迷を重ねる所爲ながら又無理ならぬ女子達の人情ならんか偕も降巫は生口と水向られてお定りの言出しも濟し時兼々降巫に問上手と噂をされる長家の内儀さまお可曾といふが膝をすゝめべそ「アノウお糸さんかへエ違ひなひかへ ほかの女」アレサ其様な疑ひを言すとお糸さんらしいから何所に居るか夫をお聞きなべそ「然かのウ。アノネお糸さんお前ママ御さんが此様な泣あかして苦勞にしてお在だのに何故便りを被成てなひネエそして遺書と違つて尼寺へも不行に何所にお在だト問ひかけられて彼降巫はさも悲しげなる聲音にて生口なれども哀れなりいちこ「今さら後悔を仕ますがナア家を出るより思ひがけなひ人達に取圍まれて幾世の難義を爲ますにナア母じや人の案じて被下苦勞より私が母さまを案じわづらふ辛苦の悲しさはマア何様にかまさるつらさも恨めしひ人の障りに母さまの側をはなれる不孝の咎も定り事が何様ぞして今一度は顔を見合せ度ござるにヤア引」
●「ヲヤノ」お糸さんにしては否な詞遣ひだネへ ▲「マアだまつてお聞ヨト互に前後の内儀達が顔を見合せて氣味わるそうにして居るお糸の母は始終顔に袖をあてゝ泣て言葉もなしへゝ」それがネお糸さんもお前も家内へ歸り度おなりなれば直に歸て來られそうなものだネへいちこニヤレサア

夫はナアア言はれませずと歸る事がなれば悲しひ目を爲ませねど右も左も怖ろしひ人が前後を用心して由斷を爲ねば一足も出られる様なおろそかな透間といふがなひ故にイ飛立ほどのかなしさを從容と堪へて見れど十日の間に出られぬとモウ一生涯母さまのお顔を見る事はなりませすまひモシ然うなれば此世を去も同じ身を哀れと思ふに被下ヤア引といふを聞より一座の内儀思はずワア引と泣出し涙の雨に夕立の空猶曇るありさまなり

此節になりてお糸の母身を振はして歎き悲しみ何卒お糸がつゝがなく家内へ歸る様になる除をして呉よと降巫に頼み其外種々氣をもみて片時も忘るゝ事はなかりしとぞ嗚呼世の中の親心子故に迷ば賢きも愚痴になること哀れなり

春色梅美婦禰卷之十二了

春色梅美婦福卷之十二

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第二十三回

再説お糸が家出して行衛も知れずなりしかば柳川亭の母もお京が方にも岑次郎の父には知らされず彼是と内々にて周章騒ぎしが斯る節になりてもなほ岑次郎は家に不歸依之兩方の母も愛相の盡るほどあされて岑次郎の事は先さし置只お糸の行衛をのみ案じ入て苦勞に心も亂れしごとく涙にのみ暮けるがお糸の家出したる四日目の朝兼々心易くせし遊藝人萬蝶が柳川亭の門口かち 萬「ヲヤ／＼大變に朝寝ぼうだネエモウお客が来て休む時分だのにお見世も明ないてトいふを聞付て奥より出るお糸の母「ヲヤ萬蝶さんお早ひねへ 萬「ナニ／＼些も早くなしサ。此頃お糸さんの寝ぼうにお母さんまで引ずり込れて朝遅くおなん被成たのだ。サア／＼お糸さんお起被成萬蝶が急用があります。アハ、ハ、ハ。サア／＼遅ひ

へお寝ン眠かへそれじやア朝遅ひはづだアハ、ハ、ハ。母「アレサ萬蝶さんお糸は寝ては居なひはネト言ながら眼に涙を浮めしを萬蝶は早くも見とめ 萬「ヲヤ母御さん涙ぐんでお在なざるネ何様か被成たのかへそしてお糸さんはマア何所へお出のでござぬす 母「ナニサ何所といふ當があれば案じは爲無けれども些も行た先は知れなひからモツ／＼私は苦勞になつて癩が痛んでならなひのサ 萬「エ、實正の事かネ 母「ナニ啞を吐ものかネ今日でモウ四日目になるけれども少しも便りがなひのだから海川へでも這入は爲まひかと可憐そふでならなひトいふも曇りて涙の聲音さすがに萬蝶も元氣をうしない母の側へ腰の抜たる様に動止座して 萬「イヤそれはマア大變な事が出来たネエ何様いふ事とお糸女が其様な氣になつたのでござぬすか何でも深ひ理由のある事てござぬませうが私も今から不及ながら尋ねに出て上様が少しも心あたりはなひのかへトいへば母はお糸の書置萬蝶に出して看せる 萬「是でも鎌倉の尼寺の方へは 母「影もなひといふから途方に暮るはネ何様ぞ仕様はめるまひか考へてお呉ナ 萬「ハテ困つたものな何様も外に斯といふ能知恵はなひが此上は是非在家を探して見るには飯繩權現さまの法を願ふだネト是より萬蝶は飯繩の御利益を委しく語るゆゑ母は命も代りたく思ふ我子の事なれば亦其相談に及しが 母「マア何にしても岑次郎が些も家内へ寄付ずに何所へ行て遊んで居るか此家へもモウ十日の餘も貌を出さなひから

お糸も案じて居る最中實家のお京が岑次郎の母と同伴に来て此方にばかり岑が居る様に思つて恨みを言たものだからお糸も氣を惱出して此様な事になつたのだから困るはネお前は岑次郎に外でお逢のことはなかつたかへ 萬「ナニそりやア逢ますとも實は昨夜岑さんの所へ止宿て夫からお糸さんに用があつて來たのでございますのサ 母「エイ岑が宅とはエト言れて萬蝶もこゝろ付き 萬「エエナニ何サ岑さんのお宅ぢやアない岑さんが常に心易くするお家へ行て其所に岑さんがお在被成てから私がお目にかゝりましたのサトさすがに物馴て如在なき萬蝶なれ共お糸の行衛知れずといふ大變に心驚しゆえ岑次郎の隠してある房吉の家を放心と言出したる事なれば言葉のさしつかへしなり母は元來お房の事は心つかねど岑次郎の放心居る所が在ならんと察して居たる事なれば萬蝶に向ひ 母「アノ萬蝶さん何様でモウ斯いふ大騒ぎが出來て娘の行衛が知れなくなつた程の事だから何も角も最早隠して物をする様にしては居られない事だはネマア岑の居る所を委しく聞せてお呉れナ夫が出來ずばお糸の家に居ない事を咄してはやく此家へ連て來てお呉れ 萬「何様も困つたものだ 母「オヤ／＼何故其様な事をお言だモウお前は岑に逢れないのかへト聞れて暫時萬蝶もさしつかへしが。兎ても斯六借騒ぎの出來た上は何事も隠す道理もなしと思案を極め 萬「實にお前さんに明しては些わるい事だけれども何様で知れずにも濟ますまひし第一さしか

つてあのお子も大變に苦勞をして泣てお在だから来て私が今朝此方へ欠出して來たのだから 萬「ヲヤお前何をお言ひのだエをしてあの子とは誰人の事だネ 母「ナニサ房吉さんの事でございますはナ 母「オヤ／＼お糸の事を聞て泣て居るといふのかへ 萬「ナアニ何様して其様な事を彼地で御存知のわけはありやせん私も今此所へ來てお聞申たのだものヲ 母「ホニ然だらふねへ夫にしては何故お房が泣て苦勞をして居るのだらふネ 萬「さればサ岑次郎さんが腫物が出來て十日ほど絶食同様でわると命にかゝると醫師がいふから岑さんの苦しむのを見て房吉さんは泣ながら看病して居被成し亦何程岑さんだからといつても實家へ久しくお歸ん被成ない中に火急の大病だからさしつかへる事もあり房吉さん一人て看病も出來ず萬一の事があつた節諸方へ知らせずに置ては濟ずお醫師さまは治り難るといふから其所で早くお糸さんをお呼申度といふ譯サト聞いていよく驚く母親亦一増の苦勞の一件呆れて詞もなかりしが 母「何様してまた岑次郎が不快からといつてお房の宅へ行て床に付たもんだネへ 萬「ナニサ病氣が發つたから房吉さんの所へお出被成たのではなしサ房吉さんの宅に寝てお在被成て夜中に痛み出して急に大病におなり被成ましたのだから大變サ 母「ヲヤ／＼それじやア岑次郎は辰巳へ行て始終お房の所にばかり居たかネエ 萬「エ、マア然てござぬませう 母「イヤハヤ呆れた子どもだノウ他様に聞れても親達が目ないわ

けだト溜息を吐ばかりなり

是より萬蝶はお房と岑次郎の深き中なるとはじめ姉妹の心々にてお糸の義理合房吉の意地づくの事まで委しく話して相談に及びける

○夕立や只時の間に他所の雨

爲 永 春 泉

斯る緯のありぞとも知らねどお京は發明にて岑次郎の行衛をはやく尋出さばお糸の行衛も思ひの外に知れる事もあらんかと彼婦多川なるお房を尋て對面し是に問ば大方に居所も知れ申わけとなるべし亦然なくともお糸の家出せし事を妹なればお房に告てその了簡をも聞にしかじと心付しゆえ母の前へは内々にてその心を告彼婦多川の材木座に隠居せし所へ行おもむきにて下女と小僧を連て家を立出婦多川にいたりしが下女と小僧をば父の所へ待せ置父にも隠して只一人和哥町なる房吉の許へやう／＼と尋ね行委しく聞ければ此節は家内に病人ありて見板をも引て居るとの事ゆえ先お房の門口から密に内の様子を伺へばふきアレサ岑さん氣を慥にもつてお呉よヨウ岑さん其様に苦しひかへ。アレ何様せうのう。サア此お薬をお上りヨト泣聲にていふお房の聲岑さんと呼聲を聞てお京は恟り胸騒ぎ思はず表の格子をば案内もなくガラリと引明け中敷居の障子を明ながら 哀御免被成ましお房さんのお家は此宅でございますかトいへどもお房は岑次郎の病はげしくとり詰し苦痛を勞り前後をも辨へがたき程なればお京なりとも心付ず入口の方を見向もせずふきお咲さんおりよさんか知らないが鳥渡アノ茶碗へ水を汲てお呉被成ヨ。アレサ岑さん 引ト呼ぶは岑次郎が氣をうしなひたる體と看ゆる故お京ははじめて來し家なれど遠慮して居る所にあらねば臺所の方へ走り行茶碗を探して水を汲岑次郎の床の側へ持來りしをお房は請取口にふくみ岑次郎の顔へ水を吹かけ泣聲にてふき岑さん／＼ 案じなさんな 哀岑次郎さんお氣が付きましたかトいふ節岑次郎は少し眼を開き四邊を見まはし 岑ヲヤお京は何時の間に來たのだ 哀アノ只今参りましたヨ。未お房さんに御挨拶もいたしませんヨト言はれてお房は恟りしふきヲヤ私きアお隣のお咲さんだと思つて居りましたヨお京さんてござぬましたか眞平御免被成ましヨ。ア、引怖かつた萬一これ限りにお成ならば私きやア何様せうと思ひましたヨ 哀私も表から這入ながらお前さんが泣聲で岑さん岑さんとお呼びのを聞きましたから胸がドツキリとして案内もいたさずお宅へ這入りましたヨ堪忍して被下ましふきイ、エ河差いたして私はまた逆上て夢中の様になりましたからお前さんだかお隣のお内儀さんだか知れませんから直様に水を汲てお呉被成なんぞとお遣ひ立申ましたは御免被成ましヨト互に齟々義理合を述る中にも岑次郎の心付て介抱は勝り劣らぬ兩女の實意なかく筆には書寫し難し彼是する間に岑次郎の苦痛も思の外に治りし故お房は安堵して

後をも辨へがたき程なればお京なりとも心付ず入口の方を見向もせずふきお咲さんおりよさんか知らないが鳥渡アノ茶碗へ水を汲てお呉被成ヨ。アレサ岑さん 引ト呼ぶは岑次郎が氣をうしなひたる體と看ゆる故お京ははじめて來し家なれど遠慮して居る所にあらねば臺所の方へ走り行茶碗を探して水を汲岑次郎の床の側へ持來りしをお房は請取口にふくみ岑次郎の顔へ水を吹かけ泣聲にてふき岑さん／＼ 案じなさんな 哀岑次郎さんお氣が付きましたかトいふ節岑次郎は少し眼を開き四邊を見まはし 岑ヲヤお京は何時の間に來たのだ 哀アノ只今参りましたヨ。未お房さんに御挨拶もいたしませんヨト言はれてお房は恟りしふきヲヤ私きアお隣のお咲さんだと思つて居りましたヨお京さんてござぬましたか眞平御免被成ましヨ。ア、引怖かつた萬一これ限りにお成ならば私きやア何様せうと思ひましたヨ 哀私も表から這入ながらお前さんが泣聲で岑さん岑さんとお呼びのを聞きましたから胸がドツキリとして案内もいたさずお宅へ這入りましたヨ堪忍して被下ましふきイ、エ河差いたして私はまた逆上て夢中の様になりましたからお前さんだかお隣のお内儀さんだか知れませんから直様に水を汲てお呉被成なんぞとお遣ひ立申ましたは御免被成ましヨト互に齟々義理合を述る中にも岑次郎の心付て介抱は勝り劣らぬ兩女の實意なかく筆には書寫し難し彼是する間に岑次郎の苦痛も思の外に治りし故お房は安堵して

ふき「アノ者じやアマア些手を放しますヨ折角お京さんが始てお出被成たのだから 哀イ、エモウ些もお構なさるますナ私は此様な事とは存知ませずお前様に是非お目にかゝらなひければならなひ事が出来ましたるゆるに参つたのでござるますヨ 岑「何故母人さんが何とぞ言つたのか 哀イ、エナ 然うではござるませんヨ私が内密でお房様にお咄しがあつて参つたのでござるますからお前さんはマア氣をお惱被成ますナ亦御病氣がわるくなるど行ませんヨト言ながらお房の傍へ近づき聲をひそめ 哀「アノお房さんお前さんも岑さんの事で氣をもんでお在の中だからお知らせ申しては悪いけれども捨て置れなひ事だから申ますがネ未御存知ではござるますまひネエふき「ヲヤ何でござるますか此頃は岑さんの病氣にとり紛れて何にも外の事は知ませんヨ 哀「エ他の事ではござるませんがネト是より彌聲を低くしてお糸が遺書をして家を出し始末を委く物語ればさすが姉妹の事ゆゑはなしを聞中にお房は胸を轟かし眼には涙をうかめつゝ顔色變りて泣伏ける

お京はこゝに岑次郎がお房と情合のあることを始て知りて驚けども嫉妬の心は更に發らすなを細やかに語合ける

第二十四回

こゝに亦猿寺の地内に假住居せし判次郎は彼お園の缺出して來りし一件にて終夜彼是と相談して眠りもやらす存けるが枕元なる方燈の明るくなりつらくなり消んとしては亦明るく夜風の音も何となく物すごく聞ゆる折しもあれ誰とは知らずしづかに枕元へ來るものあり此時判次郎は總身しびれて動事ならず最々異變覺へしが臆氣なるもの枕元に座して「サテ其許にははじめて面會に及びますが縁あつて不便に思し召被下お園が父にて小佛善左衛門と申者此末ともにお園をお見捨被成ぬ様にわざ／＼今晚お頼み申に罷越ました程の事また先刻堤下の茶店へ推参いたしてお園へ不法を申かけ耻かしくも嫉妬の念にて拙者が深ひ思案も知らずお園に迷惑をかけ夜中に其許までを騒がせ申たる事氣の毒千萬兼々心がけいたして拙者が死後の義を其許へお頼み申さんと覺悟いたして居つたれど拙者絶命の一條今日に迫り是非なく餓に罷出お頼み申す其巨細は最長々しき愛着の愚痴殊に混雜ましたる必死の難義久しく心配いたす利害にて彼堤下へ昨夜中参りてお園に迷惑をかけ申したる彼愚妻に拙者が存生中得心致す様に申聞ては道に武家の耻と存知て家内をば立去まじと思案を致し難題を申かけ追出しましたるは拙者と俱に命を捨させ申まひと深き所存の底ぞとは知覺申さぬ女の淺はか尤拙者が切腹の際に臨んで他人に知さず親元へ遣はしたる遺狀の中にしるし置ましたるを後日にて愚妻めが讀ますれば心も解て後解いたしお園をはじめ其許へ

莞爾笑ひ判次郎の顔を見て嬉しそふなる姿は千金にも代難く思ふなるべし

春色梅美婦禰卷之十一了

春色梅美婦禰第五編叙

源氏は豎横の並びあり。謂所空蟬夕顔は。帚木の豎にして。紅梅と竹川は匂宮の横なるなど。這は最正しき文法にて。企及ぶにあらぬども。僕が策子も横堅縞。鼠が捨れば媚茶を織入。それでも時代だと草色やら。紺桔梗やら染込て。えたいも分らぬやたら縞。爾ば米八婀娜吉を辰巳の園にて結局。はや雲がくれと思ひのほか。英對談語に黄粉をつけ。最一つころげて梅美婦禰。又牙返る物語りは。豎を横なる格子縞。筆もかすりに織立しは。耻を晒のあさしく。末摘花と赤らむ顔を。潭の篝火あつかましく。近江の君程海口でも。女三の猫でニャアンにも。知らぬ作者が筆拍子。乙女の卷の幼婦子。等みゆるし玉へと願ふになん

若紫の夫ならで横雲棚弓曙の

梅花の中にて筆を舐りて

爲永春水誌

春色梅美婦禰卷之十三

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第二十五回

九時の拍子木の音コン／＼／＼／＼／＼はるかに聞ゆる物賣の聲「蕎麥イ／＼」引「按摩ア引ト宵の騒ぎに引替てひつそりとせし唐琴屋の表座敷へ送りし客を床におさめて次の間より静かに廊下へ立出るお園胸なでおろしてホット息折しも來かゝる雛妓此花これは此糸の番しんなるべし夫と見るより駈寄ツて花「ヲヤお園さん治部さんは寢さしたんざいますかへそのア、河々寝かしもうしましたヨお前はんの前だけれども娼妓も悪ふありますヨ宵に揚うしつたとき鳥渡顔をださしたばかりだから只でさへ六ヶ敷屋の所へ娼妓は見へず可憐そうに此袖さんこれも振るべしが獨りて困りさツて居なはるから私が種々譯を言つてやつとの事で床へ納めたんでありますヨ花私も急度然うござませうと思つて氣を揉きつて居イしたけれどもあいにくと今夜ア方々が落合つて詮方がないンござますからお前はんに譯を頼んで治部さんが

強く腹を立たませんやうに爲て貰はふと思つて駈出して來たんざいますヨその「ヲヤ然うでありましたかへ私さやアまた今夜ア判次郎がお出なはるやうな咄しをちらりと聞ましたか
ら急度夫でかと思ひましたは花「ヲヤ夫を何様して知つてお在なますエ正直の所は宵に初會が二軒あつたところへ消老屋のと一文字屋の一所に提らしたもんざますからお前は
ん所の座敷とも五軒ござませう其所へまた寺内の判次郎をさしていふが今方來さしつて何だか眞な咄し
でありますものを娼妓も離れにくいのござませうから察して進てお吳なましト言はれてお園
はグツトせしが態と笑ひに紛らしてその「ヲヤ夫じやア無理もありませんネ私も判さんに
言傳をたのまれた事がありましたッけヨ何處の座敷だか序にお目に懸ツて往たいものであ
りますネエ花「ア、然うお爲なましアノウ董さんの座敷の隣さますからその「ヲヤ夫じやア
奥の突當りでありますネ花「ア、あの角の六疊さますヨ然してお前はんお内が宜かア後刻
まで遊んでお在なましなお前はんに進やと思つて取つて置たものがありますからその「ヲヤ
嬉しい急度でありますかへ又空言じやア御免たネエ花「ナニ今夜なア實正に美物さますヨ
ト言ひながら駈出してゆく

什麼このお園が過し夜に判次郎方に止宿し時父善左衛門の亡魂の夢現となくあらはれ
て過來方の物語りを二個に報知たるのみならず二十兩の金までも枕のほとりに遺しあ

るにぞ是に仍て判次郎は善左衛門の妻おその母いに對面して其夜の事を物語り遺言のとふり取はからはんと實意を盡して相談せしかばそれよりさきに善左衛門の妻は夫の自殺を聞のみか遣書までも屋敷より届けられて既にはやお園を夫の子なる事まではじめて知りしうゑなれば其身の思ひ足らずして我子とも見るお園に對し嫉妬の餘りはしたなき事のかづ／＼罵りしを今さら口惜く恥かしけれど夫が自殺せしうゑは屋敷へとても歸られねば萬事を判次郎に頼むにぞ判次郎も安堵して屋敷へ歸參の愜ふまでは先此家にあるべしとお園にもあらためて母子の盃を取かはさせかの二十兩の金を元手にいよ／＼商賣に怠りなきやう拔目なく世話をせしかば母子ははじめに引替て血筋のごとく睦ましく素よりお園は人愛よければ日毎に客の絶間なく今宵も此糸の客を送りて唐琴屋へは來りしなりこは這はじめに説べきを此所に縮めて綴りしは例の作者が筆癖と看官かみひよろしく察し給へ

再説お園は此花に廊下で別れてひそ／＼と奥の方へと赴きつゝかねて夫ぞと聞置しまはし座敷へ忍び寄り様子いかにと窺ふを内には夫とも此糸が知らねば二個さし對の何かもつれし咄し聲 此「モシエ判さん主しやア何故そんなに浮氣がますへ私がこんなに氣を揉のも些たア察してお呉なましな 判「コウそりやア何を言ふのだな此身がこんな身分になつてから

は苦しい勤の中からしてみついで呉るお前の深切ホンニ世事でも艶でもねへが女房とも親とも思つて居るものを勿躰ねへ浮氣らしい事なんぞがされやうかされめへか大概考へても知れたものだろらじやアねへか 此「イ、エ言なますな私さやア主の浮氣を爲なます事は宜ウク聞て知つて居ますヨ 判「コレサお前にも似合はねへ何の事だなそりやアてつきり誰ぞにしやくられたに違へねへハ、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ、 此「モン大概にとぼけなましにかに私にが痴婦だと言つて是まで馴染で主の氣心も知つて居るものが人のしやくりを眞にうけて嫉妬らしい事を言ふ様な私だと思ひなますか主の爲にさへなる人なら百人が千人情女をこしらへなますもそりやア男のはたらきだから宜うございますけれど私に夫を隠しなますから浮氣だと言ふンござますヨ 判「お前のやうに言はれると何様か此身が悪い事でも爲て居るやうに聞へるけれども隠すにも隠さねへにも實に覺のぬへ事だから何分困る譯だだらうじやアねへかそしてママ誰がそんな事をお前に言つたのだか夫ほどたしかに言ふからじやア何處の何といふ者といふ事まで定めて知つて居るだらうからその女の名を言ふが宜いはナ此「ホンニ主しやアあんまりござますヨそんなにしらをきんなますなら言ひますが宜うござますか 判「何卒速く聞てへの 此「アレママまだござますかへ夫じやア主しやアお園さんは何様爲なますのだへ 判「エ 此「ソレお見なまし覺へがおあんなませうがネ 判「アハ、ハ、ハ、何

を言ふかと思つたらとんだ點ちがひを言ひ出したの尤お園といふ娘は知つても居れば世話も爲た事はあるけれども全く然ういふ譯じやアね。那は據ねへ義理合で。些情女になんなましたのござますか。判ナニサ情女の戀のそんな浮た事じやアねへノサ大かたそりやア米八が何とか言つたのだらう。此イ、エ米八さんばかりじやアありイせん尤米八さんが往しつたときも其嬢と落合て主に異見を爲なましても主しやア其ときもやつぱり何のかのとはぐらかしてばつかり居なましたじやアありませんかへ其後米八さんが私の所へ來なまして判さんもあゝして手放して置て見なませば主は堅く爲なますつもりでも然ばかりもならないもので其處が男の徳ござますから縦令些やそつとの事はあつてもお前はんの顔さへ汚れずは宜と爲なまし私も丹さんで覺へがありますからとしみくと言ひなましたのを私きやア泣て嬉しござましたヨ然う言つちやア惡うござますが私が此店へ出てから今年で丁度七年ござますがあのとふりの内證ござますから米八さんにやアかぎらず雛妓衆や唄女衆がむごい仕置に合ふたんびに幸ひと私が斯うやつて座敷をはつて居ますから口を利て資けてやつた人は幾程だか知れませんが今でも其事を思つて私のたよりになつて呉るものは米八さんばかりさますヨ此間も千葉の藤さんが來さしつてお前も今年は年明だといふ事だから夫までには何半判さんを以前の身分にして目出度夫婦にして遣りたひと米八にも薄々咄しも

爲た事だと言ひなますくらひござますヨホンニ藤さんや米八さんが種々信切に言つて呉んなますにつけても私きやア一日も速く這廓を出て主の側に居るやうになりたひと永の年月指を折つて楽しんで居るンござますものを今さら主がそんな氣で居て呉んなましちやアあんまり可愛そうでござますね。判そりやア一々道理だが先刻から言ふとふり這方に知らねへ事だから詮方がねへ夫とも疑はしくはお園を呼んで明りを立て見せやうか。此そんなら急度然うござますネ嬉しうござます夫じやア私がお願ひがありますか叶へてお呉なますか。判何だか改まつた言ひ様だの随分此身に出来る事ならするからマア言つて見ねへな。此しつかりすると言ひなませんじやア否ござます。判アハ、夫でも萬一天の川の鯉をすくつて來て濃汁に爲て喰せるとか天狗さまの玉子を取つて來て炮録蒸に爲るとか言はれると迎も出來ねへからマア言つて見なと言つたのヨ。此ホ、主しやア餘程氣ござますヨ私きやア戲言じやアない真にお頼みがあるンござますから腹を極て聞てお呉なましヨ。判鯉や玉子でねへならば真面に聞くから言ひなせへ。此夫じやア言ひますがネ何卒私がお願ひだから浮氣でなくお園さんと情合になつて進てお呉なましト言はれて呆るゝ判次郎は須臾言語もあらざりける。

第二十六回

此糸は目に持し涙を膝へほろりと盈し 此判さんは私胸のうちをも推量してお呉なましな 判「そりやアモウお前の深切は察しきつて居るけれどもお園の事を頼むといふのはどうも分解ねへノウウやつぱり此身が何様かいふ情曲があると思つて迎も然うなつたうゑなら詮方がないから躲れ忍んでされるより奇麗に爲て貰ふ方が寢覺が宜ひといふ了簡で今のやうに言つて呉れるのじやア實に恨みだぜ 此「イ、エ方う思つて呉なましちやア私の方こそ恨みざますヨお園さんの身のうゑは深く頼まれた事があるンざますから末終始私も姉妹の積りで居ますから主も其氣で見捨て進てお呉なますなヨ 判「何様もなを〜分解ねへそして深く頼まれたとは誰に頼まれたのだらう 此「その頼人さますかへト言ひかけて少し鬱氣ぐ 判「ソレ見ねへ出たらめだもんだから早速頼人の名が思ひつかれめへ 此「アレサそんなに疑ひなましちやア罪ざますヨその頼んだ人といふのは那嬢のお爺さんの小佛善左衛門といふ仁さますが主も大方知つてお在なませうネ 判「エ何様してマア那仁が 此「サア是には寔に怖いやら悲しいやら今おもひ出しても凄然するやうざますがネ五日ばかり跡の晩に雨が大そう降つた事がありましたらうネ那とき私さやア獨りで座しきに寝て居ますと夢とも

現ともなく其善左衛門さんといふ仁が枕元へ來なましてモウ〜悲しい身のうゑ咄し段々様子を聞て見ると私の爲にも義理のある伯父さんさますノサ其とき伯父さんが言ひなますにやア此身が死だ其跡までも不便なのは娘お園同様いふ過世の因縁だか判次郎を戀慕ひ他の男は持まいと處女心に思ひ込んでも判次郎は何處までも和女に義理を立通し外面はゆるく見せかけても心の錠は外さぬ様子も見上た心ばへ然ういふ情合と知りながら枉て頼むは子故の闇和女が今にも廊を出て判次郎と夫婦になつたら否でもお園を引取て妾とまではゆかずともせめて判次郎の側へ置て折々やさしい言葉でもかけて呉るやうならば其身は素より草葉の蔭で此身も何ほせ嬉しからう呉々頼むと言ひなますからそりやア私が請合てお園さんとは姉妹ともなり二個て和合よく判さんを大事にする様に爲ますから必ず案事でお呉なますなと言つたら伯父さんが手を合はせて拜まつしやるやうざましたか夫防り見へなくなんなましたヨ私もあんまり不思議さますから人を頼んで様子を聞て貰ひましたら伯父さんの死なした事もお園さんの身のうゑも夫に違ひない事さますから主の心を聞たらゑで私の胸をも明そうと夫で先刻のやうに言つたんざますから何卒お園さんをも私をも見捨ないやうに爲てお呉なましト眞實の物語りに判次郎は言葉もなく溜息ついて居る折りしも廊下先より雛妓の聲にて 花「モシ娼妓エ急用さますから鳥渡來てお呉なまし 此「ヲヤ何だ

ノウまたはしまつたかへ今往くからと然う言つて置なまし 此「アレサ直ざません」と大變ざますヨ 此「エ、世話しない宜ウざますから先へ往なましト言ひながら泣顔を直して 此「夫じやア鳥渡往つて直に來ますから何處へも往ずに待つて居てお呉なましをして今の事も後刻までに考へて置いてしつかりとした返事をお聞せなましヨト言葉を殘して此糸は一問を出んと爲たるとき障子の外に忍び居しお園とおもはず顔見合せ悔りせしが小聲にて 此「お園さんざますかへその「娼妓堪忍してお呉なはい是でありますヨト物をも言ひ得ず手を合せふしおがみつゝ泣入れば 此「アレサそんな泣顔を爲し誰ぞ見ると悪うざますヨ夫じやア今の事を聞なましたのかへその「ハイ私きやアお前はんの御深切は死んでも忘れは爲ませんヨ 此「ナニサそんな譯じやアないがネ。ホンニ丁度宜ひ折ざますから此上襲を斯う着なましてネト言ひつゝ卒度脱てお園に着せながら耳に口を寄て 此「ネ。ネ。宜うざますかト言はれて顔を赤らめなからその「夫でもそんな事を爲ちやア何様もお前はんにお氣の毒でありますものを 此「アレサそんな心配が入るものかネ何でも判さんが私だと思つて種々な事を言はしつても無口でさへ居なませば宜うざますから思入れ可愛がつて貰ひなましト言ひ捨て此糸は上草履までお園にわたし其身は素足ですごくと表座しきへ外しゆく心の中こそ頼母しけれ

作者曰當時廊中の通言を聞くに古代の廊言葉と違ひ多くは素人の娘のごとし今此糸も是に倣へど作者も深くは穿得ず只通客の批評を俟のみ這は言はてももの事ながら往古の事跡を今様ぶりに寫しなすなる策子にあなれば専流行におくれまじと此様な事をも言ふんざますヨ

お園は此糸の情にて斯う／＼せよと教へられ上襲までは着せられたれども今更何様やら聞もわるく燈火の暗きを幸ひに座しきのなかへ入りしに判次郎は。此糸ならんと思ふにぞ判「ヤ何時の間にか來て居たの此身ア思はず寝たそうだとしてマア寒いかして大そうふるへて居るじやアねへかト言へども無口で居るゆゑに 判「何だ物も言はねへでハ、ア分解た那方の座敷で何か腹を立て來たのだなコウ餘所で爲た千話喧嘩を此身の所へ持て來て當つて呉ちやア迷惑だぜ。エエ此糸夫とも那程待つて居て呉ると約束を爲し置たのに此身が寢て居たから夫で腹を立たのかお前にも似合はねへあんまり初心な事じやアねへかコレサ何故無口で居るのだな様様に言つても物を言はねへなら潔るぜト言へどもやつぱり無口で居るゆゑイヤハヤ 判「強性な婦女じやアねへかそんなに言はねへと爲れば這方も意地だ斯うやつて口を利かせて見せやうト言ひつゝ、寄添ふ折しもあれ何様いふはづみか連子よりさし込む灯りに顔見合せ 判「ヤアお前はお園さんじやアねへかその「判さん勘忍してお呉なはい

ト言はれて恟り判次郎は夢かとのみぞ思ひける
是よりお園は此糸が深き情を物語りいたづらならぬ身の言譯を涙ながらにする程に判
次郎も今更に最前此糸が言葉といひ捨がたきおもひに其夜は更けにけり

春色梅美婦禰卷之十三了

春色梅美婦禰卷之十四

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第二十七回

七字の利益あらたかなる折の内の妙法寺へ日毎の參詣群集なす祖師の光りぞ尊とけれ這に
しがらきと家名せし當地に名高き料理店の門に徨む三人連 ▲トキニ梅舟さん何れ折の内
の歸りは小川か此店が定まりの建場だが鳥渡一口氣をつけた後は内店の拾奴とするとも
何様とも何れ御多分には洩れやすめへ ●イヤ拾奴と言へば豊倉の内へ妙な妓女が出やし
たゼ ×コレサお前は直に其方へ心を赴せてならねへマア其咄しは後段へ廻して南里さん
の説の通り爰で一盃といふ道行が極く妙サネ ▲夫じやア兎も角も吞でのうゑの御分別と
するが宜ひト言ひながら皆々しがらきの奥座敷へ通り程なく詭の酒肴も出て三個は飲かけ
ながら ×此邊じやア竹の子と蕨の匂がすぎるとのつべいと玉子とぢが座頭を持といふ料
理だから兎角山家の體は外れねへ譯サネ ▲イヤ然う馬鹿に爲たものでもねへノサ生肴も

喰はせろと言やアさりやすけれど、這所へ來ちやアやつぱり無鹽な玉子の方が洒落て居やすノサトキニ春好さん先刻ちよツぱり序びらきのあつた豊倉の妓女といふのは何ぞ夫に就て一奇談ありかネ。●あるのないと其様なちよツかな譯じやアありやせん寔に奇々妙々といふ因縁のある妓女サ。×何だかあんまり始の言立が大そうだから覺東ねへ咄しだ何れ眉毛に唾で聞く方が大丈夫らしい。●ナニサ此事におゐては正真正銘の實録サ夫じやア其他はみんな啞言だといふのか。▲ヲツト東西マア何にしる横槍を入れねへて聞くべしサ其處で其妓女が何様いふ因縁がありやす。●先その女の素性といつば。×天竺にては玉藻前▲そりや又はじまつた梅舟さんも困つた瘡の蟲だ。●全體斯ういふ性には柳の虫が一番だ打捨て置と鼻の下を赤くして線香や火鉢の灰を舐たがるものだから。▲イヤハヤ何方を何様とも團扇の楊やうもねへ譯だ寔に感心におしやべり遊ばすのでとふくく咄しは立消が爲て仕舞たやつサ。●ナニ梅舟さんが交るからツイ脇道へ咄しがなぐれてなりやせん閑話休題で眞面に咄すから聞なせへ。▲よしく聞てるからさつくと咄しなせへ。●其處でその女の本國が北國で當時西國に妓名をあらはして居るといふ筋だが何と面白からう。×何卒義理にも面白いと云ひてへが何分譯がわからねへから此御挨拶はお氣の毒ながら他々へお頼みなすつて下さいました。●ニウそんなに下卑ねへてマア聞なせへ餘程珍説だから

▲夫じやア其女は北國の山の中で生れたのが西國といふから九州あたりへでも往つて名を揚た譯かネ。×序に四國をもまはつて猿となれば宜かつたものに。●イヤモウどれもこれも咄しの解らねへ手合だぞ北國とは廓の事で西國とは當時新宿の事を云ひやす儲その女が北國の者で。×ソラまた分解ねへ北國の者とは薄羽織になる紗とは違ひやすか。●何様も然ういちく講釋が入るやうじやア咄しがならねへ者といふは藝者の事だアな。×なる程藝者が者かネ夫じやア幫間は紹だらう。▲アハハハ、其處でその紹が何様爲やした。●ナニ紹じやアねへヨ。▲ホイ間違つた者の事サ。●その者が情男をこしらへて。×ハテナ些と咄しが聞けて來そうだぜ其處で何様爲やした。●先その男の名は暫く説くべからずサ。▲×なる程夫から。●處で彼藝者が其男に血道をあげて居るもんだから男の方でも足駄を履て首ツ丈ケ。▲×勿論その筈の事だ。●併勤の身で見ればひどい工面でなくつちやア自由に逢ふ事も爲にくい譯だから揚屋町のさる婆アさんの内を内證で頼んで朝湯やお客にかこつけてちんく鴨の小鍋立サ。▲×うまいな。●それで知れずに居れば宜いけれども目角の速い那廓だから中宿這入をする事が直に五町へばつとして親方の耳へも這入たもんだから廓中を追ひ拂はれる當時這方の豊倉へ來て十匁となつたのだが容貌がめつぽう美のに氣前もので随分建引もあるといふのだから寸志はあるめへ。▲違へねへとして其男はやつ

ぱり離れずに居るのかノウ ●「ナニ這方になつてからはまだ往ねへ様子だけれども何れ然
ういふ燈木端じやア消きつて仕舞やア仕ねへノサ ×「そんなに美しいのを夫ほどまでにする
るといふなアどんな野郎だか見て遣りてへものだ ●「見たかア何時でも見なさるが宜ひ
×「夫じやアその男はお前の知つてる人か ●「知つてる處じやアねへ親子より兄弟より最些
と近い親類だものヲ ▲「ハテナ親兄弟より近い親類とは何だらうそしてその男の名は何と
言ひやす ●「唇なくもその情男と申奉るは斯く云ふ此身様だが何様だ是から直に附合て吳
る氣はねへか ▲「おきやアがれアハハハハ ×「此身ア大かたこんな落になるだらうと思つ
て味毛をしめしてかゝつたけれどもやつぱり被欺たやつサ ▲「何でも今日の奢りは悉皆春
好さんの持とするがいひアハハハハハ ▲「コウそんな事を言ふ手間で鳥後後ろを見
なせへすてきな婦女が来て居るから ●「何處に〜 ×「ソレ向ふの座敷についで建て仕切ッ
てのソレ ●「なるほどこりやア黒上々吉といふしろものだ ▲「違へねへ獨りは極く上品の
いひ大家のお嬢さまとも言ひそな處女だが最う一個のは何様見ても素人とは察はれねへ
然うかと言つて旦那らしい連も見へねへが何様いふ譯だらう ×「そんなに氣にする事もね
へ迎も此連中を見わたした所が何れを見ても山家育ち那處女の氣に入そな首は一ツも見
へねへマア此中でけんのは此身ばかりだ其證據は先刻ッから二個の處女が此身の顔

を見ちやア何だか嬉しさうに莞爾々々笑つて居るから ●「なるほどお前の顔を見て笑ふ筈
だ餘程人並外れて妙な顔色な處へのつべいの薄葛を鼻の先へべつたり塗り付て居るから夫
て好男子の心意氣じやア何分おさまらねへ ●「エ實正かト悔りして拭きながら ×「コウお
前達も憑もしくねへ然うなら然うと速く知らせて呉たが宜ひ事サト言ひながら少ししよげ
る ●「アハハハハハハハハハハト大笑ひになり何かくだらぬ事を言ひ合ひながら此一群は程
なく立ッてゆく折しも向ふの座敷にては 房「お京さん嘸お草臥でありましたらうネエ私さ
やア久しぶりでこんな遠路を歩行たら寔にがつかり爲ましたは 冥「私もネ駕籠なんぞに乗
つて往やうな氣じやア信心にならないと岑さんがお言ひだから我慢をして歩行ましたら寔
に最う草臥て〜 房「ホンニ然うでありませうともお前はんは別して内にばかりお在な
はるから其筈でありますヨ夫におまけにお百度を踏だので猶の事ネエ 冥「アレサそんな勿
體なひ事をお言ひだと罰が當るかも知れませんヨ 房「ホンニ然うでありましたネエ悪い事
を言つたヨ何様爲ませう 冥「ナニうつかりお言ひのだから宜うござぬますハネ私きやア是
ほどの思ひをして參つたのだから屹度お利益があらうと思ひますは 房「そりやアなくツち
やアなりませんヨ 冥「何卒一日も速く知れるやうに爲たいものでござぬますネエ 房「私さ
やアこれが萬一知れないやうだと生ちやア居られませんけれども先刻頂いたお籤の様子で

は近々に思ひがけない事で便りが知れるといふのだからマア楽しみかと思ひますはト言ふ
とき表の方よりして二十八九の個の婀娜女駕の儘にて入來りしが房吉を目ばやく見つけ
女「ヲヤお房さんト言ひながら莞爾笑つて駕より出るは梅曆にてお馴染の小梅のお由と知
られける

第二十八回

借もお由は思ひし通り千葉の藤兵衛の女房となりしより流石に派手な商賣柄とて夫につれ
て小口も利けば和歌町の娼妓達にも大嬢と立らるゝにぞ房吉は下地より米八の仕込ゆゑ別
てお由の世わにもなり最負にされし事さへあれば夫と見るより駈出して 房「チャ千葉の貴
嬢さんお前はんも折の内さまへお参りのでありましたかへ這處でお目に懸るとは寔に不思
議でありましたネエよし」私さやア先刻お前はん達が百度をあけてお在のとき見かけたか
らお房さんと言つたけれども知らない顔を爲てお在だネこんな婆アに同道になられちやア
困ると思つて空耳をはしませたのかへ憎らしいネエ 房「ヲヤまア否にお言ひなはるヨ正直
の事些とも知らないンでありますものをよし」ホ、ホ、ホ、アレサ然う眞にうけられちやアお氣
の毒だヨ眞實はネ先刻見かけた時は何だか一心になつて拜んでお在だからわざと聲もかけ

なんだけれども屹度小川か這處に休んでお在だらうと思つたから私もお百度をあげたり何
かして歸りに駕の人を頼んで氣をつけて貰つたら丁度這家にお住だから寔に嬉しかつたヨ
房「ヲヤ嬉しい然うでありましたかへサアマア此方へお上んなはい針言ふうちお由は座敷
へ通りお京に對つてよし」へい貴女宜くお参りてござぬましたネたしか這嬢は岑さんの。ノ
ウ房さん 房「ヲヤ何様して知つてお在なはいますエよし」ナニ何處でかお見かけもふした様
だから 京「ヲヤ然うてござぬましたかエ私さやアさつぱりお見それもふしましたヨ 房「お
京さん此方は千葉の藤さんのお内儀さんでネ私もお灸さんも寔に最う種々お世話になりま
すは 京「ヲヤ」夫じやア千藤さんのお在なさいますかへ夫ではたしか私が別莊の方に
居つたときよし」ハイ七種を見に參つた歸りにお寄りもふして御馳走になりましたヨ 京「ホ
ンニ然うてござぬましたネエ私さやア斯ういふ攻心だから寔に困りますヨホ、ホ、ト此う
ちお由も酒肴を取り寄せ盃の遣り取りありと知るべしよし」ホンニ房吉さん此間は岑さんが
御鹽梅が悪かつたさうだが最う快おなりのかへ 房「ハイ寔にちよいとした事が大そうにな
つてどんなに氣を揉んだか知れまじなんだが此頃じやア段々快い方てありますから其方は
マア心配もありませんけれども姉さんがとんだ事を爲て呉たので寔に何様爲やうかと思つ
て居るンでありますヨよし」姉さんとはお灸さんの事ぢやアないのかへ 房「其お灸さんであ

りますがネ基を言やア私が悪いのだから這所にお在なはるお京さんにも濟ない義理であります處をかへつて此お嬢が深切に力をつけてお呉なはるから夫で今日も折の内さまへお灸さんの事についてお参りを爲たんでありますがお嬢の表が大造宜ひから些とは楽しみかとおもひますヨよしアノウそんならお灸さんの往つて居る所はお知りでないのだネ 厩ハイ夫が知れて居るくらひなら氣を揉は爲まぜんけれども一向に手がかりもないのでありますから此様に騒いで歩行ますのサよしヲヤ夫ではまだお前がたの方へは知らせてないと見えるネエ 厩ヲヤ知らせないとは何ぞ手がかりでもあつた事がお前はんのお耳へ這入つたのでありますかへよしア、ナニ私も委しい事は知らないけれども此間亭主の藤さんの處へお灸さんの事について相談に來た人があつたから夫で知つて居るニサ 厩ヲヤそして何所に居るンでありますとへ 寓此間柳川亭の老女さんが降巫を呼んでお聞のときには何でも怖ろしい人に取巻かれて逃る事も歸るともならないと言ひましたがそんな所じやアござぬませんかへよしナニ一旦は怖いめにお逢ひだそうだけれどもそんなに何時までも歸る事の出來ない譯ではないノサ 厩ヲヤ憎らしい降巫だネエあんな啞言を吐て母公に氣を揉せてお錢やお米を取つて往たんだヨよしそりやア商賣だから詮方がないはネ此方が夫に知つて氣を揉むのが誤りサ丁度お前がたが可笑くもない事を笑つたり癩な事を言はれても節を合

せてお客に金を遣はせても夫が唄妓衆の商賣で安心して深みへはまるのも知らずに金を蒔散らすのはお客の方の誤りだから降巫ばかりを咎める事もないハネ 厩ヲホ、、然う言へばそんなものでありますネエ夫はそうとお灸さんは何様して居ますとへよしアノウお前は小稻さんといふ嬢を知つてお在だらうネ 厩ハイ浪花屋の小稻さんなら寔に最う姉妹のやうにして居ましたが那嬢は此春年季が明て今じやア四谷とやらのお爺さんの處に居るじやアありませんかよし其四谷のお爺さんの所に灸吉さんも躲はれて居なはるといふ事て其人の名がたしか市郎兵衛さんと言つたやうだヨ 厩ア、私も小稻さんの咄して聞きましたがそんな名でありましたよをして大そう俠氣な方じやアありませんかよしア、夫だから藤さんとも深交してお在だそうでネ夫で此度の事も相談にお在のだトサ寔に奇妙なものじやアないかネエト

彼灸吉が鎌倉の尼寺へ往んとて雇ひし駕轎が悪漢にて身を穢されんと爲れりしを不思議に其場を通るゝのみか彼祭禮の壯年輩に追手の難をも救はれて市郎兵衛が方に躲はるゝまでの仔細具に物語り

よしネ然ういふ譯だそうだからいそれと柳川亭の母公の方へ引渡してはお灸さんが尼にならふとまで思ひつめたのが何にもならないで只那嬢ひとり馬鹿者にされるのも可憐そ

うだからよく母公とも内々の相談をしてお前方の心の底をも聞たうゑて納りをつけないじやア後日に何事ぞあつては宜くないといふ市郎兵衛さんの深い了簡だところが那人ひとりの手際にも爲にくい譯もあるから其所で藤さんの方へ咄しがあつたのサ夫にまた幫間の萬蝶さんがお前の母公に頼まれたと言つて此事で氣を揉て居なざるから是にも規模を持たせるやうにと萬蝶さんの中へ入れて那人から母公の方へ渡つて貰ふ相談になつたのだからまだお前達の方へは咄す間がないのだらうヨ 京「ヲ嬉しい事でありませぬ私さやア姉上さんの行方が何様しても知れないときは死んでも言譯がないと思ひましたヨ 京「私も今のお咄して癪が治まつたやうな心持が爲ますは是といふもみんな折の内さまの御利益かと思ひますヨ 京「ホンニ然うでありますねエ夫につけても今度の事は私から起つたことでありませぬから姉上さんの行衛が知たと言つてのめく顔合はされた義理じやアありませんから母公に苦勞をかけたなりお糸さんに氣を揉せたりした言譯にやア髪をおろして折の内さまのお弟子になる氣でありますからお前は末永く姉上さんを見捨ないで和合してお呉んなはいヨ 京「アレサそんな心細い事をお言ひじやア否でござぬますヨ何卒何事は千葉の貴嬢さん前さんからお止なすつて下さいましヨよしア、そりやア房吉さん悪い了簡だヨお前の氣じやア義理に立るつもりであらうけれどもやつぱり人を騒がせる種だから何で三個が

心を合せて怨ツこいのないやうに峯さんを大事にするのが上分別サ夫はそうとお前達はたつた二個で誰も連ないでお在のかへ 房「アノウお京さんが内へ内證でお出のでありますからお店の人は連られませぬ詮方がないからまはしの佐助どんを頼んで来て貰ひましたら何だか此近所に鳥渡寄りたひ所があるといつて私達をこへ送り込んで往ましたヨト言ふとき佐助は歸り来り 佐「嘘お待遠でござぬましたらうイヤこれは千葉のお内儀さん寔に妙でござへましたネよし「ヲヤ佐助どん今まで何處へ穴ツ這入をしてお在だお内儀さんに然う言ふヨホ、、、 佐「へ、、、とんだ情人につらまつて麥飯と小米團子の御馳走によはりきりました 房「ホ、、、夫じやアねつかから氣が無ネエ。サアママ此方へ揚つて一口お呑りな前のお飯も来て居るヨ 佐「イエ今申す通りの譯で日光責に合つて参りましたからお前さん方のお仕度が宜くばそろくお出かけ被成ましお駕も二挺こしらへさせて置やした 房「ヲヤ然うかへ私達ちやアまだ足は大丈夫だけれどもこしらへたとお言ひなら詮方がないから乗つて進やうネエ 佐「へん負おしみを被仰ぜ先刻來とき浣橋邊からして餘程六ヶ敷歩行ツふりをなすつた癖に みなく「ホ、、、ハ、、、ト

是より三個は酒食も果て駕にうち乗り婦多りへとぞ歸りける

春色梅美婦禰卷之十四了

春色梅美婦禰卷之十五

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第二十九回

辰巳の園にて御存知の那丹次郎が佗住居せし其路次口へがた／＼と今湯歸りの米八が駆込
まんとせし足元に落散る文を取り見れば

丹 さん 内用 あ 印

ト上書をなしたるがはや封じめは解きてあれどつけたる粘さへ乾かねば今届きしを丹次郎
が兎相で落せしものならん如何なる文かとおしひらけ

此間御はなしの人参り候まゝ急に／＼御めもじのうゑ身のうゑの事御相
談いたしたく候へば小池の二階まで御出のほど願ひ上り／＼尤彼わけも

候ゆゑ米印へは先刻沙汰なしにて此人と御一所に鳥渡／＼御出被下へく候

大いそぎ早々めでたくし

ト小杉の鼻紙に書たるは兼て見知りし婀娜吉が手跡に紛れあらざれば米八は胸にギツクッ
堪り兼たる例の痘癩帯ゆりあげつゝその儘に小池をさしてぞ駆出しゆく偕もその頃婦多川
に小池といへる料理屋の其奥二階に何やらんしんみりとせし嘶し聲あだ直丹さん今母公が
言ふ通り田舎の叔父さんが尋ねて来て私の體を身まゝにして遣りたいと言つて七拾兩とい
ふお金を出して呉たシでありますから夫で私が足を洗つて素人にさへなりやア又叔父さん
の方で少しぐらひの元手を出して母公と私が口養居るほどの小商でもさせて遣らうと言ふ
ンでありますけれども私きやア米八さんといふものゝあるお前はんを横取を爲て米八さん
と顔を赤め合つたのを今となつて考へて見ると何様も濟ない譯でありますから爰で米八さ
んにひとつの規模を立させたらうゑで私が身拔を爲ないじやア此和歌町で婀娜吉と些たア顔
も知られた者があんまり意氣張のない唄妓だと思つた跡までも言はれ種になるのも口惜いし
又那嬢にも濟ませんから此度の七十兩で米八さんの身請を爲て進る相談に母公とも斷合を
爲て今善孝さんを頼んで中裏の親方に掛合て貰ふ積りに爲ましたから此間も鳥渡お咄しも
ふした通りお前はんは米八さんと一所になつて何様にも爲て取りつゝひてお呉んなはれば

夫で私の顔も立し其内にやア又叔父さんと相談を爲て私も身拔のなるやうになりやア米八さんと同居になつてお前はんを大事にもなりませうから此相談が出来たうゑで米八さんにはお前はんの口から私の心いきの通るやうに宜く咄してお呉んないヨ全躰此事を米八さんにもはやく咄したひんでありますけれども那通りの氣性だから屹度私に義理を立て得心は爲なはるまいかと思ひましたから事の究つて仕舞までは那嬢には沙汰なしの方が知らうと夫で先刻の文にも米印へは沙汰なしと書て進たんでありますヨ 丹なるほどお前の心意氣は極美しい譯だけれども夫程までに爲ないでも顔の立ねへ事もあるめへぢやアねへか尤此事は此身の口から何方を何様とも言ひにくい譯だけれども折角叔父さんが大枚の金を出してお前を身儘に爲やうといふ金を他の事に遣つちやアあだ、イ、エ其事は母公とも種々相談をしての事でありませう。ノウ母公 母アイサ基田舎の叔父といふのは私の弟でござるますが少しの事から中違になつて久しく音信不通で居りました所が互ひに年を取るに随つて張合つた意地も抜け兩方がなつかしく思つて居る所へ今度鎌倉へ用が出来て弟が登つて來ましたもんだから昔の意根をすつぱり捨て娘の身拔に大枚の金をも出して呉れたんでござるますがネ尤弟は俠氣な者でござるますから娘が米八さんに義理を立る咄しをすれば急度此嬢の顔の立丈の事は爲て呉れやうと思ひますから何卒娘を人中で流石は和歌町の婀娜

吉だと言はせるやうにして下さいましたと言はれて今更丹次郎も止めかねたる折こそあれ一階階子の口よりして米八「婀娜吉さんお前はんの顔は私が屹度立ますヨト言ひつゝ一間へ入來る米八後につゞいて櫻川善孝 善モシ婀娜吉さんお前のお頼の事は中裏へ掛合つて首尾よく方をつけやしたから安心してお呉んなせへ然うした處で折よく米八さんに逢ひやしたから一伍一什の物語をして同道に連れて參りやしたあだ、ヤ然うでありましたかへ寔に有難ふホンニ米八さんお前はんの氣じやア出過た仕方だと思ひでもありませうけれども何卒私の心をも察して不務してお呉んないヨ 米どふして、お前はんの心意氣を聞ちやア自分の身が耻しうありますヨ正直の事は先刻湯から歸りかけにお前はんの所から丹さんの處へ行つた文を拾つてネ開て見たらば身のうゑの御相談が爲たいから米印へは沙汰なしで小池まで來てお呉んないといふ文言だから斯ふいふ事とは知らずグツト癪に來て何でも私を出し抜てお前はん達が宜事をお爲のだらうと思ひましたから小池の二階へ往つて思入言つて遣らうと駆出して來る途で善孝さんが段々の咄しを爲てお呉なすつたんでありますヨト言ひかけて善孝の方を見かへり 米是から私の思ふ所はお前はんから言つてお呉んないな善「ヲツト呑込で居やす其所で婀娜さんお前の心意氣を咄したらよの字も大よるこびで然らうまで思つてお呉なざる事なら私の年季證文は婀娜さんから慶斗をつけて貰ひませう其替

りにやア婀娜さんの身うけは私が爲るから其證文も請取ッてお吳なさるやうに和合へ這入ッて吳ろと米公の頼みだが何様たらうネエあだ、そりやア私の方のを聞わけてお吳なら又米さんのお蔭で私が身儘になられる様に爲てお吳なればどんなに嬉しひか知れませんヨ善、夫じやアマア米さんの證文を七十兩と引替へにして持て來やしたからお前の手から米さんに渡しなせへト年季證文をさし出せばあだ、夫じやア米さん私の顔を立て貰つてお吳なはるかへ、米吃度恩に着て貰ひますヨ其替りにやア私の進るのも取ッてお吳なはいヨト懷から婀娜吉の年季證文を取いだし渡すに驚く一座の人々兼て利發な米八なりとも今さしかゝりて大金を調達はなるまじきを如何して婀娜吉の身の代金をこしらへしやと更に疑ひ晴ざれば思ひかねて丹次郎、丹、コウ米八今となつちやア何方の最負をするてもねへがまづ婀娜吉が自分の身請を止にしてお前を身儘に爲やうと言ふは寔に見あげた心意氣夫をお前が直素にうけて其返禮に婀娜吉の身請を爲て遣るとは意氣張づくに取ッちやア其通りの譯だけれども婀娜吉の身請だつてはした金では出來めへが其金はマア何様して出來たのだ米お前はんに借りましたヨ、丹、コウ何を言ふのだな何様して此身が其金を、米アレサマア宜くお聞なはいヨ婀娜さんの志が嬉しいから一旦身請を爲て貰へば私の體はお前はんの物でありませう其體を又借て直に以前の通りの抱女になつて夫て婀娜吉さんの身請を爲たん

243

でありますから斯うすれば婀娜さんの顔も立私の思ひも通るじやアありませんかト言はれて皆々感心せしがあだ、米さん私さやアお前の利發にやア何様しても叶はないヨ夫だけれども折角私がお前はんをトいふを引取り善孝が、善、コレサあの字お前の心もよの字の氣も此身ア初手から知つて居るから逆も兩方が意氣張てお前の思ふやうにはなるめへと思つたけれども山の喧嘩の其後は表向は美事に附合ツても互へに胸には一物があるであらうと思ひのはか婀娜さんが今度の頼み假令米さんは然うせずとも是で互の信實が兩方へ知れ合へば中へ這入つた甲斐があると夫で斯ういふ譯に爲たがお前の顔は立つたじやアねへかあ、夫は然うでもありませんけれども米さんを又抱女に爲ちやア何様も心が濟ないネエト獨り心を痛る折しも、米婀娜吉さん、アレサ夢でもお見のかへ大そうなされてお在だヨトゆり起されて目を覺しあだ、ヲヤ今のは夢でありましたかネエ、米轉寢をお爲のかへ私さやア今お由さんが梅を見ながら迎島の岑さんの別莊へ大勢連て往くからと言つてお在だからお前を誘ひに來たのだヨト言はれて漸々婀娜吉は人心地にぞなりにける

什麼婀娜吉が如何なればかゝる夢をば見しぞといふに以前婦多川にありしとき男を争ふ意氣張より山の茶屋にて米八と大争論なしたるのちは敵同士のごとくなりしが程なく婀娜吉は病氣づきいと、難義の其折から怨を捨て米八が身に引請て見繼たる其信

切のわすれがたく今は丹次郎が世話になり斯安々と暮すにつけても何卒して米八に昔恩を報ぜんとの思ふにつけておもはずもかゝる夢をば見しものなるべし

○此時丹次郎は本家へ歸參しお蝶と米八をば本宅に置き婀娜吉をば別宅させて皆睦まじく暮す事辰巳の園の第四編に委しく著し置たれども首尾の前後をするにより看官見惑ひ給はんかと再び這回に記せしなり

第三十回

偕もお京と房吉に折の内のしからさにて小梅のお由が咄せしとほり彼お糸の身のうゑは市郎兵衛が引請て萬事藤兵衛と相談のうゑ彰簡の萬蝶よりお糸の母へ言入さすれば柳川亭の母親は娘を一個拾ひしごとく其よろこび大かたならず早速岑次部の母にも報知て相談に及ぶ程に今度は名に應ふ藤兵衛と市部兵衛が世話なれば女ばかりの了簡では返答もなりがた餘義なく岑次部の父にも報知てお糸お房が身の治りを如何なさんと談合へば父も昔は小金も便し通者の果なれば今更に叱言も言はず此上は藤兵衛と市郎兵衛に任するあいだお糸お房の身の片付又岑次郎が此末とも放埒のなき様によく／＼きたへて下さるならば金子のところは何程なりとも此方にて出さんなれば見苦しくなきやうに取斗ひを頼むよし返答に

及びしかば藤兵衛と市郎兵衛は種々と相談のうゑ迎島の別莊を修復して先お糸をば是に移らせお房をも婦多川より引取りて柳川亭の母侶俱に是をも同じ別莊に住はせお京は素より本妻なれば以前のごとく本家にありて舅姑に仕ゆるにぞ是より岑次郎も心をあらため家業に精を出しつゝ本宅と別莊に替り／＼に寢起してみな睦しくぞ暮しける兎角する間に其年も暮れ又立歸る斯玉の梅咲く春となりしかばかゝる愛度身となりしも藤兵衛夫婦と市郎兵衛が一方ならぬ信切にて厚き世話にもなりたる事ゆゑ是等の人をばじめとして知己人々を梅見がてらに招かんとして其由を觸まはせば此日迎島の別莊へ寄り集りし人々には

千葉の藤兵衛 小梅のお由 四谷の市郎兵衛 同娘小稻 丹次郎 お蝶 八十八おてふの子なり
米八 婀娜吉 お米 あだ吉のむすめなり 判次郎 お糸 此糸のとなりこれよりさきに廊を出て判 八十八おてふの子なり
次郎の妾と 増吉 ふた川のげいしや今 清元延津賀 櫻川善孝 同新孝 萬蝶 和十 是等の人々を始として猶此他にも太夫唄女大勢連にて入來れば彼別莊には岑次郎お京お糸お房等は夫と見るより出迎へ 岑イヤ是は皆さんお揃ひて宜く來てお呉なすつたネエお由「お前はんがみんなを連れて來て呉れろとお言ひなすつたから梅曆以來お知己になつた人を大方誘ひ合せて來ましたヨ 唇寔に嬉しいネエ 衆「ヲヤ米八さん寔に姑く米八「今日は嘸おやかましうお前はん此方を知てお在かト丸髻に結つて素人風になりし此糸に指をさす 衆「ヲヤ娼妓で

ありましたかへ元眼をお爲なすつたらネエお房さん 房ア、私も寔にお見それ申ましたヨ
 参「無婆アになりましたらうネホ、、、参「イ、エどんなに宜ひ御新造さまでござぬませう
 房「ヲやお蝶さんもお園さんも宜く今日は 蝶「ハイ有難ふお京さんもお糸さんも有難ふ
 お虫「ヲヤ、大そう御丁寧だノウホ、、、房「ヲや婀娜吉さんはエ米八「今外方でお米坊
 に小使を遣つて居るヨモウ、子持になつちやアいくじはないネエホ、、、蝶「ヲヤ些と
 耳が痛いネエ舞臺へ障るヨ あだ吉「イ、ヨお蝶さん無口てお在米八の嫉妬やアイト態と大き
 な聲でいふ みな「ヲホ、、、ホ、、、藤兵衛「イヤハヤ騒々しい爰で此人數が一々挨拶を
 爲やつちやア作者が堪らねへから先上へ上つての事とするがいひと是よりみな、座敷へ
 通れば兼て用意の酒肴を所狭まで置並べ心を盡せし饗應に盃の數重なれば互ひの藝づくし
 諠ひさめく梅の春幾世かさねて老松の末のすへまで契り合ふ歡びの聲笑ふ聲ドウ、ド
 ット此家のうちに納むる筆こそめでたけれ

梅曆より幾十卷か編數を重ねしを這所に全く局を結べば又首卷より繰返して見させ給
 へと給ふになん 販元文永堂主人

春色梅美婦彌卷之十五大尾

風月花情 春告鳥の序

僕四十雀の不惑といふ歳なれど。澤邊の鷺に異ならず。野呂里として家事に疎く。戯作を
 鴻雁の活業に。風雅も洒落もあらされど。人情ものを巧婦。それが鴿の愛鳩となりて。果
 なき鳴を喜鳥は。かの明鳥を筆果報の始とし。今猶書林へ鴿の橋渡しとはなりぬ。されば
 鶉の一より算えて。千鳥の數に滿る中本。山鷄の尾のながしく。後を都々けて鷺の山
 と積。翡翠の河より深き。看官の御ひいきを。空行雲雀の高く仰ぎ。惠に供ふ一趣向を鶴
 らつらと翻案ど。毎時初音の手がらはなく。元來鶴の一聲に。寝りをさます奇談も雉も。
 しるし兼たる短才は。譬にいふと燕雀の。鵬の覺をばづ。とはいへ拙著の外題をも。喚子
 鳥の得意もありてや。水鶏にあらで庵の戸を。たたく知己さへ少からず。いつも著述を鶴
 鴿なれど。稻負鳥いなみがたくて。夜を以て日につく鶉の。はや故しらは鴿の苦勞。鶉
 は脾弱き作者の文盲。夫を都鳥の鴿たちは。鳩に穴を見出して。高く伺ふ鶉の目に。笑は
 れんことは。おそるれど。世活なれば鴛鴦つよく。鳩に三枝の禮もあり。また愛敬も在ま
 すと。小陵鳥を賞て。日鵲をゑらみ。春告鳥を販元に贈り。四方にその音を傳へんと願ふ
 のみ

東都人情本の元祖 金龍山人狂訓亭
 爲 永 春 水 誌

はつといふ名に客人はあくまでもあとをつけたる雪の中裏 故人 三馬
故人の作りし敵討を人情ものにかきかへたれば病刃を抜うといふ所を握こぶしの兩あられ
命を落す一段を金ゆゑくるしむ難義におとしたとへ死んでも蘇生すべての趣向今様の道理
にかなふを旨となしむかしばなしか本にでもありそふなといふ目前を除れめでたくつゝり
し勸善懲惡

江戸金龍山人 爲 永春・水

◎卷中の目録

◎上の卷は廓さとの鶯

なくねゆかしき閨の戸に思ひもよらぬ昔語はまゝになりたき籠の鳥

◎中の卷は藪の鶯

はつ音やさしき垣根越にもれて聞ゆるさゝめごとは思ひがけなきすだちどり巢立鳥

◎下の卷は庭の鶯

音色うれしき園ひの中に情のこもるかねこい兼言は木枝になれし庭の鳥

三卷六章目次畢

花月 春告鳥の序

僕四十雀の不惑といふ歳なれど。澤邊の鶯に異ならず。野呂里とし
て家事に疎く。戯作を鴻鴈の活業に。風雅も洒落もあらざれど。人
情ものを巧婦。それが鶩の愛鳩となりて。果なき鳴を喜鳥は。かの
明鳥を筆果報の始とし。今猶書林へ鵲の橋渡しとはなりぬ。されば
鶉の一より算はて。千鳥の數に滿る中本。山鶏の尾のながくし
く。後を都ゞけて鶯の山と積。翡翠の河より深き。看官の御ひいき
を。空行雲雀の高く仰ぎ。惠に供ふ一趣向を鶉うつらと翻案れど。
毎時初音の手がらはなく。元來鶴の一聲に。寝りをさます奇談も雉
も。しるし兼たる短才は。譬にいふこ燕雀の。鵬の覽をばづ。とは
いへ拙著の外題をも。喚子鳥の得意もありてや。水鶏にあらで庵の
戸を。たゞく知己さへ少からず。いつも著述を鶉鶩なれど。稻負鳥

いなみがたくて。夜を以て日につく鶺鴒の。はや故しらゆは鶺鴒の苦勞。鶺鴒は脾弱き作者の文盲。夫を都鳥の鶺鴒たちは。鶺鴒に穴を見出して。高く伺ふ鶺鴒の目に。笑はれんことは。おそるれど。世活なれば鶺鴒つよく。鳩に三枝の禮もあり。また愛敬も在ますと。小陵鳥を賞て。日鶺鴒をゑらみ。春告鳥を販元に贈り。四方にその音を傳へんと願ふのみ。

東都人情本の元祖

金龍山人狂訓亭

爲永春水誌

◎巻中の目録

◎上の巻は廓の鶺鴒

なくねゆかしき閨の戸に思ひもよらぬ昔語は

まゝになりたき籠の鳥

◎中の巻は藪の鶺鴒

はつ音やさしき垣根越にもれて聞ゆるさゝめとは

思ひがけなき巢立鳥

◎下の巻は庭の鶺鴒

音色うれしき圍ひの中に情のこもる兼言は

木枝になれし庭の鳥

三卷六章目次畢

はつといふ名に客人はあくまでもあとをつけたる雪の中裏

故人三馬

故人の作りし敵討を人情ものにかきかへたれば白刃を抜うといふ所を握こぶしの雨あられ命を落す一段を金ゆるくるしむ難義におとしたとへ死んでも蘇生すべての趣向今様の道理にかなふを旨となしむかしばなしか本にでもありふそなど目前を除れめでたくつゞりし勸善懲惡

江戸金龍山人 爲永春水

◎土の谷お龍の流

◎春中の日記

風月春告鳥卷之一

江戸 爲永春水 著

第一章

さまざまのことと思ひ出す櫻かなその櫻節憂ことをわすれさせんと勧められ迎島の別荘よりうしやの土留木を二人連おとなしき風俗の息子と櫻川善孝 新若旦那マア私にたまされたと思つて例の所へ往て御覽じましおめへさんにやア急度お氣に入るにやア相違ごせへません此間も若竹の兼八が貴君さんのお噂を申て今度出来た薄雲さんを是非あなたに出會し申てへとくれぐれ左様申て居ました 鳥そりやア有難へが相方で出るか何だか知れるものかな 新ナニく大丈夫でござへますト いふとき乗切の船頭小舟 サアお乗んなさいまし 新ヲイくこれは御苦勞サア若旦那お乗なさいまし 鳥アイ汐があるから洲を乗り切るに樂だト 二人はのりてむ 鳥エ、コウ此洲へ犬が幾疋も来て居て汗の下る間平氣にあそんでゐるからおかしいノウウ 新左様サ江戸の方の犬は斯いふ世界は知りますめへ 鳥左様サ犬の世界と

はありがてへハア、トはなしてゐるうち舟 新トキニ若竹へお寄なせへますか 鳥左様ヨ
 門口から聲をかけて往ふそして師匠さんに往て貰はふ 新それだと宜ございませすが延津賀
 も弟子が多いから直にいかれ、ばよふござへませすがトはなしながら若竹へこへをかけるに戀わくほ
 のくるわにいたりかたてこゝろあてある加田玉
といふ青樓にこ
 そのほりける そも、二階の結構よりその盛なる繁昌などはいはずと諸君の推にまかし
 て人情の要をのみしるす偕爰に櫻川の伴ひし息子といふは大分限の秘藏にて名を鳥雅と呼
 び寒葉齋綾繼の門弟好雅にして風流なりさて相方の貴嬢といふは玉樓日の出の全盛にて薄
 雲と名を知られ二とは下らぬ立者なりそれ十二疊のざしきは奇麗に片付て衣桁にかゝりし
 仕掛の上着は黒天鷲絨へ金糸銀糸にて荒磯を縫せ重ねも同じこしらへなりさて床の間のか
 りり袋棚遊棚すべて好みの造作ならんか床の掛ものは又平の古彩色せし時代の女繪薄端の
 花筒にいまだ何も生ざるは一馬の弟子にておゐらん自身に花の來るを待ゆゑか唐木の机に
 猩々緋をかけ鯉丈が遊び細工にこしらへたる硯屏時鳥の羽根のちり拂ひ孔雀の羽根があり
 そふなるところを女郎花の造り花をさして小さき短尺に

夕ざれば身は仇し野の女郎花

まくらさだめぬ秋風ぞふく

といふ歌をしるして付たるはたしかに歌堂文雄の弟子にてあるべし伊勢物語と湖東抄の上

に田舎源氏と諸國物語が載てあり大小の琴二面尤おゐらんが調へると見へてこまがかけて
 ある儘立かけたるは今急に片付たると思はれたりまた次の間の八疊にはお定りの蒔繪の簞
 笥長持用簞笥鏡臺蠅帳にいたるまで細々したる小道具をうや／＼しく並べ夜具は金欄の額
 縁の三ッ蒲團おなじ夜着の裏はもゆるがごとき緋ぢりめんかゝる手厚きありさまにては定
 めて圍ひもありぬべしなほ座付のさまをしるさば倦たまはんことをおそれてこゝにはふき
 ておかた付の後をかたらん既に鳥雅はヒツそりとせし床に只一人つれ／＼とせし所へ新造
 薄菊寝まきを出しきく「モシゼこれをお召かへなましト中形ちりめんの花色うら黒天鷲絨半
 ゑりのかゝりし小袖をいだす 鳥ナニ／＼これでいゝヨきく」それでも皺になると明日見ツ
 ともなふござます 鳥もふ寝たから面倒だ堪忍してくんなきく「アレサそれでもおゐらんが急
 度も床着を上ませふとお言ひなましたから私が叱られいすものウ尊君は着もの、皺になつ
 たのは寔に嫌ひでお出なますとおゐらんがお言ひなました 鳥今私はじめて來たおゐらん
 が着物の皺になつたのが好か嫌ひかおめへたちに知れるものかきく「ヲヤそれでもおゐらん
 が左様お言なましたからお着かへなましサア／＼ト無理に起して襦袢まで脱せ不殘たゝみ
 て簞笥の引出しへ入れきく「ヲヤまだ帯もおよこしなましそして此帯をおしめなまし 鳥よ
 くおめへはおゐらるを責るのふきく「ヲホ、、それでも私が叱られますものウ 鳥モウ／＼

んに氣があるときさそれだから油断はなりイせんきく「ヲヤおゐらんはあんなことをトさもきどくそふなるかほい薄うす菊さんも氣があるからぬしの來さした節繪に書た様な客人が來なましたといつそ氣をもましたつたヨトいはれてしんぞうはいよく顔をあかくする年は十六なれどもいたつておとなしきうまれつきの娘と見へたり

第 一 章

薄うす「ぬしのことを繪に書た様な客人だと申イしたのは私ちアありません雲井さんでありイすものを薄うすきく「何でもよふさま早く片付てお休みなまし兒女はどふしイしたきく「ア見なまし禿ふた兩ながら居眠りをしておりイす怠慢ねへトいひつゝ櫛とかんざしをかみにてふき箱へしまつておる薄うす起して其所を片付させまし癖になりイすきく「アイノト立て禿を起し三人にて座敷を片付暇乞して休みし後にて薄雲は上着を脱てひよいとふり出し鳥雅の呑み残したる茶をぐひと一口に呑みそのまゝ側へ寄そひて涙をはら〜と落し聲をくもらせて薄うすモシエ鳥雅さんへそれでもわかりイせずは徳町の若旦那へ鳥うすナニ徳町の鳥雅といふ名までくはしく知つて居るのかへ薄うすぬしは覺て居なんせんも無理とは思ひイせんがぬしに始てお目にかゝりイしたのは今年で丁度三年あとしかも九月の十三日祭の夜みやの前の暇踊り屋臺の手見せの上くあの衣裳でお座敷をとお祭行事のお方がお頼みなんして龍極の勘太さんといふ踊子と相方に

なつてぬしの所の二階のおさしきで小町の役を踊つたのは私さます薄うすエ左様かそれぢやアあのとときじうだんに薄うす惚たなんぞと云なましてからかひなましたそのあげくお落しなした薬入トいひながら銀の毛ほりのからくさの合口のちいさいくすりいれをいだしてこれ見なましぬしはなんとも思ひなんすまいけれご私やアモウその時にどふぞと思ふ心から萬一これぎり逢れなひ様になつたらぬしのかたみと心付て欲氣はさら〜おッせんけれど肌身に添て持たさゆゑお貰ひ申イした此品か朝夕はなさすもつておりイす今後ぬしの噂をお聞申イしたら和歌町のお濱さんと深ふかひ中でお出なんすとはしいわけを聞イしてはとも年のいかない私なんぞか何と思つてもおよばなひことだと悲しく思つておりいすら種々の薄命でとふ〜斯いふ身になりイしてなほ〜ぬしを戀しひと思ひイしても耻かしらしく今さらに文を上申すこともなりイせず心でばツかり久しい間おしたい申ておりいしたト涙とともにながき過越方の物がたりに鳥雅もすこし涙ぐんで鳥うす左様いはれて見れば覺もあるがあんまり嬉しすぎて夢のようだ薄うすアレサ茶にしておいでなますナコレ見なまし不躰らしいことさますがよく〜深く思ひイすればこそぬしの定紋を私の紋に付イして重栴檀は重ねてまたお目にかゝるを心のねがひトいひながら鳥雅の顔をじつと見つめて涙の笑貌莞爾とせしうつくしさ薄うすモシエどふぞ見捨ずに來ておくんなましなトしみ〜といへば鳥雅は薄雲の顔を見て鳥うす初會の

身分でだまされると思ふも自惚だが今の様なことをいつておゐらが實情になつて通つたらどふする其時は氣休めが後悔だらうぜ 薄「それぢやア私が申イすことをうそだと思ひなますのかへ 鳥「サア啞か實か知らねへが斯いふことになることゝは夢にも知らぬ昨夜の夢 薄「夢にも思はぬ夢とはエ 鳥「さればサ今おめへのいつた三年以前の祭の夢におめへと情人になつた夢を見たが目がさめて少しふさいで居る所へ新孝が来ておゐらんの噂此方も知らず新孝も知らず此所へ来て見ても唯うつくしいおゐらんだと思つてばかり居た所へおめへの方でそれはどまで覺へて居てくんなさるとはありがてへしかしまア何にしても迷ひの種をはじめたがどふぞ氣をもみたくないもんだ 薄「ほんとうに夢に見ておくんなましたのかへ 鳥「左様サふしぎではなひかネ 薄「夢に逢と實正には最逢れなひといふ事ではありませんか 鳥「ナンノノノ廻りあはずはしかたもねへが今夜斯して再會て見ればもはや別れる様な苦勞はありいすまひかねへ 鳥「そりやアおゐらんの心にあることだおゐらが何と思つても今までの情人に對して義理や情だてをした日にやア只一通りに呼でくんなさりやア格別まア氣休にも今夜のやうな仕うちて呼ばれて見ればツイ此方も自惚でどふぞ耻をかゝねへ様にとしげくくればおゐらんの邪魔にもなるといふものだから是非この調子がくるふのサそれだから氣をもみたくないといふのはナ 薄「ヲヤどふして私に情人の何のと其様な

ものがありイすものか實に心ぼそく思つて居りイす身の上さますからどふぞお氣に入らずとも後生だと思つて来ておくんなましなエエ若旦那さん

そも青樓の夜そ更てはるかに聞ゆる餅つき唄は土手の北より箕輪の方へ唄ひゆきこねどりの音はしん／＼たる座しきの内にかすかなり

風月花情 春告鳥卷之一了

そしてマヤ薄着ぢやアねへかこれをその上へ引かけやト今まで寝まきに着て居たりしはな
 勝見の大形の縮めん半衿のかゝりし小袖をお民のうしろから掛けてやるお民はびつくりして
 これを脱ぎわきへおいてたみどふいたしてまア勿躰なふございますトいひつゝ立て次の間
 へ行を呼かえし 鳥「コレサ〜遠慮せずとそれをまア着るがいゝそしてそれは直に手めへ
 にやるからいゝはなトいはれて嬉しく手をつけてたみ「ハイありがたうぞんじますけども勿體なふござい
 ます 鳥「ナニかまふことはねへ直に着やヨそして其所の爐で火をこしらへて釜をかけたな
 たみ「ハイお茶を遊ばしますか 鳥「インニヤ茶はたてねへが勝手へゆくと久助が目を覺して
 氣の毒だおれも淋しいから何もかも側でこしらへるがいゝ先刻釜へいゝ水を入れておゐたそ
 して丸机の上に豊島町の茶を置たからあれを入なたみ「ハイ清風軒のでございますか 鳥「よ
 く知つてゐるのたみ「ハイアノ豊島町の伊勢屋吉兵衛と申すのは此頃は太そふによく賣れま
 すと申て評判がよふございますトいひつゝ茶の湯のどふぐをならべてちやをこしらへにかゝる 鳥「コレサその衣服を着ねへか寒
 といふのにイヤ〜それよりかいゝものがある是にするがいゝ久しくわすれて居た衣服
 があるといつた所が行丈が間に合へばいゝがトいひながら錠をおろせし箆筒の引出しより
 取いだすは唄女お濱に着せるとて呉服屋へあつらへ置しがその出来ざる中にお濱の行衛は
 知れず捨て置けれどと呉服屋の迷惑を察しいづれたづね出して着せる時節もあらんかと仕

舞置しを思ひいだしてその衣服をとりいだすも好みに任せてこしらへ置たる衣裳の染色
 はいかにといふに千筋の山まゆ縮緬の御納戸裾まはしは引返し極上紅の胴裏紋はずが縫ひ
 の重桔梗なり裾へ銀糸にてまことに細かに八藤をちらしに付下着は京縮緬へ藤色にて吹寄の
 形を染たる無垢二ツ緋の紋ちりめんの對丈襦袢白天鷲絨へ銀糸にて三津五郎縞を縫せし半
 衿をかけ白の紋練へ大極上々の本紅をうらに付たる蹴出し媚茶の紋こはくへ黒糸と紫の糸
 にて三津五郎縞を蛇腹ぶせに縫はせし九寸巾の帯もつとも鯨合せ片めんは松葉色の勝山へ
 金糸にて八ッ藤を五分ほどの大きさに縫はせもつとも六七寸間に飛々に付たりさてこの揃
 ひし品を取出し 鳥「コウ〜お民これを見て見なト行燈のまへにならべおけばお民は肝を
 潰して鳥雅の顔をながめていたりしが たみ「あなたはマア今夜はどふか遊ばしましたか
 鳥「ナゼ〜たみ「それでもあんまり私をおなぶりおそばすからサ 鳥「ナニ〜なふるのぢや
 アねへそのかはいらしい顔へこれを着せたならばなほうつくしい姿になるだろふと思つて
 だサア〜ちよつと着かへて見せなたま「イ、エどふいたしまして其よふな大そふなもの
 私に似合ひますものか第一ばちがあたります 鳥「つまらねへことを言はずとマア着て見ね
 へかたみ「どふぞ御免あそばしませ 鳥「ナゼばちがあたるものかサア着ねへかはだかにして
 外へ追出すがいゝかト笑ひながら立かゝればお民ははづかしく身を縮めて迹にかゝるを引

とゞめ 鳥「サア／＼だれも見はしねへマアちよツと着かへて見せやト責立られて詮方なく
 たみ「左様ならばマアそちらへいらしッて下さいまし 鳥「ドレおれが手傳ッてやらふたみ「ア
 レ御免あそばせ私が一人で着ますヨ 鳥「サアこのゆもじも襦ばんもそつくりと着かへて帶
 もめて見せなたま「ハイ寔にこはひ様でふるへますヨト娘心の正直に着馴ぬ美服を着ること
 を嬉しさはさに身をふるはすといふに等しき言の葉は外聞作すまよりゆかしけれお民が衣服
 を着かへる中に鳥雅は蠟燭をいだして燭臺へてらし 鳥「サア／＼こゝへ来てよく見せやト
 いはれていよ／＼恥かしくもじ／＼するを手をとつて明光へ引出されうつむく笑顔のかは
 ひらしさ雪よりしろき衿元より照らされてなほうつくしき素顔にはんのり目のふちの櫻色
 どる上氣の風情今着せかえし衣裳には久しくこめたる匂ひ袋のしみて色濃きその蒸り昨日
 今日には見ちがへたりこれ深窓の娘なるを衣裳のこのみに洒落たる姿となしたるがごとし
 鳥「コレサ其様に顔をかくさずとこちらへ向てよく見せなトあかるき方へ向はせける

第四章

馬士にも衣裳の諺ならでこれは美人に錦を着せて見てまだ足らぬのは髪のかざり紅白粉べにしろいの
 揃はぬがおしき様でもつれ／＼に月花のたとへ思ひ出る鳥雅の心には十分なるべし 鳥」と

んだよく似合たそして肩上のねへ着物を着たら大そふに形が大きく見へるおつなものだ
 たみ「どふいたして私に似合ますものか今まで此様な奇麗な衣裳は着ましたことはございま
 せんものをマア窮屈そふにしてゐたりしがたみ「よごしますとわるふございますからはい
 着かへて仕舞ひませうしはになりそふで心配でなりませんと立をとゞめて 鳥「着て居ても
 いゝはなわるくなつたらまた拵へてやらア たみ「エイこれはマアどなたのでございますエ
 鳥「そりやアおれが急にかはゆくなつたかはいらしひ娘の衣類ヨ たみ「左様でございますか
 それではなほわるくいたすと濟ませんはい着かへてお茶にしませうト爐の際へ立て行後
 姿を見てあれば年より少し大がらにておしたてよく何處やらにお濱に似たる風俗なれば鳥
 雅はます／＼心によるこびるお民は土瓶に湯を汲わけ茶をほらうじていれ湯呑に汲で茶臺
 にのせ鳥雅の前にさし出す養花も花の山吹や實のなき戯言か知らねども一枝折て貰ひたき
 心の願ひ七重八重笑みをふくみてさしだせば 鳥「ア、引いゝ色に出たドレ／＼あの菓子簞
 笥を出しなそして手めへも吞なたま「ハイト菓子入を持て来るその引出しより極製の眞砂を
 十ヲばかり紙にのせてやり 鳥「サアたべなたま「ハイ有がたふぞんじますが此様に澤山はた
 べられせん 鳥「ナニそればかり何ぼ手めへがじんぜうでもそれがたべられねへことがあ
 るものか取分てやらすといゝけれど遠慮して喰ねへだろふと思ふからわけてやつたのだた

べるがい、それが否なら外の菓子をやらふたみ「イ、エモウどふいたしてこれでよろしふござります 鳥「コレサ其様に堅くして居ずといはなをして今夜チツト手めへに聞てへことがあるが隠さずと正直にいつて聞せやたみ「エなんでござりますかどふしてあなたにお隠し申すなんぞといふことは少しもござりません 鳥「ナニ〜まんざら左様でもあるりへ

風月春鳥告卷之二了

花情春告鳥卷之三

江戸 爲永春水 著

第五章

嬉しさを憂瀬にかえん今宵よりあふくま川を渡りそめつゝとは寒葉齋の秀逸にて川によるの戀歌なり實にもうき世を嬉しさにわするゝ今朝の朝日影お民は雨戸の方をみやりてしづかに枕をはずし起にかゝる 鳥「何だ起るのかまだ早ひからまアモウちつと寝て居るがいゝたみ「ハイ大そふにあそくなりました久助一人て御臺所をしては私かわるふござりますから起き出る 鳥「コレサマア寝て居やヨしづかでもいゝからそして久助は先刻神奈川まで使にやつたから明日でなければ歸らねへたみ「ヲヤ左様でござりますか少しもぞんじませんが暗中にでござりますかへ 鳥「左様ヨ曉方に起してやつたたみ「さうでござりますかそれでは今日は貴君が他所へお出遊ばすと私一人になりますネ 鳥「うれしからふたみ「淋しくツて悲しふござります 鳥「何一人手めへを置ものか其くれいなら久助を遠くへ使にやりはしねへ

いまし 鳥「コレ御新造さん返事をしねへかトお民の頬の所をちよいと突て笑ふたま「私の事
ちやアございませんと口にはいへど嬉しい顔色莞爾として椽側の障子を明けたま「八百屋さ
ん玉子はないかへ八百や「ほんにお約束申ましたッけねへしかも大飛のいゝ玉子がございま
すたま「左様かへそれぢやア其でいゝのを撰て二百文だけおくれ八百「ハイゝそれはありが
たふぞんじますトいひながらかきれをまはりて勝手 口にいたり玉子をうりて出てゆくたま「ヲヤゝゝまた雨が降てさんしました鳥「左
様かそれは有がてへたま「なぜでございます快晴の方がよいではございせんか 鳥「常住は
日和がいゝが今日は雪でも降ればいゝとおもつてゐるたま「なぜでございますエ 鳥「他人の
來るのがうるせへからヨトいひつゝ立て勝手にいたれば木戸より欠込百姓四五人 互「イヤ
アちようどいゝ旦那がお宅だトいはれてうんざりせしが顔に見せず 鳥「ヲヤゝゝどなたも
お揃ひで傘の御用かねマアチツトお休ませへドレ傘をば出させらトおくへ往にかゝれば
●「イエゝゝ傘は宿が近ひから入ませんが今日は少し御相談申したいことがあつて參じま
したトいはれて鳥雅はいよゝゝ迷わく 鳥「左様でございますかそれは折角たまゝのお出
だが今日はあいにく客がございますから何の御用か明日ではわるふございませうか ●「へ
イゝゝナニ左様ならばまた上りませうト出にかゝれば 鳥「モシ傘をお持なさい ●「へイ左
様ならばどふぞわるいのをおかしなすつて下さいましと言葉にあまへて申ませうアハ、

ゝゝトおかしくもないに笑ひ居る鳥雅は自身に傘を二三本持出し 鳥「どれも番傘だから
よくはござぬません ●「▲「イエゝゝどふいたしましてこれはモウ澤山にとふぞ左様なら少
しの中トいひつゝ傘をおしひらきて路のぬからぬ其中にとやそこゝにして立出る折から
またも人音して木戸口より入來る變仁先生迎鳥にて人の知る長座異變の半狂人 變「へイ今
日は雨天でお淋しからふとぞんじてお咄に參じましたトいはれて鳥雅は泣出しそふになり
しが詮方なしに 鳥「イヤこれはマア一ふくおあがんなさいませつかくお出くださつたが
今日は此降ますのに只今から増見さまのお弟子の方に歌の會がございまして下谷邊まで出
かけますから 變「イヤそれは幸ひなこととござぬます御同道申てお近付になつてお歌をチ
ツトお貰ひ申ませうトいふを聞よりお民は中の間からたま「貴君ア直にはお出なされますま
い東連の御見物のことと御相談がいたしたふございますから是非今日御立寄をお願ひ申ま
すと先刻お使いが參つております 鳥「ヲヤ左様かそれぢやア廻つて往さアなるめへト變仁
に向て 鳥「お聞なざる通りとござぬますから今日はどふも 變「ハア左様かなそれではまた
此間にトふせうゝに歸りゆく鳥雅はホツト溜息を吐 鳥「ア、引おそろしい目だ種々な邪
魔ッ怪子が來やアがるおそろしいことだはやく木戸をびて置うまた何を來るといけねへト
欠出して木戸をしめ 鳥「大そふに大降になつて來たこれぢやア最誰も來やアしめへノウッお

風月 春告鳥之序

春もや、景色調ふ月と梅さて黄鳥の音もあらばと文このむなる溪の扉の主人の來めに隨ひて愛度ひらく惠方の門爲賞氣の一翻案もまだ寒き雪中の梅が枝うたふ片言はくちばし黄なる例の筆癖されど年齢老衰で兒女童幼に愛翫せられひるきを繪入中形本の作に連衆の得意をば外さて綴る人情の的へ當りの甲の年支干へ向ひし未の極月に冬籠せし一夜の急作繁昌時節は寛々と春告鳥の養ひは摺餌にあらぬ摺本仕立畫工も彫刻も板元の丹誠こゝに顯はれて花の蕾と春告鳥に氷も解て和ぎし初日の影や看官のおかげで今年も新著の發行を巳午の間から萬よしとは面白き笑顔を貸本問屋衆の喜悅重なる二編三編追く口のかゝるが中に相對流行なば偽ならぬ人の爲また爲氷の愛敬のもとひとなりて僥倖も得ん和合の人情戀の手毎の快悒が當てくだけし好意な世に泣て嬉しき鶯の音色もやさしき口説の新案嗚呼我ながら人情本はその極意を得たるかな其主要を得たる哉と自讃をしるしてはしがきに備ふ

酉ノ春出版

江戸人情本作者の元祖 狂訓亭主人

爲永春水誌

風月 春告鳥卷之四

江戸 爲永春水著

第七章

節は夾鐘の初旬なりけん廓は殊に閑麗にて跡着の衣裳なほ花やかなり加田多満のおゐらん薄雲の座敷には此程少し通路の遠ざかりたる彼鳥雅口舌といふにもあらざれど戀しとおもふ女の情には愚智の出るも憎からず實に男女の眞情は契情の身のうへに在素人の及ばぬ戀の極秘は廓通のよく知る所ならんか折節聞ゆる表座敷の淨るり

「そら定めなき花ぐもりくらき此身のくり事は戀に心をうばはれて御家の大事と聞
た時重きがうへの罪科とかこち泪に目もうるむ下畧

薄雲誠に骨をおらせなんして漸と來てくれさしたのに何たる按じられるぬしの身のうへ
ざますねへくどくもぬしにいふ通りいッそお心か替り切になつてしまつてたとへどん
なに氣をもんでもさはひておれを呼たがつても其方へは往れないからモウさつぱりとおれ

が事はあきらめると言て仕まつてくれさつしやればまた私も覺悟の仕様もありますのにぬしはよく私の言とを茶にばかりして居さつしやるから誠にモウじれつたうざますは鳥雅ナニ茶にして居るものか實正の事をいふのだアナイつそ其方からさつぱりといふぬしの家内が首尾で見りやアごふも友輩の前へ外聞がわるいから呼申されねへとおめへの方からすツかりといふ方がいゝわなうす「ヲヤもしへそれぢやアぬしは私の心を轉變思つてお出なすすのかへ誠に悔やしう御座升ねへ私に限つて轉變な心ぢやア在ませんヨ實にぬしの家内の首尾がわるくあらツしやるのなら何程ぬしの様なおふ様な人だつても少許は苦勞にもさつしやるだらうのに何だかぬしはそはくしてどふもしんみりとさつしやらねへやうて浮て居さつしやるしまた實正に首尾のわるいのならしんきにおたのしみをこしらへなんす事もおあんなんすまいかと思ひイす左様して私の方へは是限で來さつしやらねへ了簡てあらツしやると私さやア先刻から推量して居ますヨト少し聲をくもらせホツト溜息を吐く「ほんどふに女郎衆ほどはかなひかわいそふなものはありませんはトしみくしくいふ詞をなはらずしてあごけなきは殊更に愛すべし 鳥鳥自分の口からかはひそふだも可笑トわらひ「何がかはひそふだらふ一年中男を自由に取扱て思入迷はして心の中で阿房あへがよく來るもんだなどと思つてあやなして居てそれがかはひそふなのかうす「ぬしの様な心持になつて見たふざ

ますはさぞ氣樂で宜ませう實正に同じ人に惚ながらも素人ならば先が啜でも實だと思はれるし女郎衆だと死ぬほど惚れても啜だと思つて茶にして居られるそして素人だと逢たいト思ふときは何様な事をしても合に往て顔を見るばかりでも此方からも往れるから苦勞しながら嬉しからうけれども女郎衆といふものは誠にじれつてへくやしいものざますはトさもくやしそふに言てなく鳥雅もこころのうちにおもふやう お濱が行方といひ今となつてはお民が眞實も捨られず又この薄雲が情はさすがに苦界に沈しだけ愚痴も利口な言まはし何所やらあとなき心の眞實ほにあらはれてかはひさが身にはあまれどさすがは大人やはらかなる中に少しづつ手づよき言葉「何だか先刻からおめへぐすく言て泣たり笑たりしておゐらにやアさつぱりわけがわからねへ勿論おゐらも久しく來ねへから來たいとは思つて居たけれどどうも少々他出かねる事が有て出ずに居たが是非用があるから來てくれるといふ文をよこしておゐらが讀でも勿體ねへやうな事が書てあつて氣の毒だから來て見れば何だか不調子ことばかり言て泣たり何かして居ておれが身のうへの苦勞ばなしは承知もしねへで自分の言てへことばかりいつて居てどうも仕様がねへ歸るといふも野暮氣て居るしまた好漢がつて我慢するも氣の毒だ誰ぞ呼にやつて一口吞直さう其間にやア夜が明るだらうア、ア引トあくびをするうす「ヲヤ鳥雅さん堪忍しておくんまましツイ私が愚痴を言出してぬしに腹を立せ申て誠にどうも言

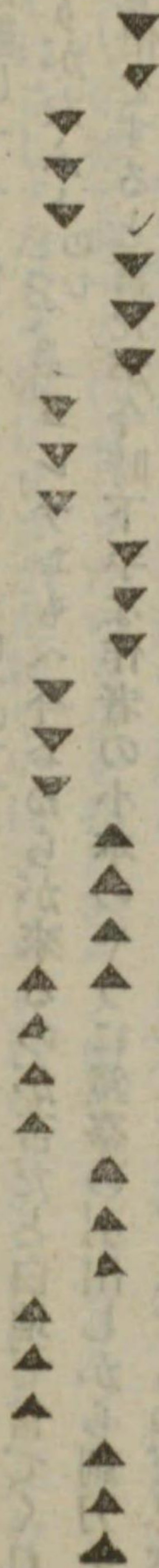
解がありません酒を上らッしやるなら食物も澤山ありますし火もよウク發てありませんか
 ら呑なんすは宜ぎますがマアうるさくとも堪忍して私の言事をちよつと聞ておくんなまし
 へ今ぬしのいはッしやる通り御家内の首尾のわるいとこの事は實正のわけでありますかへエ
 もしへ鳥雅さんへマアお聞なまし私やア實にお前様の咄しを罪な様ざますが啞言だとばッ
 かり思つて聞て居ましたものヲなぜならマアお聞やア只ぬしにおめにかゝりたいどふぞせ
 めて最一度お呼申たいとしみ／＼ぬしがなつかしくツて座しきの者にもはんしん新造などを
さしていふとばなり氣
 の毒なくらひ鬱々ふさいでばかり居たンざますはそしてやう／＼のことで様子を聞て貰ふと何か
 ぬしやア御内室さんでもたしツた様子だといふとそりやアモウ私きが何様に思つても氣
 をもんでもぬしが最かはいゝ人をおかみさんにもさしツちやアとても來てくれさッしや
 ることはあるめへからと思つて急度量多欲な事を言て後を是非來てくんなましとは言まい
 からどふぞトすこしなみ
たこゑにて鳥雅さんの顔の見納めをさしておくんなましと一向頼んでモウ／＼
 やう／＼の事て來てくれさしツたのも後を招申めへと申て上たからまづ安堵して否な所へ
 來てくれさしツたらうのにまさか左様もいはッしやられぬへから内の首尾がわりいのヤレ
 私の仕事がわりいのと私の行とゞかねへのを今さら知しつた様に言て仕うちて愛想を盡
 して彌是限りにしてしまはつしやる氣であらッしやるのだるふと思ふとしみ／＼悔しふぞ

ますはト なきながらいふ鳥雅はさきほどよりだま
つて聞てゐたりしがたばこをのみさして 鳥よく先刻から息もつかずにせつなかアねへか
 ドレ息繼に一ぶく付てやらうのト いひながらたば
こをつけてやる 薄雲はふしぎそふに鳥雅の顔を見て小聲に
 「おありがたふトとつて鳥コレサおもへ今おゐらが來るのが否だと白地で言てくれる左様す
 れば覺悟をすると言たが今時下手な作者の小本のやうに鏡臺の引出しから刺刀を出してひ
 ねくりまはしたのでも餘りあたらしくもあるめへが覺悟と言てどふするのだ忍びがへしを
 引ばづすといふわけにもいくめへうすそりやアぬしの言ッしやる通り今時其様ことをする
 ものもありますめへがト いよくなみだに
はなをつまらせ しかしあの素人のときならばそりやアもふ悔しいと
 思ひつめて死んでかわいそふなとをしたらと思はれるのをたのしみにもしませうけれご苦か
 いの中に居るだけそういふ事も出來イせんからもし是限でぬしに合れないと最客衆にも何
 も出ねへてお飯も給ず湯へもはいらず髪も結ずに引籠でばかり居てそして内所で呵られた
 ら居つてゐても年季中

昔はおゐらんに罪ある時節は内所へ居らせて置しとぞ

他の客衆に出ず化粧もしなひで此儘でぬしに別れたら此姿をぬしに縁の形身にとて年季の
 あけるまでこがれて死だら物怪の幸ひと心を定めてくらして居ますはト めにもつなみだはらは
らと思ひ入れたるころ
のまことたわいもなきことばのうちにしせん
としられてあはれ也鳥雅も共にふさぎしが 鳥不調子事ばかり言て泣て居るともねへそしておれが

女房を持たのお楽しみが出来たのと少しもわからぬ誰が其様などを言たのだへエ、
 うゝ誰が言てもよふぎますはたとへぬしが情人が出来さしたとッとおかみさんをもたし
 ヲたッて私か及びもねへことをやかましく申イすといふわけは有ませんからそれはごふて
 も宜ぎますがどふぞ一年に一度でも相かはらずぬしに逢たいとばッかり心の願ひがますか
 らとふぞ願ひの叶ふやうにしてくれさつしやればいゝお祖師さんや金比羅さんや左様して
 さてしばらくしづかなる薄雲の座しきの外へ廊下をばた／＼かけて来る内所育の新造お袖
 障子をしづかにすこし明てかわゆらしく小聲そで「おゆるしなましうす」「アイどなたさまお
 袖さんかへそで」「アイ私さま参ても宜ぎますかへうす」「ア、よふぎますともお這入なまし



このお袖は内所育新造の中にもいたつてうつくしく殺に發明にてまたあどけなくお
 ゐらん中に睦ましくして元氣よくさればとて浮薄なる性ならず實情ふかくかはゆらし

第八章

さてもお袖は鳥雅の傍もとへさしよりてそで「先からしらぬふりをして居なましたかへ私さ
 やア私と思つて美味ものをもつて来てあげ申たに 鳥「ヲヤ左様かそりやアありがてへサア
 くんナト手を出すそで」「アレぬしやアずるいヨまた出しもしなひのに 鳥「おめへが出さねへ
 から此方から手を出すのだサアマア見せなゝうす」お袖さん何さますへそで」「アイサアマアお
 まはんにあげ申のはこれ。それから鳥雅さんにあげ申すのはこれさますヨト兩方の手に持
 て居る紙につしみしものを出す 鳥「ドレ／＼トとつて中をあけて見て」「こりやアびつくり
 ずッとよしだ。すつとよしといふことば ちかこるもはやるなりこれちやア茶を吞てへノうす」「ドレぬしのおみせなん
 トヨ 鳥「おむらのばかり見たがらずとおめへのを見せなをす」「私のはこれさますト出しをふ
 にする そで」「アレサ薄雲さんよしなましヨぬしやアずるふぎますかち由斷がなりませんは
 鳥「ナニ／＼おむらんか。おむらんがずるくツていけねへヨそで」「うそをおつきなましぬしや

アどうもうそツつきでずるふざます此間來さした節あれほど私が極てあげ申たのにやつ
 ばり薄雲さんに苦勞をさせさつしやるから啞言吐さすヨ 鳥「ナニ薄雲なにしに苦勞する
 ものかおめへが第一うそツつきだアそりやアいゝが貰つたものを給やうかそで」お上んなま
 し今お茶をもつて來て上まうしいすから 鳥「また虚を吐うと思つて今時分茶があるものか
 そで」何うそをつきますものか今もつて來て上申しすヨ極上々別お養花がありますヨ
 うす「ヲヤそれぢやアぬしやア今夜ア吉兵衛さんさすネそで」アイなぜさすへうす「それで
 も今時分お茶があると云なますからサそで」アノサ毎度の通り子刻過から起てお茶を煮てお
 菓子をつたり何かして寅刻をうつとお歸んおますはドレお茶を取て來てあげ申さふその
 中ぬしやア小用にでも行て來てうがぬをして手を洗つて待て居なましぶせうさすヨウ引
 ト笑ひながら出て行うす「おたがひさすヨウト わらつておる何ゆへにかくいふや 鳥「吉兵衛さんと
 いふのは色客かうす」ナアニ老父さんさすは誠に氣のいゝ戯言ばかり言て居る能人さま
 すヨ店衆さますから寅刻を告とお歸んなますから誠に樂な客衆さすは 鳥「あの子は實の
 ありそふな子だノうす」ア、誠に深切で私のとでも俱に苦勞してくれますは左様いつてまた
 ぬしやア惚さしツちやア否さすヨ 鳥「ナニつまらねへト いふうちおそではかた手にどびんをさげ
 かた手にふたものをもつてくる
 そで」サアお茶をもつて來ましたヨそしてまたおいしいものをもつて來ましたはト まくらもと
 へ何やらお

て「サア起なましヨずるふざますねへ 鳥「今おきる所だがマア一杯その湯呑へついでおくれ
 なト いひながらやうくとおきかへりてかみにつゝみて 鳥「こいつやア奇妙だおめへのは何だうす」私の
 はようかんさすヨそで」サアお茶をつぎましたヨ 鳥「ツト有がたいト いひながらちやを 鳥「ア
 、能茶だぞ夜中に茶を呑とどふも能も 鳥雅一人こゝろのうらに思ふがくやおちをいふとくちのみて「何さすへ
 鳥「能茶だと言ことヨドレお菓子を一ツ、折からひな鶴の座しきと思はれて女の子の淨る
 り
 「ツイ染やすき廊の水」もしおゐらんへおゐらんかこうとばかりで跡先は寢のくら
 やみ辻行燈のかけで一夜さしやんねかし「格子の元へも幾度かあそばされるのは初
 から」心でせうち仕ながらもしやと思ふこけみれん晝のかせぎもよはの空鼻の
 さきなるほうかふり「吹ば飛よな玉やでも下畧
 うす「ヲヤノ、あの聲はまだ根から歳のいかねへ子の聲さすネそで」ア、あれは八才ばかり
 の男の子でありますはうす「左様さすかうで」ひな鶴さんの座しきさすいづもの延津賀さ
 んが弟子を四五人つれて來て語らせるのさすはうす「ヲヤ左様さすか能語るねへうで」
 イサ延津賀さんの弟子は不殘よく語ますは其かはりモウノ稽古は意地のわりいやうにや
 かましツて子供が誠にこわがりますはうす「ヲヤ實正は何のお師匠さんでもやかましいのが

弟子の爲さすサ 鳥訓へて嚴ならざるは師の過なり歎うす「何さすサとへ 鳥ナニサ司馬温公といふ人が左様言たとヨトいへどもいよ くわからず そで「ヲヤ司馬龍生といふのは噺家さすネ 鳥ハハハ、こいつアい、うす」アレサマアだまつて聞なまし今どは大きい子さすネごふしても節がこまかいやうさすサで、イ、エ涎津賀さんはやかましいかはりにネ涎津多といふ名とりの弟子はネ半年ばかり習つたといふとさすサがモキお師匠さんになつて弟子が大勢出来ましたといふ事さすサうす「そりやアしかし歳をとつた子さませうそで、イ、エまだ十四才さすサヨうす」どふして知つて居なますへそで「保里に家内中が居ました時お津賀さん所て見ましたヨ 鳥なるほど清元も流行から否な節のお師匠さんが澤山あるのうそで、イ、エ保里のお津賀さんの弟子はうそを弾たり啞を語つたりする子は在ませんとサ 鳥左様だらう清元榮次郎から請取やア立三味線だから延壽の直弟子も同じ事だそりやアい、が袖さんその蓋物は何たトふたを うす「アレサぬしやアモウげびぞふさすサはドレお見せなまし 鳥それ見ねへあめへもげびぞふじやアねへがそで「アレサ夫婦喧嘩をしなます中をよくお仕なましナ 鳥左様ヨのふ食物で喧嘩をしちやア餘りげびぞふらしくツつて外聞がわりいのふトいひながらうつわの ふたをとつて見て 鳥こいつアしやれてゐるのいかさま小用に往て來て一ツうがひを仕様と起る

花「ヲホ、、それぢやそで」それ見なましぬしも此床へ這入て寝なましヨウうす「花鳥さん私の座敷にやア今鳥雅さんが出來た所さすサヨぬしもこへお這ななんしなそで「花鳥さんぬしも鳥雅さんになつて少許助勢てくんなましヨ餘まりのろけなますから私一人ぢやア手がまはらねへんさすサヨホ、、花「ヲホ、、うす」ホ、、お袖さんでツイ笑うんさすサヨ 花「實情にお袖さんは如在ないとやらさすサねへうす」花鳥さんへぬしも能さすサヨトわらふ 花「何がへうす」名がうらやましふさすサヨそで「ヲヤそれぢやア花鳥さんを鳥雅さんになんしヨ私さやア最否さすサうす」ヲヤ否じんすけさすサヨ 花鳥「それでも今すけてくれると言しツたじやアないかへ」そで「左様さましたツけねへホ、、ア、可笑ヲヤ花鳥さん昨夜ぬしの座敷へ宇之さんが連て來さしツたのは何さすサへ 花「あれさすサか婦多川の唄女とやらさすサとサ氣障ナ」そで「ナニ氣障ぢやアありません誠に好風で宜さすサはおまはんは宇之さんが連て來さしツたからそれを立しつて氣障たと言しツしやるのだヨうす」花鳥さんへ和哥町の唄女なら私も氣障さすサはトいふくものかくや おちは鳥雅のふか きいろときよしおはまをおも そで「ヲヤみんなが左様さすサかへ 花ぬしばツかり賞て居なますさひいだしていふじんすけなり」そで「ヲヤ否なねへ三味線も彈不得でかへうす」それでもぬしやア田中のお幾さんとやらに稽古さしツたぢやアないかへ作者いふ此おいくの事を今いふはいかゞぞやしきいあつてこゝにするものなり

流行にあはぬとばせうち也究さがしのでんぼ
う見物かならずふあんないとそしるゝななかれ そで「アイサ松の内の前弾に二ヶ月と三十日かゝりまし
たはホ、、、うす」ヲホ、、、花「ホ、、、うす花二人」おかしお袖さんだねへトふたりがおな
にひしゆへ「うす」ヲヤ待人チウなにく「花鳥もお」花「チウ」トれづみな そで「私ばツかり待人
もなし」花「ヲヤ吉兵衛さんはへそで」アレ否さすヨ老父めへ 花「アレマア鳥渡見なましあ
んな事をお言なますヨ」す「じやうだんぢやアありません吉兵衛さんは實正に能老父さんさ
ますヨ」花「實正に大事にして上なましヨ」そで「ア、それだから昨夜も歸らツしやる時大事に
しましたはうす」左様さますか何様なんしたそで「あのね羽折を引かけて上もふさうと思つた
が脊丈がとゝかねへから座敷の双六盤を」花「ふみ臺にしたのかへホ、、、うす」ホ、、、
そで「ヲホ、、、果は三人笑ひとなりお袖の頓智に薄雲も惚た男の噂してしばしはうさをは
らしける

此お袖が始終は拾遺にくはしくいだすべしこれよりはまたお民のうゑをしるしてしば
らく廓のとをとかずかならず編をよみて佳情をしるべし

風月花情 春告鳥卷之四了

風月花情 春告鳥卷之五

江戸 爲永春水 著

第九章

町名は何といふやら辰巳の里に遠からぬ爲島とかよぶ裏住に小細造作とした家ありけり
主はたしか獨身者道具渡世の仲買とやらにて監定上手の如才なく金まふけをもするなれど
男の好のがたまさかに疵ともなりて色情ゆゑに折節不都合ともあれど得意旦那に最負さ
れて彰簡半業友達の附合廣き商賣にツイ吉凶もありぬべし彼鳥雅の弟子となりて俳名を雅
友とよび俗の名は友吉といふ毎日留主さへ頼まずに出行ことのみ多かりしが今日はたしか
に内情のある女と見へて二十四五の大島田戦栗とするほどうつくしき仇ものと口舌の様子
衣裳の拵へと言語にて和哥町の唄女と推せられたり名は仲次といふ 友「そりやア手めへの
例の愚痴で種々先繰をして見ればわけもねへことまでごふぎにあやしく見へる事もあるも
のだから疑ぐツて見れば限りのねへもんだがマアよウく氣を鎮て聞なヨ手めへは只おれが

少計したことがあつても夢中にはかりなつて居る様にいふけれど有體はおれもすこしは欲と徳を考へてマア面白づくの様に見せて一連に歩行たといふものゝ何も往た先方でうかれ居るものかそれだと餘程ありがてへが他の機嫌をとつて遊ぶのだから酒も何も身になるものか手めへが取越し苦勞をして考へる様なわけは少しもねへからマア左様思ふがい、仲「ヲヤ左様かへ私きやア其意味にやアさッぱり氣が付なかつたヨそして欲徳を考へて毎日毎晩同家へ往て楽しんで居たおつな欲心だネト鼻の先であしらつて居る友吉はじろりと仲次を見ながら 友「どふも何をいつても手めへの様なわからねへ者にやア實正に無言だから何もいはねへけれど鳥雅さんはおれが爲にやアまづ主人すじてはあり俳諧の師匠なりか此頃は少し親御の方が不首尾だから思ふ様にはならねへけれど根が家督をとるべき旦那のことだから始終の爲に今勤めて置のダアそれにまた鳥雅さんの方でもおれが様なものでも何と思ふかやれこれと云てくれるからまづはんの付合て往のダアナそれに丁度わりい所へ持込んで手めへのやくそくした堀の内の日があを通りの大雪だろふじやアねへか歸らふといへば衆人にとめられるし手めへの事も案じられるしか取つ置つして居る内に 仲「アッおまへの女がとめたから歸るのが否になつて三日四日の居續かへ其様に愚事くおひでなくツてもさつぱりと丸でむきだして言て聞しておくれなねへおれは斯言ことが出来たから手

めへはどふぞあきらめてくれと白地でふつ付ておくれなねへト少し泣聲にていふ 友「ソレ夫がわからねへといふのだア其様事が出来てもあんなことが出来てもマア今日の所をよウく考へて見やノさぞ手めへも腹を立て居るだらふ例の疝癪を發して立腹酒でも飲で居るだらふと此方の自惚か知らねへがしきりに思ひすごしをして出會たら其事も言ふと思ふから我家てさへ種々心配をしてまたあの出合が大勢來るとしみくした咄しも出来ねへからとおもつて衆人に啞を吐て先へ芝居へやつて仕廻つて手めへをわざ／＼呼にやつて斯して逢ふと思ふばツかりておれが使をやつたも知らねへて手めへは何所を歩行てゐるか宅にやア居ねへと鶴次さんが返事をしてよこしたは出て居るならば其所へ聞て行てくれると左様いつてやつたが鶴次さんのいふにはさしきではねへと左様言ツてよこしたアそれ見る手めへの方にも落度があるのにおればつかりをわりい様に 仲「ア、左様サ私きやアくやし／＼つてく／＼ト 言葉にちからをいれておしつけるよふにいふ 友「何が何様にくやしいのだ 仲「くやしいのサクやしいからおまへの心いきを見て貰ツてどふとも覺悟を仕様と思つて明許さまの毘沙門さまへお參り申たりまた外でもおみくじをいたゞいたりしてみれんらしいが今日はひよつと宅へ歸つてお出なら嬉しからふと思つて爰へ來て見たんだアネ何だか私きやアくやし／＼ツてく／＼氣がうる／＼してエ、悔しい友さんト さもなくやしきふにないて居る 友「ナゼ其様にくやしいかおれにはさつぱりわか

らねへどふて幾度言て聞してもわからねへ者にあつちやア叶はねへモウ〜どふとも手めへのいよふにするがい、言てへことがあるなら幾程でもおれをいじめ殺すともどふとも勝手にしろヨトはらたしくいへば仲友さん左様かへ勝手にしてもよいかへ急度勝手にしろとお言だネ私やア實正に勝手にするから其時はせめて不便な奴だと思つておくれヨトいひさして泣て居る

此節友吉が心の内にもふ様をも〜仲次がこれまでの氣性男のおよばぬいさみはだ奴といはれて流行し者がおれゆゑには其様にも愚痴になつたかと思へば不便が彌増になれども最う一ツべん氣を引て看よふとおもへばわざとちやかしてせ〜ら笑ひし顔色にて

友「左様ヨ〜其様におかしなことをいつておれにびつくりさせよふといふのかへん手のある女だナア其様なことを言た者に死だ例しやアねへもんだトちやにて見せる

もつて此頃の居つゝけに先の女にくるめられそれに心を奪はれていひかはしたることもわすれてしまひ勝手にしろとは恨めしい氣隨な返答と思へばいといくやしいとまたなつかしさに心も亂れ涙に善惡もわからばこそしばしはものもいはずして泣くづれて居

たりしがやう〜氣をとり直し何様にことをわけて言たればとて男の腹が變つて居ては最早不及事とても左様なることならば死んで仕舞がましならめ左もあるならば跡にては不便なことをせしこと〜おもはるゝのをたのしみにと哀れなる氣を引出すも戀ゆゑ狂氣にひとしき所爲か今にも年季が限たならと思ひしことも水の泡親方持も義理合も斯なるうへはと不了簡の覺悟極めて男に向ひ

仲「友さんたしかに考へて見たらネ今までのことはみんな私が変わるかつたヨ我身をかえり見ねへてあくまでおまへを恨んだは私が自惚から此様なものに思はれてさぞ今まではうるさかつたらふ堪忍しておくれよあんまり久しくこゝに居て猶のことおまへの癢にさはることもいふとわるいから私やアかえるヨト涙聲おもひ入たる様子にてすつと立上る

それ人情を察すること〜難き所爲なれども右にしろすごとき愚痴なることをも其身になりてはさぞあらんとよく〜察して哀れを知り他人のことにててもよそ〜しく聞捨ず情をかけるを人情のおもむきを知る人といふべしされど戀路をせぬ人の心にこれを讀ときは何でこのくらゐなことがおもしろいか悲ユといふべし色をも香をも知る人ぞ知るとおもひながら愚知の友たつたることを記せば世間の衆徒の口やかましきを防がん爲に愚なる分解をこゝにいふのみ

第十章

折から路次より足音して障子の外より内を覗きて男の聲「友、でもまゝい、友、アイ誰だト
 言ながら折のわるい所へと思ひ外へ立出る仲次はじれッてへと思つたばかりだんまりで考
 へて居るおほかた此間の所から人でも來たのかそれならば直に出で行だらうと無心かえる
 所じやアねへなど、種々工風して居る此時外面には何かこそ、相談したうへにて友吉の
 聲「友、ア、宜ともおめへ直に往て鐵こうに左様いつてくれるがい、今夜アおゐらア往れね
 へから旦那の前をい、様に頼むと左様いつてそして今夜アはねがおそからふから衆人と一
 同に何所へでも止宿ねへヲイ、おれが宅に居たといつてはわるいエチツト用があるから
 ヲ男、アイよし、それは吞込やした夫ならト歸ッて行

仲次は心に思ふよういよ、愛相が盡たならあの人と一連に出て往そふなる所を跡に
 残るはまだ少し脈があるはへとまだ種々迷つて居る友はだんまりにて内へ這入るこの
 時ははや日も西に入ればともし火るてらし障子はずして戸を入かへ窓の方もべな
 がら

友「お仲庭の方の雨戸をめてくれねへか寒ひやアト何氣なく言付火鉢へ炭をつぎ▲▲▲▲▲

上るリ「むりいふてそんなそのよないひわけをそれよりわしがいやならば一人未來へいつ
 て見や

友「ヲヤあつらへの鳴物とはあのことだぜちよふとおめへの言葉へ付てかたり出すやつさ
 仲「い、聲だねへ餘程大きひ兒女かへ功者な語り様だネ、友「ナニまだ十五ばかりだらふが誠
 に奴の子で大そふに氣がるな子だア、仲「ちつと氣になるネ、友「エ、イおもしろくもねへ兒
 女の様なことをいはア、仲「それでもおまへは新造ッ子が好だものヲ、友「そりやアむかしの
 ことだア今ぢやアなりの大ひのを隠そふと思つてひくい島田にいつてすこし他所行のとき

は眉毛を氣にするくらゐの女でなくツちやア目にはつかねへ 仲「ヲヤ私やア最其様かネエ
友「ナアニ手めへはまだ四五年もたゝねへぢやア噂はあかねへ手めへの氣ぢやア年増の氣
で居るだらふがまだ〱何所もかしくも生娘だからいけねへそんならといつて嫉妬をやく
のは極素人でそして泣むしの大將だア 仲「よいヨ泣むしても私が泣むしならおまへは泣せ
むしだヨ 友「アハ、ハ、それだから生娘だといふのだア泣せむしといふがあるものかく
だらねへことばかりいはアそれでも相應にお客のもめを濟したりもつれたことを口を利た
りしてさわぐうちがふしぎだそして新子や何かに異見をいふもおかしいぢやアねへか
仲「よウくいろ〱なことを言ておいじめだねへトいふ時節門語の淨留理

「かはる心に傳兵衛はせきたつむねをおししづめ

仲「ア、否な辻占だ 友「また愚智かモウいゝにして寝ねへか 仲「ア、四五日寝なひから寝む
からふねへ 友「夜晝寝ねへやつがあるものかそりやアいゝが宅の方はどふして來た 仲「ナ
ニ鶴次さんによく頼んで來たしそしてやつぱりさしきのつもりだアネ 友「左様かそれぢや
アいゝの、引何所へ往て居ても手めへの側に居るようなことはねへ 仲「うそをお吐なた
ま〱でせへ人をいじめ癖にエ友さん實正におもしろかつたるふネ桑さんに聞たが寔に
手のあるほどのいゝ女だといふこつた年は何才ぐらゐだエ 友「歳も容儀もいるものか手め

へに替る女があるくれへなら今まで手めへの氣儘をうけながら機嫌をとつてはいねエよ

此時はるかに戌刻の鐘コウ〱とひゞきて雨の音ひさしにあたりてバラ〱〱風鈴

蕎麥の聲かすかに遠く風につれて「はな巻てんぶらあられでござる。そばイ〱引

風月花情 春鳥告卷之五了

風月春告鳥卷之六

江戸 爲永春水著

第十一章

再説鳥雅は福有の家に生れて不足なく思ふ儘なるたのしみも満ればかける世のならひ昨日にかはる悲しみの俄におこるぞ是非なけれそれをいかにと尋ぬるに鳥雅の兄は先妻の産ところにして雅情の心さらになく鳥雅は今の妻の子なりさて鳥雅の父福富屋幸左衛門といふは福富屋萬右衛門といふ大分限の出店にて今の幸左衛門の女房も由といふ鳥雅の母は本店萬右衛門の娘なりこのゆへに幸左衛門の家を繼幸次郎よりは弟鳥雅の方が人の用ひも重く自然と本店の孫なりといふ勢ひあるごとくなれば兄の幸次郎と睦しからず元來兄の心は兩親に似もやらずなかく福富屋の旦那といふ風にあらず強情多欲のふるやひ誠にいやしき生得なりこゝにおゐて此程鳥雅の身持はなはだよろしからず薄雲の爲に多くの金をつかひ其外の奢りに諸方へ行遊びに金を蒔ちらし母のち由よりして内々二包も送りことのみなら

ず若隠居同前に別荘のくらし方難用も是まで月／＼に十兩ヅ、遣ひ捨ながら猶たらずとし
 て母の許へ無心または本家の祖母隠居して妙春といふ方へもねだりて百兩も貰ひけれども
 これは妙春がかはゆき孫の事ゆへやかましくもいはざれど針ほどの事を鐵棒を引ごとく仰
 山に言ふらしければ幸左衛門も捨置がたく本店へ相談しければ鳥雅の爲に母方の伯父當時
 の萬右衛門のはからひにてこらしめの爲に遠き田舎の親類の方へ頼み厳しく打込同前には
 からひくれよと言送り鎌倉への通路は何事によらず兩三年の間は鳥雅事に付ては決して無
 用なり心ざし改なば格別さもなくばすへ／＼勘當なすべしと申渡され終に田舎へおくられ
 しは今さらにいとしけれされば由縁の人々の愁ひ歎くその中に薄雲は身もよもあらぬ思
 ひ終におもき病となりて引籠けるがながく出勤もせざりしとぞ亦迎嶋なるお民は以前幸次
 郎の口説よりしをさかざりければ幸次郎はそれを意恨に思ひ殊に鳥雅と深く契りし事を知
 り戀の意恨を此時にと情なくはからひしが鳥雅の母は風邪にて何事もさしづなりがたくあ
 りしとぞされば幸次郎はお民の伯父を呼寄お民を此うへ其方にて世話いたせば家守をも退
 役さすべしと嚴敷言付られて驚きおそれ迎嶋より直に安房の國長狹郡花房といふ片山里に
 お民の縁者ありしゆへその人を呼んで引渡しけり爰にはお民の誠の伯母の故あり同居する親
 類なりしが伯母はお民をいたはる事我子のやうになすといへども此家の主寅吉といふは強

欲非道の白徒にて妻のおくねも同氣の惡婦お民をこゝへ引とるより直にもだまして金にせ
 んと思ひ付しが伯母おさよが大事になして側をはなさず元來この家は寄合世帯おさよの金
 を九分出し寅吉の金はわづかにてしつらひし家なれば其おさよが身につくべきお民なれば
 まづしばらく其儘にして置けるが此節おさよは大病となりて二ヶ月あまり煩ひけるを寅吉
 夫婦は死かしにつらくあたるをいかにともなすとかたき名前人邪見にされて居たりしが
 民はこゝへ來りしより伯母のおさよを杖はしらとたのむ身なれば大切に心を付ていたはれ
 ども寅吉夫婦へ氣がねもあればまたこれらへも氣を付つゝ仕ゆるといへど彼等が腹にはす
 こしも合ぬ胸算用いづもお民を罵りていじめらるゝぞ哀れなり今日もお民は伯母の藥を煎
 じながらくよ／＼と過越方と行末を案じ入たる折しもあれおくねは酔ざめ起あがりお民の
 方をじろ／＼白眼付くれ「エ、いめへましい朝ツから晩まで藥三昧だのうコレサお民さんい
 いかげんにしねへナ團扇ではた／＼あふぎたてるから其所中が灰だらけだアそしてマア物
 が取ちらかしてあつてもそれを片付様ぢやアなし寔に後生樂だヨノウタみ、ハイ今すこして
 藥が出来ますから跡でよく片付ますヨくね「エ、イ藥は付て居ねへでも火があれば煎じあが
 るはナマアきり／＼掃出してしまつて藥でも水でも吞せねへナトとなり付られお民は是非
 なくくすりを捨置さツ／＼とはきいだせば「くれ、アレサしづかにはきねへエ、少しの事も

腹をたつてぎす／＼するヨそれほど否ならおいらがはき出さアこつちへ箒をよこしねへ
 たみ「イ、エ私きやアはらを立はいたしませんくれ」それならぶり／＼しねへてはきなせへお
 めへが腹を立たといつて誰もこはがるものはねへアレサ／＼足元の物を片付てはきなよ田
 舎ものにはおとらア人をばかにしたそれでも氣のきいた風俗をしておいらたちをこけにし
 たといつてはじまらねへエ、ばか／＼しい若旦那とやらになぐさまれてあげくのはてに只
 追はらはれて来るやつもねへもんだ手切の少分やそつととれねへことがあるものかさまア
 見たがいゝトあくまでもそしられて無念の涙はら／＼／＼／＼おくねはこれを見るよりもさら
 にとが／＼しく／＼よウくちよつとのことにも泣聲兒女だのふ何が悲しいのだエサア／＼
 はふきを此方へよこしなせへトいひつゝ邪見に引たくりばた／＼／＼とはき出しその儘表
 の方へ出行ながらくれサアはゑて居ずとも飯の仕かけてもしなせへドレ新家へでも行て遊
 ぶべゑトはな唄うたふて出て行後にお民はくちあしく悲しきうちにも思ひ出す鳥雅の情昨
 日今日夢かとおもふ迎島海山こえて北の方それさへ其處に今ははやあるて遠くの田舎と
 やら我身の如くつらましき思ひはたとへあらずとも何不自由のなき人が此様な山家の住居
 にあらばさぞくやくしくぞあるならんいかなる所にあらるゝともせめて此身が一所にあらば
 朝夕介抱せんものをと我身のつらさに男のうへをおもふ女の操をもしらていづくに住こと

ぞ案じながらもさしあたる大事は眼前伯母の病ひとせんじ立たる薬なべ片手に茶碗をたづ
 さへて咳入るおさよが病ひの床たみ「サア伯母さんお薬が出来ましたよ さよ」アイ／＼毎日
 々世話だらふにあしたツからはおれが煎じるからおめへチツト内の事をしてやつてく
 なたしか今もおくねが小言をいつて出ていつたノウタ々「アイト返事もあろ／＼涙ひざにお
 ちるをおしくしたみ」ナニいつものくせだから何とも思ひませんヨト口にはいへど心には
 いとくちあしき今の身を死もせうかとおもひあるそのたよりなさはかなさにいと涙はこ
 ぼれけり折からかへる寅吉がとら「ヤイ誰も居ねへかお民はどふしたヤイといはれてびつ
 り立上るお民は涙をふきながらたみ「アイ老父さんおかへりかへとら」エ、いしれた事だア出
 て行ときあれ程言付たのに薪をなぜ干ておかねへのだそして鳥網も干せと言たのに夫もし
 やアがらねへたみ「アノあれからおくねさんの酒を買往たりまたお醫者さまがお出なさ
 たりしたからツイとら」エ、また口返答をしやアがらアむかしは昔今ぢやア伯母の出した金
 もさし引勘定をすると最此春から喰しておいただけが借になつて居らアそれから手めへの
 喰雜用をいれて見やアがれ不殘おれがくるしみたアおさよどんだといつても大きな面をし
 て御新造様のやうにして居られてたまるものかエモウ／＼薬もいゝかげんにしてもらはふ
 死んだ跡ぢやアおれが借金にならアばか／＼しいトとなり付られ氣のよわきおたみは何と

いらへなく亦も涙にむせびける

第十一二章

世の憂事を身ひとつにかさねぐの薄命涙の露のかはく間も泣あかしたるお民が難義寅吉は病人の勞れてろく／＼舌さへもまはらぬ様子に付こみて己が勝手をたけりたて傍若無人子どもしゆへ申ますばうぢやくぶじんとはかたばらに人なきがごとしと申こと也の悪口雜言とら「コレお民よく聞ヨうぬが了簡ぢやア伯母さへ大事にすりやア此方等夫婦にやア恩もひらもねへといふ考て居るだろうがナまさか左様でもねへぞ手めへも寺島の旦那から鳥雅が兄幸次郎の事を引とつて来る節に鎌倉の伯父御が何といつた手めへの身のうへは寅吉の自由にはからつてくれると頼んだアお由は信身の血筋伯母だけれと女の事ではあるしだん／＼歳は寄ものなり始終おれが心まかせにしてくれと斷てよこしたぞ左様して見りやアおくねを追出して手めへをおれが女房に仕様とまた妾奉公に出そうともそれぞでなけりやア女郎に賣ともいづれおれが心持次第だぞ其所をおれが辨して一日／＼と其儘であくのだアそれになんだ明ても暮ても伯母御のくすりだのヤ者どのへ往のとはかりぬかして家内の事ア少許もかまやアがらねへ左様して何ぞといふ直に泣聲やアがる口でいふのが痛くもかゆくもねへはづだアエ、不吉な女だアトいひつ

災皿の大きな煙管をとつてお民の顔を遠慮會釋もあらくれ男力に任してた／＼きなくればワアツト泣伏し顔をさへたみ「アレ老爺さん御免なさいましヨウ最これから氣を付ますからどふぞ堪忍して被下ましアレどふぞアイタ、、眞平御免なさいましヨウト打た／＼かれくるるしさも泣聲伯母に聞せずと袂につゝむ心配は病氣に障るをいたふなるべし伯母のおさよは我子より便りにおもふお民の難義聞も悔しき寅吉の悪口非道のふるまひにこらへ兼たる病の床破れ屏風を力となしよるめきながら立あがりさよ「なんだかマアひどい事をしねへでもいゝぢやアねへか女の子をぶちたゝきする程の事もあるめへ夫ともお民をせつかんしねへてならねへ事ならば私をぶちなせへあんまりなとだト腹たゝしくいへば 眞ナニあんまりだエ、死にかゝつて居る癖にたはことなうぬが體も利ねへでゐながら引籠で無言で居るがいゝトはんとすれど氣をいためしゆへさしこむやまひ「アイタ、、ア、せつなひトよこにたるしめばをどろきあんじておたみはたみ「アレ伯母さん氣をおもみでないヨ私がわるいから叱られるかけよりせなをさすりてかいほうし「サア病人はいゝかげんにしたがよからうくらひつのでございませすヨトいふもあはれなりとら「サア病人はいゝかげんにしたがよからうくらひつぶしてばかり居られちやア此方の難義だアヤいお民山へ往て薪を拾つて来いソレその前のこの網も干て行らじ／＼仕やアがると家内へは片時もおかねへぞ役にたゝずめエいま／＼しいトとなりつけられ不便やなお民は伯母の介抱さへならぬのみかは木枯の音さへ寒き山

路へ未の刻も半過猿にと等きもの共に口ぎたなくも追立られ熊手を引さげ脊に籠脊おふて泣く出てゆく嗚呼いかなれば此處女かくまで薄命のかさなるやらんかゝる時にぞ過さりし親達の事情ある人の事などいろ／＼に思ひ出して戀しくも悲しさまさる歎きにて哀れといふもおろかなるべし斯如に日に幾度無理なる他人の雜言を腹たしくは聞ながら伯母のやまひも見すてがたく又便りなき身のうへゆへ泣々其日を過しけるがある時伯母の薬をとりに間を見合せて夕方より家を出るも寅吉夫婦の者に氣がねと知られたりさてもお民は里をはなれて半道ほどありける醫者の許へゆき薬をもらひ立歸る野みちあぜみち風荒れていともものすごき海の音木精にひびく泡の國はかなきその身をかこちつゝいそぐ野道の只中を尾花をおしわけお民の前へ立ふさがつて大男 ●コレサどこへ往のだ娘ツ子夜の道の物騒なのに送つてやるべいと出しぬけに聲かけられてびつくうし月の明りに見あぐればさかやき延て熊毛のごとく眼をひからするおそろしさお民はふる／＼ふるへながらた々ハイ私は花房の蓮沼村のものでございます ●嘘をいはねへがいゝ蓮沼村に主の様な美麗娘があるものか鎌倉の者だろ何にしてもかはいらしい娘が一人で夜道をするものぢやアねへドレおれが手を引ておくつてやらふそのかはりにおれがいふとをきくがいゝ丁度往來の人もなし二人が温つてから往うサア／＼た々アレ御免なさいまし私は病人のこと急ぎの道でござ

ざいますからト摺扱て逃出す向ふのかたにまた一人雲つくごとくに大男兩手を廣げて ▲「コレサ／＼お娘ヤなぜ逃るのだあのおぢさんが能とををしえてやろうといふぢやアねへか嬉しがるこそあたりめへの歳で野暮に逃る事があるものかドレおれて手傳てやるべいと引捕ゆればお民は泣出してたみアレ御免なさいヨウ引アレひ引どなたぞ来ておくんなさいましヨウトいふうちいせんのおともはせサア「泥八おぢい足の方をかつぎあげろなおれが肩の方を来り二人にてお民を抱すくめ持て行へいハ▲「そして何處へ持て行だ ●ハテしれたこんだア道樂寺の本堂へ連れて往てなくさむべいなト二人にてかたみどふぞ御免なさいましヨウアレヨウ引泣聲夜風に木精してさも悲しげに聞へたり此時しも小湊なる誕生寺に經堂を建立せんとして信者の講中言合して毎夜十人十五人二組三組別れつゝ催寄／＼の邑村を勸化にあるく一群が折よく爰へ來かゝりて女の泣聲を聞よりも情ある人々なれば夫たすけよと走かゝるその勢ひに兩個の惡漢おたみを捨て逃出せば題目講はお民たはりこれも高祖の御慈悲と一際聲をはり上て夜風に瀟ふ尊とさは草木國土悉皆成佛かゝる野邊にも法華經の功力にたがはぬ世尊のやくそく今此三界皆是我有と捨給はぬぞ有難けれさても題目講中の聲もはるかに遠ざかる野道かすかに木精して南無妙法蓮華經／＼／＼ドヨドン／＼／＼ ●泥八か ▲權十か ●いま／＼しい邪魔が入たなア ▲「それヨしかしアノ法華の講中は人の難義を身に引受て世話をする奴

等だから捕まるといけねへから逃出したがアノ娘をつれて往たかなアトいふ傍の枯尾花に隠れて在し彼お民見つけられじと身をちぢめひそまる折にさはくくと風にはあらで花尾のおと聞つけ見つけて泥八權十思はず莞爾うなづきて忽ちに引捕へ●「アハ、どふしても縁のあるのだ」▲「サア、今度は意地ばらずと素直になりやア此方も其氣で」●「それヨ、おとなしくいふことを聞きやアいたわつて随分やさしい介抱は」▲「魚心あれば水ごと、ろだサア自由に道樂寺の本堂へ往か」●「あすこは無住の明寺だから何も恥かしいとはねへトとり巻れてお民はかなしくふるへで居たるが兎に角に退れぬ所とあきらめてかたクサアそれ程に私を思召ての事ならば身を任せまいものでもないが親兄弟もない私蓮沼村も他人のこと今から直に女房にもつてお呉の心なら縁づくと思つてこゝから一件に何所へでも否とは言ない氣だからお前達二人の中で實義な方へ此身を任せたとへ死でも見棄まいとか他には情人もこしらへまいとか極ての上で私をかはひがつておくれならどふで一度はもつ男此方も外には男をば一生もたなひ私が氣性それとも二人が當座のなぐさみ只さしかつたいたづらならば殺されてもなぐさみ者にはならなひから其氣でどふでもしておくれトいはれてさすがに泥八權十迷ひ出したる戀の欲二個の心に敵味方がひに邪魔と友達の好情をわすれて泥八が▲「なる程なアお娘のいふが尤だアコレ權十おぬしは歳に不足もなくつて

此様かはいらしい娘を抱て寝よふとは押がおもてへ貴さまにはおれが酒をふるまふから此娘はおれにくれせへ●「エ、イいけづるひことをぬかしやアがれ此嬢はおれが見つけたからおれが自由だア手めへはおれより年が一ツか二ツ多ひくらゐで居やアがつて若へふりをしやアがらアそして此子を女房にするといつても第一宅がねへぢやアねへか他所へ行といつても小遣ひもねへくせにふといことをいやアがるエ、コウお娘や此男はの名を泥八といふくらゐこはひ人で元は盗人の告子だからおめへも此人のいふことをさくと盗人に落されるぜ」●「うそを吐やアがれおれよりかうぬこそ盗人だアそれだから鎌倉へ出ると首がとぶといやアがつたぢやアねへかサアお娘やおれといつしよに此所へ來な」●「權、エ、むしのい、とをぬかせへうぬ一人にいゝことをさせるものかその娘はおれが女房だはト泥八を突のけお民の手をとり」●「サア此方へ來なアかはいらしい手だナアヲ、〳〵此頬皮のすべ〳〵したことは羽二重よりもはだがい、サア、モウ、〳〵はやく來なタ、アレサマアよく何かを極てから」●「泥、さうだ、〳〵その野郎のいふことを聞とかたはになるぜかならず其方へいきなさんなサア權十うぬア彌邪魔をすりやア斯だぞと權十に握りこぶしで打てか、れば折十は傍なる竹の折にて打かゝる中にお民はうる〳〵と取押るさへかなはねば途方にくれし此場の仕義二個は戀の敵同士たがひにおとらぬ荒者ゆへ毛をむしるやら喰付やら暫らく息吐す

風月花情 春告鳥三編序

來る春もまた來る春のいちはやく。おなじ音をなく鶯の。玉の聲よりうらゝかに。明る初
 春初日影。光りかはらぬはつ空を。珍しそうに見はやすぞ。實太平の人ごゝろ。三都はい
 ふもさらなり。おくれがちなる片田舎。山里の佗住も。心ぞいさむ春の色。梢の雪の眞し
 るさも。いつしか梅の初花や。その立枝さへ佐保姫の。霞の袖の深みどり。操たゞしき姫
 小松。野邊も賑ふ若菜つみ。こほりも今日は解そめし。若水汲や澤邊の水。四澤にみつる
 春水先生。御ひるさ多きに人そばへ。幸ひ今度下りし序に。狂訓亭をたづねたれば。稽古
 ながらに此本の。序文を綴りて見よかしと。いとねんごろなる言葉にあまへ。蕨鶯のさえ
 もなき。音色を恥ず片言を。こわくゝながらならべしるして。爲永大人の門に入たる。戯
 名を世に春告鳥。初音をやうゝ出すのみ狂訓亭をひるさの諸君。何とぞ予が名をも。呼
 せ給へと願ふになん

江戸人情本作者の元祖 狂訓亭爲永春水門人

尾州一の宮

狂花亭爲永春蝶述

風月花情 春告鳥卷之七

江戸 爲永春水著

第十三章

鶴が岡の宮居より海手にあたりて築地ありそのころ新に出來しにあらねど久しくしんちと
 いひならはしてこゝにも多くの酒樓あつて酌取美婦人あまたつどひ深情笑語おもしろく和
 哥宮小路におさゝく劣らずこれは何屋か知らねども一かたならぬ其中へ水をさしたるもの
 ありてたがひにまづくなりける折しも丁度兩個が胸ト胸思はく出來て男のかたより離別口
 説の床の中珍らしからぬことながらつながら縁にしの筋立ゆゑいさゝか他文をかきつゝれ
 ばまた哀れにもはかなくて情を知るの教訓なからんか 男音次郎三 十才はら ○昨夜はおたのしみだつ
 けネ 女お雪十八 才位 ○何がへ 音音 何がよく出來たアコレおめへもいゝかげんに人を馬鹿にす
 るがいゝぜゆき才位 ヲヤ何を私が馬鹿にしたのだエ 音音 そんなにしらをきらねへがいゝコウこ
 の間も何と言たたとへ深ひわけはねへにもしろおれが氣にくはねへ奴だから銀八とかいゝ

のはよぶなといつたらナニありやアモウ呼はしねへ豊松から左様いつて来たときに手づよく断たとおれが前では口ぎれへなことをいつておゐて此節はしげく来るじやアねへか啜ッ吐めエゆきナニ啜を吐ものかネ思ひも付ねへことをおひだヨおかしいネエ音ヘンやつぱりおしきるつもりかコレこりやア何だトふみをなげだゆきヲヤ何だト手にとつてびつくりせしが胸だくみをしてゆきヲヤこりやアモウ久しい以前の文だはネ鼻紙の中にあつたから枕紙にでも仕ようとおもつてそこらへ置たのだはネ音ハア左様か久しい以前といふがおれが断たのは六月の事だぜ左様して見りやア六七八と三月にしらならねへコレ今月の十五日の外に八月十五日といふ月があつて八幡の祭りが外にもあるかエコウこりやア今日の祭の文だゼトいはれていよくお雪は當惑さしつかへて居たりしがゆきヲヤくそれぢやア私の文ぢやアないヨ他家の妓女衆の文をお客でも持て来て落したのだろはネ音コウ他家の同じ名の女の文を手めへの袂へ入に来るお客があるものかそれよりやア惚た男だから呼ねへ様には出来ねへといへばいゝその方が馬鹿にされねへだけ此方もいゝやアそのうへに昨夜もはじめて来た客に鳥渡惚をしたのも知つて居らア愛相のつきた女ぢやアねへかこれからア此文を證據にだれても好きなものを酌に呼から其時ぐづく言なヨばかにされた念はらしにこの宅で恥をすゝがねへければならねへト言はかねて此家にて情人になり

し女の有ゆゑなりゆきそりやアおまへが倦た日には廣い世界は兎も角も此場所の中何處へても往なざるのは詮方もなひが此宅で左様しなすつちやアどふも私しが立なひからそりやア何所までも障をつよく無理を言ていじめずとも堪忍しておくれナ音ヘン蟲のいゝことをいはア障をつくとも小言をいふとも勝手にしる女中や若衆でわからねへけりやア親方にわけをはなして立派に見立代をして見せらアゆきそれはお客の威光だから何でも無理が通るけれどおまへにかぎつて其様なことをお言だらうとは思はないから親も無疵で産だからだへ疵まで付て今さらすこのことを言たてにトいひながら涙ぐみてさしうつむく風情くどく言譯をするより哀れにて大略この手にてよわる男多しされども音次郎は情人があるゆゑ平氣にてかはひさうだとも思はずお雪はいまだ年がゆかねば古きなじみを捨るもおしく殊に情女の出来しをさとりしことなれば悲しくなりてゆきモシ音さんおまへも餘り手づよいねへ何ぼお徳さんと情合があるといつてわづかのことをいひ立にせずとも倦たから否だと男らしくいつておくれの方が私のあきらめにもなるはネ此方でいくら惚て居たといつておまへがあきた日にやア詮方がないからわけさへたてば私やアどうでもなるはネそれを今さら其様に邪見なことをいはずともよささうなもんだ音ヘンドゥ一の古いのをまるでならべてくれることもねへ邪見ばかりが男の癖よとは極ふるいいたこといふにもあらアエ、

人をつけにした親子同前の手めへに突出されちやア昔さんのお名が捨らア突出されねへうち此方からきりあげてこれから手めへの末をとげる色ごとを高見で見物だア山賣の反魂丹を水へはなしはしめへし人をばぐるくまはしものに仕やアがらア何ぼうぬが美しくつてもうかくと来るものか此所へ来て居ねへ日でも此土地のことが心にうかんで戸めへの仕打は巨細におれが耳へ這入つて居らア二十三夜の勢至様へ壺斷をしやアがつて銀の野郎を呼てへと願掛をしたことまで知つて居らア面ア見やアがれ蛙の水をあびた様にしやアとしてけつかるぜいめへましい女だゆきモウい、かげんにおしな 吾ナニい、かげんにしる申譯が出来ねへと思やアがつて我慢の平氣も利た風だアわるく落付なへふさくしいとならべ立たる悪言にお雪はしみく腹立どもさしがに年もゆかざれば愛相盡しを言返すほどの手強き所爲もなければ悔し涙を流しながらゆきそんならおまへの勝手におしなこれほどわけを言ても聞分ねへとはあんまりだヨト漉返紙にて泪をふく 吾へん泣て廊下で舌を出しが聞てあきれらア泣てよければ私がなくかエ、人をばかにしたト流行おくれの唄やつまらぬおもしろくもないせりふにて無理な口舌女もこれにて底心愛相を盡しさまでに思はぬ客と情人にもなりて面あてをする氣にもなるものなるべしかゝる座しきの隣には和哥町より住かへたる小ひな名はせんひな友さんおまへも種々なことをお言だねへたまは氣を

もませずと遊んでお歸りな何でも此頃ぢやア何所へか行所が出来たのだネ 友ナニく左様いふことぢやアねへ手めへも知つて居る鳥雅さんのことでは是非田舎へ往て來ねへぢやアならねへひな「ヲヤ鳥雅さんは上方へお出でこつちに並居やアなさらねへとお言ひてはなひか 友「さればサそれだからその上方の鳥雅さん所から手紙が來たに付て田舎へ行ねへければならねへひな「否くずるゐことをお言なまた上がたへ往て情通をしようと思つて誰がおまへの様な女好きな人を女好の澤山ながたへやられるものかもしお出ならば私も同伴に行ヨト言ながら男の顔をじつと見つめる 友「先くゞりばかりすらア悪い癖な田舎へ往て來るといへば上方へ往て情人をするのなんのと上へ行たと言つて女が自由になるものか上方でも長崎でも手めへに見かへる女もなければ手めへの様に浮薄女もねへはなひな「ヲヤく何時私か浮薄をしたことがあるエサアそれをお言な誰と私きが其様なことをしたことがあつたエ 友「なくツてサ稻荷横町をまはつて三度か四度同じ家へ往たことせへあるぢやアねへかこれはその上ありひな「およしなねへ其様なつまらないことをそりやアおまへが私をまごつかせなのぢはそりやアよいか田舎へ往ちやア否だヨ 友「田舎へ往たといつて半年も一年もかゝりはしまひし直だ ひな「それだつて百三十里とかあるぢやアないかへ友「そりやア上方のことヨおゐらが往といふのは舟へ乗ると一夜に往れる所だア ひな「ヲヤ

上方ぢやアないのかへ 友「ナアニ安房國長狹郡西條花房といふ所だひな」ヲヤ／＼それぢやア小松原の所だネ 友「小松原の所たア何のことだひな」アレ御難の所だといふことサ 友「サアなほわからねへしかし御難とは否な辻占だひな」お祖師さまの御難の所だはネ 友「ム、左様かやう／＼わかつたおゐらア門徒だから氣が付なんだ ひな」エ一向宗だエ鶴龜／＼フツ／＼と私きやア了簡があるヨ 友「堅法華めへおれが一向宗ならば離れる氣かひな」きれずとよいが改宗をしておくれな 友「手めへ門徒になるかい、身上がよくならアひな」ヲヤ／＼左様かへそれにまたなぜおまへは門徒で居ながら工面がわるいのだへ 友「女房が法華だからヨひな」女房とはエ 友「エ、知れたことだア手めへが法華ぢやアねへかひな」ヲヤおまへ先頃中上専寺だとお言ぢやアねへか 友「左様ヨ手めへと情人になりてえから俄に法華だと言たのだアひな」啞をお吐な其まへはじめて私を呼だときに保里の中のお洗米をもつてお出ぢやアないか 友「左様ヨ其はじめつかち種々心配をしてやう／＼此位になつたのだから今突出されぢやアうまらねへひな」ウムようがし突出される風だア私きやア最今ぢやア後悔をしてゐるは 友「ナゼ／＼ひな」なぜもい／＼ねへ私が此様に苦勞をして居るのをかまはねへて諸方遊び歩行癖に私を疑つて何ぞ間違があつたらばそれを手にして上足をとる氣でお出ぢやアな

いかトいふ所へ女中來りて障子の外より手紙をさし出し外の座しきへ出しものをはこびながらと見えて 友「置いて歸りましたヨ 友」ハテナト手紙を讀で 友「ヲヤ此の手紙ぢやア明朝立ねへければなちねへひな」連があるのかへ 友「左様ヨ喜代太夫が旦那思ひの男だから鳥雅さんの頼はねへが恩返しに一骨折るといふから同伴に行つもりだひな」はやく歸つておくれよ 友「しれたことサ手めへより此方が不安心だアひな」アレサをかしいねへ

第十四章

佐介谷の芝居より辰巳にあたる相坂町の風呂家をいづる町唄女浴衣を抱へて襦をとり和倉の前をゆく折しも風呂敷包を脊負し小僧摺違ひしが立止り過行唄女の後影情と見送りしが後を慕ひて唄女の歸り宅まで見とゞけ立かへる發明らしき小僧の動靜何ゆゑなるか知らねども一人合點はしりゆくそも此唄女はいかなるものぞとその素性をたつぬるにこゝへ來りて唄女となりしは纔に二月ばかりにて近き頃まで安房の國花房の里に難義をなして種々の事に出合し彼迎島のお民なり

作者曰此草紙二編目にしるしたる房州花房の續きお民か伯母の藥をとりにゆきし歸り道惡漢どもに出合し後をくはしくしるさばよみあきたまはんことをおそれてあら／＼

こゝにしるすてはやく人情のうつりやすき所を見せまいらせんと思ふのみさてもお民と今一人の娘をとらへし二人の悪漢はお民が常に信仰せし稻荷明神の應護によつて配下の狐の通力をあらはし道樂寺の本堂に化しけるが彼二人は舊悪ある族にて其折節召捕られ罪に伏せしとぞ思ふにお民と今一人の娘と見へしも皆狐の所爲と知られたりかくてまた伯母なるものも病死して寅吉が悪計にて既に遊女ともせられんとせしをやうくのことにて諸所を退れやがて鎌倉に立かえり唄女となりて寅吉に身の代を與へて手切をなし此相坂町のお熊といふものゝ娣となり名をも改めてお花と呼れ酒宴の席へ招かれしとぞ

男「ハイ御免なさいまし葉倉井でござぬますお花さんをおはやくおたのみ申ます くま「ハイ只今すぐに上ます 男「ハイくどふぞ左様ならばくま「ヲイく彌助どん何様だへ 男「折居の木佐田さまでござぬますくま「ヲヤ左様かへありがたうぞんじますとよろしく左様申しておくれヨ 男「ハイくト歸りゆくお熊は二階へ向ひくま「お花く聞たじらうの手まはしをして往なヨはな「アイたじ今くま「ヲヤくまだ化粧が出来ぬへのかのろつくせへノウはやくしなヨそしてどふもおめへの白粉は薄ひヨお屋敷なんどの節は猶のこと濃のが徳だヨト二階へ上り來りて化粧を手傳ひせき立て支度をさせ出してやりながらくま「大事にしなヨ一通り

のお客たアちがふヨそして何を被仰ても請て居なヨ此間も他が噂をしたが詮方なしに座しきをする様だあんまり欲のねへ子だといつたことがあるが左様評判をされると此方が損金だア貌がいゝからといつてつんくした日にや流行ねへもとひだト出る光へたち不吉とは思ひながらも生得の内氣に心をなやますのみ親も血縁もなき身には姉とたのみしお熊が言葉善惡ともにさからはずはな「アイ随分氣を付ますヨト立出るその姿新子ながらも押立は近年稀なる世間の風聽あれで最少と色氣があればよき仕合もあるべきにと見送る門へ來かゝる男三十四五才の旦那風後より來るは清元常八 常「モシマアあんまり早足でござへますネ且「それだつておめへは途中で女を見ると足がとまるからちがあかねへ 常「ナニつまらねへことをおつしやる浪和町の角で小便をする中に見えなくおなりなさつたから何様にかまごくいたしましたらうトキニ例のお咄しのは此所てござへます 且「サアそれだからおめへ先へ這入つてくんねへなト遠慮のようすお熊ははやくも見付けてくま「ヲヤくいらつしやいまし常八さんサアお這入なねへなぜ立て居ンだへ 常「エ今衣紋を直してめかしてからはいるつもりサくま「ヲヤ左様かへそれぢやア私もおもいれ化粧をしてお待うけをすればよかつたネト笑ひながら出格子の障子をめて沓脱の方の障子を内より明けくま「サアマアあなたお上り遊ばしまし 常「イ、エ門口からおがへりなさいましどうも旦那を爰の宅へお入れ

申たくございませんからかゝるながら二人とも家内へはいるくま、サアお上り遊ばしました中臺所を越て奥の四疊半の間へつれて行二間に九尺の庭巾の狭き縁側右の方のはづれを少しはり出し向ふの塀際に雪隠ありと見ゆお熊は縁がはから井戸ばたの方へ聲をかけるくま、清や、お客があるからはやく來なよ、いひながら座しきへ來り火鉢へ炭をつぎながらくま、今日はどつちらへいらつしやいました、當、今日はネ旦那がおまへにあらためてお近付にならうと被言からそれゆゑお供をさせて參じましたくま、ヲホ、不躰なことばつかり、當、なぜへお供をするもさせるも同じことぢやケねへかホ、且、駕籠をかつぐもかつがれるも心をつかふだんにはりやア同じことサト笑つて居る中常八はお熊を呼出し勝手にて叫くたしかに酒肴を言付て貰ふのならんかこれよりしばらく盃ごとありその風情は略してしるさずよろしく察したまふべし既に酒も久しく汲て日も暮たる折しも表の方の障子をあげ「へイチト御免なさいませし此方に常八さんはお出なさいませんか、當、アイ、と立出何か咄し合ひ座敷へ來り、當、旦那どうぞ少しの間おひまをお願ひ申す、且、ヲヤ左様かそれぢやアおいらも歸らうト立かゝればくま、何だエ常八さん誰れが來たんだエ、當、ナニ勘次が此間中たのんだこととちよつと新川までいつて來ますどうぞ少の間お頼だヨ、且、清元勘次か當、エイ左様サ、且、それぢやアこゝへ呼ねへナ、當、エナニ勘次の使でございませくま、そんな

らばはやアく往てお出な旦那をばお待せ申ておくからエ旦那へおそくともお待なさつてつかはさいましナ、當、それはありがたふ其様ならば直に往て參じますと無理にお熊にたのみ置その身はいそぎ出で行跡にはお熊と彼旦那遠慮なければうち解て俱に酔をぞつくしける抑此旦那といふは相應なる通人にて名を何とかいふを知らねど俳名を梅里とよびて随分女郎唄女にもなじみありて面白き身のうへなれどいかなるゆゑにか此ほどこの家のお熊に思ひをかけて居たりしかども言寄る手つゞきもなく日を過せし中清元常八が心易きよしを聞て今日わざと來りしなり理なるかな此お熊も年は二十七八なれどもいまだ定まる夫なく家は弟の名まへにて元來氣勝の生得派手なることが好なるゆゑに近き頃まで座しきを勤ゆまだ白齒でも憎からぬ風俗殊に近年は少し時節にはづれたる歳増女の島田鬻が男の目に付て流行折からなればすべての出立娘風のおかみさんが多く歳増女仕立を好む娘また少なからず二十歳にして緋鹿子の切をかけ七歳の兒女紫ちりめんのまげ紐を好む嗚呼世の中の流行其是非に辨ずることあたはずこれしかしながら夏の土用中に約豆を賣り元日から拂扇箱とよくをかはき萬事はしり過て跡へもどるのゆゑなるくしそれはさておきお熊が姿をこゝにしるさばいま唄女を止てより却て其時の風はなく黒絨に三ッ龜甲の紋付もつとも黒縹子織留の上に金銀にて蝶々を縫し野暮なる半襟をかけ下着は本八丈の三升格子の黄絲極色

の薄き花色裏紫の山まゆに媚茶の小純子を腹合にせし帯をべめ襦袢の袖は兼房の小紋ちりめんへもへたつ様なる本紅の裏を毛抜合に付半襟は大紋りん子を紫と淺黄にて握み絞りにしたる素人染の思ひ付きもつとも衣紋の所へ紅入のゆふぜん染の縮緬の胴が少し見ゆる襟おしろいは松本の舞臺香貌は仙女香の別製龍腦の匂ひ梅花のごときをうすくつけ紅も笹屋の色好み眇毛を剃し跡眞青に見え黒目勝に力身ある眼元はげし相に思はれても聲は鶯のごとく男へ對しそのものいひはあまへずして自然に色氣あり音曲の諸藝はいづれも師匠の出來る所爲にて別て圍八節のくどき古今の名人なりしかば近所の唄女も姉さんくと敬ひて教られんことを願ふ斯のごとくなればこれまで宜旦那が種々に言寄れども上手にあやなして一度も男に身を任せしことなきは小野の小町のたぐひならんと噂をせしとかや實に世の中の人情は得難きを求めたがり成かたきをこしらへたく思ふが常なるゆゑか梅里もこれを見聞して深くしたふ心の發り今も次の間へ立て行後姿を見送りつゝ溜息を吐て手に持し喜世留を膝のうへに落し吹がらのちるをはらひ除て鼻紙入の小菊を一枚とり金入より金を出して五百疋をも紙にひねりてさし置けり必竟いかなる所爲なるやさらに其意をしることかたし次々の巻をよみておのづからに察したまひ

うぐひすや竹の子簀に老を啼

かくはいへども各々の好みにより思ひ入に依て其情は深かるべし

風月
花情
春告鳥卷之七了

江戸 爲永春水著

第十五章

雲の鬢霞の眉雪の膚と天地の氣にも譬ゆる義女の情人まつ宵の油賣嬉しと思ふ曉は鳥の聲も恨めしきそのきぬくがまた兼言となるまで深き中といふはじめは何が媒人を男女のおはかる世に思ふ人より他所外には男女もなき様にこがれこがる戀の路實に月下氷人の所爲にやあらん爰に相坂町のお熊をしたふ一個の通子も過去の縁しのあるゆゑか思ひ詰てはなか／＼にわすられずとや今日もまたお熊が許へ音信る表を伺ひ路次へまはりしづかに勝手口の腰障子をあけて 梅御免なさいヲヤ大分おしづかだねへトイて居る中の間の障子の内女の聲「ハイ何人トいひながら障子を少しあける 梅ハイ私あんまりおしづかだから考て居ますのサ くまヲヤ／＼何御人かと思つたらよくお出なさいましたねへト立て出迎ひ「サア此方へト言ながら次へ來る姿を見れば

茶みぢんの艶なし上田細下着は縞縮緬の媚茶の小辨慶を二ツ重ねもつとも花色羽二重の裾まはしをつけ御納戸しぼりの長襦袢淺黄縮めんの湯具黒朱子の帯をしたらなく結ひ紬を御納戸と媚茶と鼠色の染分にせし五分ほどの手綱染の前垂紐は松葉色の五呂服絲の端を立落せしを巾を狭くして付たりさて髪はいまだ髪結さんが不來と見へて初みどりといふ梅花のふけとり藥の水油にて宜く梳上て結んで貰つた達摩がえしえ大きな珊瑚珠の菊座の玉を付鼈甲の浮なしへ四分一の散し薪繪なしたるを中へ指象牙の中へ青貝にて南天の葉を彫入れ南天の實は○此くらゐのさんごじゆを寄せて入たるさし櫛をちよいとさしたり 作者曰モン好風なこしらへてごいませうネ 猶くはしくいはゞ少し寒邪がしたと見へて大辨慶の廣袖黒袷子の衿のかゝりしを上へ羽折て今日は湯へゆかぬと見へて素貌の眞白なるうつくしさ紅を少し付たるは今漿水を付たる所とおもはれたり抑はかなきことをしるすに似たれど時代の風俗を百年後の好士に見せんとておさなくもかひ付ぬくまサアこちらへおいでなさいましなねへト言ながら羽折て居たる廣袖をすウイと兩袖から脱て仕舞くま今漿水を付て仕舞ましたら何だか戰栗がする様になりましたから此様な衣類をいたしてトいふは強氣女だと思はれまじとする男への會釋なりくまサア火鉢の際へお出なさいましたト炭をつぐ手元も雪のことし 梅モウおかまひな

さんな私しやアまた餘りしづかだからお留主かと思つたのサお獨りかへくま「ナアニ今清は湯へやりました理助ははこまはしのことなるべしすべて畧したる文ありあの子の迎に参りましたヨ私一人で淋しひから本を讀んで居ましたのサトひながら繪入の本を脇へ片寄くま「サアマ御安座となさいましな今お茶を入れますヨ今日は何所へ 梅「エナニ何方へとおつしやつて此御許へ來ましたのサ此間も鳥渡参つて大きに給酔て何様な不調法でも言はしなひかと思つて申分ながらまた少し酒酔たく來ましたのサしかし折角本を看てお在の所をくま「ナニ本を見て居ると申たツてたはひのなひ本でございすはネ 梅「ナニ左様でもござぬますめへくま「ハ、ア娘七種かネトひながら中本をとつて序文をよみ 梅「金龍山人狂訓亭爲永春水かよく種々な名を書て置作者だくま「左様サねへ全躰元は南仙笑楚滿人と申ましたねへ 梅「左様サ二代目の楚滿人サ大そふに弟子なんぞも出來やしたツけがなぜ名をかへやしたか くま「ヲヤそれでも狂訓亭としてからは弟子任せにしないと申こととてございすがそのせへか近頃の中本はこの作者が一ばんおもしろふござぬますヨそれは左様と私も丁度淋しくつて居る所でござぬますから誠に嬉しふござぬますは今に清が歸りますからマアゆつくりとなさいましヨトにつこりとし 違棚より茶の箱をとりいだし菓子皿などを持て鐵瓶の湯を土瓶のなかへうつし茶を氣ながにはうじて煮立たる土瓶の中へ入うとしてしなやかなる指を湯氣にてやけどをな

し耳を押へ左の手にて土瓶を五徳の脇へかけてむらし置猪口のやうなる小器茶碗でありそふな所を朝鮮湯呑の新しきへ茶を汲て出しくま「サアお茶を一ツお上んなさいまして美味もないお菓子だけれどもお取なさいましな 梅「さつそくお茶が出來ましたネ一ツいたゞきませうト茶碗をとつて見ながら呑 梅「おもしろいお茶碗だネくま「ナアニお茶がおいしくない様な色にうつりますけれどもお花が此間千鳥さまで頂戴て参つてまだ一度も遣ひませんから貴君へ上ましたト云ひながら火鉢の引出しより船ばし屋の振出しを火鉢の角へ置くま「金平糖を一ツしかし何様だかもらひましたのだから知れませんヨ 梅「そんなにごちそふなすつては恐入ますしかしお清どんが早く歸つてくれ、ばい、ネ御面倒でも歸つたらどふぞ少し飲よふちやアないかネくま「サア宜ござぬますヨ最今に歸りますヨ 梅「酒盛もいゝが御迷惑たらふネくま「ナアニめいわくなとてござぬますものかネ私も丁度よいと思つて居ますのにねへト笑顔をする 梅「それでも程のいゝおまへだからヲヤそれは左様と先刻から忘れきつて出たト云ながら袂より何か小少四角に紙にて封じたる物をいたし 梅「今日は何ももつて不來がこれをお土産に上よふくま「ヲヤ何のお土産が入ますものかトひながら彼包しものを看て くま「そしてマア何でござぬますか寔にありがたふ 梅「何だと思ひだネくま「左様さねへ何でござぬませうかお猪口の様でもありますがト考へて居る 梅「知れます

かなくま、左様サ只上にはお巽のし斗ばかりだからどふも知れませんマア何でも器物の中でござ
 ゐますねへ 梅、左様サマアどふぐでもないネ持遊びサくま、ヲヤ、お手遊びかへそれビア
 急度私の好きな小細工ものだねへ何だらふ最ぢれつたいネ早く見たいねへと手にとりあげ何
 かうれしそうに封じを切る所へ下女お清湯から歸つて來るくま、清かへきよ、ハイト中の間へ
 來てきよ、お客さまでござぬますかへト梅里を見ておじきをしながらきよ、これはお出なさい
 まし此間は有がたふござぬますトいつぞやらしい 梅、イヤお禮ではいたみ入ネトキニおまへの
 歸るのを待て居たどふぞまた今日もお世話になるのだがわりいかネきよ、ナニわるひことか
 ございませう今日は宅の姉さんもすなはちおくま 氣がふさぐと云てお在なさいましたから丁
 度お賑やかでよふござぬますヨドレ往て參りませうト立お熊は最前より餘念もなく手遊び
 といひし箱の封じ紙をとつてやう／＼箱のふたをあけようとしてくま、ア、清やはやく往て
 來ておくれヨトひさしてまた箱のふたをあけにかゝるきよ、ハイ往て參りませうが何をマア
 一心になつてお出なさるんだかトいへはお熊は莞爾としてくま、今お土産におもらひ申たの
 サきよ、大分かはいらしい箱でございすネおまへさんのお好きなトいひながら臺所の方へ行
 梅、ア、もしお清どんへとふぞおまへ往ておくれなら御如才もあるめへか此間の通りにし
 てそして歸りに親父ばしの和田で大概なのを澤山と焼てお飯を付てよこせと言付て來てお

くれそして仕出屋の方へは玉子蒸の中へぎんなんを多分入れてと左様いつておくれ此方の
 姉さんがお好だからきよ、ハイ／＼かしこまりましたと出て行さてまたお熊は彼箱のふたを
 開てくま、ヲヤ、マアかはいらしいねへといひながら宮の中に吉野紙に包んであるものを
 一ツづゝ出して見る

これは京都土産の芥子人形なり近來何にかきらす小細が流行ひなの道具なんどもこま
 やかなるを愛することはお娘御さんがたの御存知なるべし

右の人形は祇園町の唄女舞子妓女そのほか仲居小女子などかのこらず客の席にてさ
 はき居る躰座敷一統赤小豆粒ほどにこしらへ客は喜世留を持たるもあり盃をもちたる
 もあり彰簡は黒羽折にて奇妙なる手つきをして居る類を幾數ともなくこしらへて凡人
 物は二十四五人ほどありそのほか臺の物吸物どんぶり皿の類をのせたる臺の大サ赤小
 豆よりも小さく燭臺は米粒ぐらひもあらんか猶その外の品もいろ／＼器用に彩色して
 こしらへたるを四方三寸ぐらひの桐の箱へ入てありその箱のふたを引くりかへせば疊
 を敷たる様にさいしきたりそれを座しきとなして人形をならべるそのこまかなる手
 際は賞るにたとゆるものなし

嗚呼看もの聞もの何に寄らず日々に新奇に競ひ自由の上に自由をなすしづけき御代の節に

住む兒女童子たちよ必しもおろそかに思ひたまふことあるべからず今より二百餘年のむかしは三度の食事もやすからざりしを上々の御恵にてかゝる太平を樂むと、尊み給へ

第十六章

くま「ヲヤ、奇麗でござりますネエ、梅、その箱のふたをかへしてその上にならべるとい、ヨトひながら箱のふたをひっくりかへし疊のさいしきの所を出してやるくま「ヲヤマアどふも、よく出来て居るぢやアござりませんかねへそしてマア此髪の風をこしらへた所から何からモウ、何とも賞様のない様でござりますねへヲヤ此蓋がおざしきでござりますネどふしたらよかるふとふも、感心ぢやアござりませんかこのお座しきへみんな乗つて仕舞のだものを小細はづだトひながら段取をしてならべ、くま「どふも寔にありがたひねへどふしてこれが考だと申て推量すものかねへまことに、嬉しひト餘念もなく悦ぶ風情自然とあどけなく見へて十五六の娘のごとし、梅、なんぼ才物なおまへでも當なかつたネくま「ヲヤ才智か否でござりますヨおまへさんこそ御才智とやらでござりますは人の嬉がる様な事ばツかりおつしやつてをしてマアおせじがよくつて下女にまど、叮嚀に物をおつしやつてそれだからあの子や、おはなのを、お清までか理介でも不躰ながらお賞申て居ますは梅、イ

エまたおまへのお口前はその通りだものをそれだから私なんぞは行届ねへから歸つた跡ではさぞ、うるさい奴が何時までも居て怠届だといはれなひうち歸らふと思つてもツイ長くなつて後ではどふも氣の毒でならなひから言解ながら參つてなんぞと思つてやつぱり來たいからだねへさぞさげすんでお出なさるたらふき、まことにどふもおまへさんは女郎衆でも買にお出なさるか可愛と思召情人の所へでもお出なさつたらさぞ先よりは手とやらがおあんなさるだらふねへトいふ所へ出し、扱に下女き、マア、左様お二人で賞美ツくらばかりしてお出なさらずとお爛が出来ましたお肴の參りますまで御漬物で、一口お上んなさいました爛ちやうしを袴へ入れ足なしの好風な臺のうへに小品井を種々ならべひやうたんの清しどんぶりへ水を入れかはひらしき猪口を二ツばかりならべ持出き、やつぱり中間で宜ござりまするか奥の火鉢へ火を入れませうかくま「ヲヤ清かびっくりしたヨ何時の間に歸つて來たのだへ障子の音もしなかつたのにヨ内證ばなしをして居ないでよかつたねへト男の顔を見て笑ふ愛らしさ何とか思入あひ女のかゝる言葉をいだす節は誰とても胸のと、ろくものなるべし、梅、どふぞ内證ばなしといふことを一生の中に見たいもんだねへお清さんき、ヲホ、おまへさん其様なことをおつしやつてネエ姉さん、左様サそれぢやア私が内證ばなしをしなひでよかつたと申たが自惚らしいと思召たらふ、ウき、左様サ

ねへ餘事何もおつしやらないがよふございます下目でお在なされるも知れませんヨ 梅コウ
 おぼへてお在よおまへまでか其様なことをいつて何様してもまた違つたものだねへお
 召仕までがくまアレまたあんな世事をあつしやるヨ夫やア宜が此所ぢやア餘り鹿末らしい
 ねへ奥へ参りませうぢやアなひかねへ 梅ナニくこがよふござるますまたお客でもお
 出なさるとわるひからといひながらちよいと立て居直り 梅サアマアおもちやは後にして
 御酒におかゝんなせへナト おくまはわらひながら 人ぎやうをひたよせ くまさようサねへ放蕩きつておまへさんが内
 の者の様だねへ可笑しかしどふも大事で氣になりますヨといひながら人形を吉野紙に包み
 元のごとくに仕舞きよ何でございましたか私も見たふござるましたねへよくくお氣に入
 ったと見へますネくまア、モウく氣に入のどころてはなひヨ今出すとまた御酒をあげる
 のに邪魔になるから跡でゆつくりと見せるヨあの嬢に見せたらさを嬉しがらだらうサアマ
 ア一ツおあがんなさいました猪口を清しておくまマアく其様なことをいはねへてト鹿
 末に言て心付くまヤ御免なさいましヨサアおまへさんから一はじめなさいましな今家内
 の者の様におんななすつたからサ 梅そんなら仰にしたがつて始めませう少しの内もお宿
 のものになる氣でと自惚のお猪口はじめといたしませうト猪口をとるお熊は先刻の言葉よ
 りいよく色氣をふくみわらひながらくま先刻しがたの同鹿相としてお酌をト燗てうしを

とつて酌をする折から勝手の障子を明て「ハイおあつらへてございますきよアイく御苦
 勞でござい其所へ置してお出ト言ひながら立て來り持來りしさかなを臺へならべて座敷へい
 だす 梅サアおまへのお好な銀杏の多分とはいつた玉子蓋が來たから澤山とおあがんなさ
 いサアマづお猪口をトお熊へ盃をさすこれよりいろく酒事ある其ところへまたもや障子
 の音ガラくく女かみゆひお元もと「ハイ今日は大におそくなりましたきよヤお元さん
 かへト言ながら中の間へむかひくまお元さんが参りましたがどふなさいますエくまア、ど
 うせうねへトすこし考へてくまどふぞ明日にしておくれといつておくれなトいふをお元は
 直に聞付もと左様なら明日参りませう今日はおそくなりましたからどふだらうとぞんじま
 したがそれでもと思ひ直してちよいとお寄申ました左様なら明日は早やアく参りませうね
 へくまア、どふぞ左様しておくれなもと「ハイ左様ならトかへりゆく 梅わたくしには決し
 ておかまひなさらずにお髪をなさればいねそれぢやアお氣の毒だくまナアニ左様ぢやア
 ございませんヨ私の我儘でございますネ御酒を少し給るとどふもふせうになつていけませ
 んヨそれだから女は御酒をたべなひほうがよいと申ますが實正に左様でござるますは外を
 歩行ても女の酔てぐたくして歩行のを見ますとモウく見ツともなひから止よふと思ひ
 ますけれどもツイたべてなりませんは 梅ナアニ左様おつしやるけれどもおまへさんの寔

にいやみのない癖のない上戸だからいゝのサあんまり上らなひでも御業活がらでわるひか
らといつてやつぱり心なくおまへを御相手にして數刻までもたべよふといふのではないが
丁度いゝほどの御酒だからいゝのサ私なんぞも酒を呑むとごふも思はず口敷をきいたり何
かして他さまの氣に入らぬこともあると見へて兄きなんぞにやアトキト叱られますけれ
どどふも少しづゝたべなひと寔に心さみしくつてならないから外の楽しみはなしとツイだ
べてなりませんくま「ヤヤ〜いかな事ツてもおまへさんこそ寔にくせのない和らかない
御酒だと申て衆人お噂をいたしましたは私なんぞこそどふもさつばつになつていけません
ヨ」ナアニ左様でなひのサ酒はわるいと難癖を付て見ると男でも酔た日にはやつぱり外
聞のわるひことがありますのサといふ所へまた〜蒲焼をもつて來るきよ「ハイおあつらへ
が出来ました 梅いろ〜大きにお世話さまサア〜おまへも此座へ來てひとつお上りそ
して後で衆人うなぎでお飯をお上りサアお清さん酌をいたそふぢやアないかト銚子をもつ
きよ「ハイありかたふト猪口をとるきよ」ヤヤは〜かりでございますこちらへお貸なさつてく
ださいました手を出すくま「ヤヤ私が酌でやりませう 梅どふぞ私にお酌をさせておくんな
さいなお清さんのお酌をして見たいからサクま」ヤヤどういたしませうネ私しやアまだ今年
は有卦に入はいたしませんはづでござるますがト笑ふ

實にも人情のおもむく所おのづから下女までもかくのごとき洒落をいふ勸學院の雀に
あらねど常住に馴し口合はさすがに土地にも依ものならんか

そも〜主女に對する此客人の出立はいかに左にしるして以て流行をしるの一興とするも
のなり

上着は媚茶の三弁格子の極こまかき縞の南部縮緬下着は琉球紬一ツ羽織は棧唐のおと
なしきごまがら線帯は筑前の紺博多しかも一本どツこなりその外持もの懷中ものこれ
にじゆんじて好風なることゝ知りたまふべし

風月花情 春告鳥卷之九

江戸 爲永春水 著

第十七章

借も梅里は婢女の言の葉草も野暮ならぬ他愛相に感じ入てお清の顔をじろりと看て 梅おめへまでが其口才だものを姉さんは申ぶんのねへはづだドレお肴をトいひながら蒲焼の蓋をとり魚尾の方の味美所をまづ二三本小皿へとりわけ 梅これはマア姉さんのお初穂とト言ながらお熊の前へおきまた二串三串とつて小皿へいれ 梅サアお清どんお上りト出し紙入より金を二ツほど出して紙に捻りてそつとお清の手にわたし 梅お清さんもふ一ツお重ねトまたく酒を吸ぐきよ「ヲヤこれは何でございますへありがたふござぬます姉さんどふぞお禮をおツしやツてト もらひしかれを おくまにみせる くま「ヲヤどふも毎度ありがたふござぬます姉さんどふにお出なさる度毎に此方ではお心易だてばかりいたして我儘なことをして居ますのにそんなになすつてはどふも寔にお氣のどくてござぬますヨお清やよウくお禮を申な 梅何だネ

其様におつしやるとかえつていたみ入ネサアくおあがんなさらねへかト蒲焼をすゝめるくま「ハイありがたふいたゞきますサアおまへさんもお上んなさいな今日のは格別美味様だごこいすは 梅左様サねへ今日のは餘程魚がいゝねへ このとき下女はちよくを きよ「はいかりながらあなたへまた私はお臺所に用がござぬますしお燗を直して参りますト立を呼止め 梅「マアいゝはなをしてうなぎをそればかり持て行ずとこゝで澤山喰なせへ きよ「ハイありがたうござぬます今にまたお花さんが歸りますと着物でも巨燗へかけて置いて上ませうとぞんじて火がたんと發してござぬますからあぶなふござぬますからト勝手へ行 梅イヤ實にお花さんとはんだ評判がいゝねへおまへはお仕合だいゝ妹をおこしらへなすつたくま「ハアありがたうござぬます寔に衆人さんが御ひゐきになすつて呼で下さいますから私も仕合せどぞぬますヨそして當人が素直で實情ものでござぬますヨ 梅容儀はよし藝は出來それで實があつて言分なしだ餘ほど愛くるしいかはいらしい子だねへくま「ナニ左様十分でもござぬませんけれどもしかし骨が折れませうヨ昨夜も丁度丑刻にかへりましたはネそれからまた今朝直に早く安堵に寝も仕ないでちよいと淨水をつかつたばかりですぐに出て行ましたからどうかと思つて理介をやりましたがまだかえりませんから通しにでもなりましたかそれとも理介をかへしませんから今に歸るかも知れませんのけかはひさうにさぞ骨が折ま

すだらうヨトいふところへ下女は梅ししかしおまへなんぞに仕立られる子どもは仕合せだネをしてマア泰公人衆が不殘實體らしいそれといふも仕人がいゝからの事サネくまナアニどういたして私なんざア我儘者で行ませんけれども人仕ひのわるい私に引かへて居る者はみんなようございませヨたがひに實を盡し合てよく氣を付合ますは理介なんぞもよくあの子を勞補てやりますからマア安心してございませのサまた箱廻しの未可通なには困りますヨどういたしても歳を経て律義なせへかよく氣が付ますよ梅それといふも一切おまへさんの勤功サどうぞ其實者ばかり寄合て御在なさる所へ私も仲間に入りたいものだネくまおまへさんは實がないからかぶれたいのかへ梅ナアニ左様ぢやアないのサ仲間へはいつて實を盡して見たらよからうというのも不及願ひだネおまへなんぞハおたのしみなんぞにはさぞく眞實をお盡しなさるだらうお浦山しいネくまおたのしみとはエ私なんぞが何のたのしみがありませうたとへそれはマア破鍋にも綴蓋とやらがひよつとございませ所が御存の通りわが儘ものだからどうせ男の氣に入る事ちやアありませんはそしてどうも私しやア嫉妬深だからひよつと間違て情人の一人も出来ませうものならばそれこそモウく何所へもやるのが否な氣になつて自分ばかり可愛がる心が發つて自惚切つて嫉妬が病てなるまいと存知ますはそれをマア心で意見をして覺悟て居るにした所が生て居る自惚には小許は斯う

と思ふ人があつても嫉妬といふ慾心が出るので愛想の盡る種を蒔りか出来ない方が増だらいとこれまで情人をば辛抱して居つたのでございませはなまなか思ふお人が出来ましても嫉妬が捨られるよりは何にもない方が拙ない心を知られないで恥をかゝずに仕舞ますは近來の流行ことばに嫉妬をやくことをじんすけといふことは遊所の隠しことばなりしを今は荒麻の風呂敷を脊負て使にあるく上出店の小僧の詞となり昨日山家を出し猿の様なる丁稚が前後も知らて。墮落を歸して嫉妬を揚てトそゝり節に異變なる聲にうたへば實に正銘ましりなしの江戸ッ子が流行おくれのじんすけをいつまでいふべきことならんやこゝにおゐてお熊が嫉妬といふことを嫌ひて白地にやきもちとはいふなり最早じんすけおツこちの氣障言葉をやめて新らしき東ッ子らしき眞の通言をこそ好ましけれ以來はじんすけといふ詞を遣人をさして氣障の本店と笑ふべし此ことをしるす中にも彫刻の間に光陰うつりて予が筆もまた流行におくれんことをおそるゝのみ

天保六年の九月はじめつかた はやこのことをそしりてしるす 作者

此時梅里はお熊が情を含みて心深き言葉にいよくこゝろうれしく梅なるほど才智なおまへなんぞの思召は左様だらうネまた私なんぞの様な愚鈍なものは前後の勘辨もなくどふも能と思ふ人があるとどふぞ一生の思ひ出にあゝいふ人と一つしよになつてうれしい日ぐ

らしがしてみたいと他人にこそ言はないけれども愚智に氣をもんだり考へたりする事があ
 るのサそして他がよく嫉妬深ひのやきもちやきだのといふけれどそれは男の了簡にあるこ
 とぢやアなひかへ嫉妬をやかせる様な風をするから女がはらも立やきもちをやくのだらふ
 ぢやアなひかそれが女の情合だものを何をしてもしもいゝ勝手にしろとしめくゝツて居られち
 やアまア私どもならちもしろくなひねそれだから男の方で世話をやかさせさへしねへけりや
 アいゝのにと思ふやうな私どもには誰もかまひてがなしまたやきもちをやかせるほどのも
 のは幾人も惚人があるものだからどふも詮方がなひのサネくま、ヲヤマアいかに如在なく卒
 下してものをあつしやればといつてかまひてが有の無のとお前さんがたの様なその位心の
 行届いてお在なざるお人が世の中に二人とあらふものなら實正にトいつてあとをいはずだれでも
 梅、なぜ二人と言ひだらふそればかりは私斗だヨ世界の男は衆人宜から女に世話をや
 かせるとのサ私なんぞア所詮その眞似は出来ねへからどふぞせめて戯言にでもやきもちをや
 かれて見たひのサそれだからおまへさんもくま、なんてござりますエ、梅、なんでもないのでサ
 マア上せせうとして最餘り長座になつたネどふか日が暮る様だ大そふに久しく遊びました
 トにはかにかへる身づくろひをしてきせろ、くま、ヲヤなぜへマアいゝぢやアございませんか左様急に
 トをしまひさかづきをあづけにせんといふ何かお思ひ出しなすつた様だねへ、梅、じやうだんにも其様なことをいつておくんなさると

嬉しいねへくま、それ御覽なさいまし他人さまのことでも此くらゐなものだからひよつとし
 て何したら何様にやきもちがやけるだらふねへト男の顔を見て莞爾と笑ふその思入れの艶
 色筆にはつくしがたし男は心も蕩ける如くならんか、梅、ひよつとしてどふするんだエ
 くま、マア左様なら酒はよしてネ、梅、エイくま、お飯をお上んなさいなお茶を入れませう梅、左
 様かネそれぢやアおまへがあがるならばいたゝかふかネ、くま、ア、左様なさいましお清や
 きよ、ハイト勝手より来るくま、アノウお飯を上るしネ私も給るから能漬物を少しおくれそし
 ておめへもたべなをよ、ハイ、くま、アをしてお湯を入れて来ておくれヨきよ、ハイお湯はよ
 く煮立ておりますト立て行お熊は其中に新橋の清風といへる茶をほうじる近來流行の茶な
 りこの折節勝手の障子をあけて、男、ハイ御免なさいまし尾張屋から参りました明後日は間
 違なくお花さんをおやしきへお出しなさいますか相唄女は此方でこしらへますから間違ま
 してはわるふござりますから鳥渡お聞申に上ますと申付ましたトいふことをきくつ、くま、ヲヤ尾
 張屋さんかへ左様申ておくんなさい大きにありがたうございませう明後日は少し外に約束も
 ござりますか他ならぬ尾張屋さんのことござりますから差替ましてお屋敷へ上ますから
 御心配なく連立のお方をおやくそくなさつてよろしうござりますしかしながらまだ新子の
 こととてござりますから萬端よろしくおねがひ申ますと言ておくんなさいましハイ御苦勞

おほりや「へい左様ならト歸りゆくお熊はもとの座敷へ来て安居

作者曰右尾張屋の男へ對せしお熊が返事何も明後日急度したる約束もなければ止になりましたといふ變替をくはぬ用心の釘と見へたり如此あいさつは先刻手遊びの人形をうれしがつたりあどけなき風情をしたりまた暗愚ことをいつて酒を呑だりせし様子とははるかに違つてしやんとせし言葉なんと如在のなき中歳増ならずや看官よろしく察したまへ

第十八章

こゝにお熊が姉となりしお花が以前お民といひし節に深く契りしかの烏雅は兄の幸次郎に憎まれ上方の店へ登せられしが東のこのみ心にかゝりて過にしお歸が行術を始め薄雲の情もしたはしく第一にはお民のことを民じて不便さやるかたなく種々と東へ便りをもとめ目をかけし友達または彰簡などの方へ毎度手紙を下し何卒その身の東へ歸るまで兎も角も凌ぎ暮し居る戀にとりはからひくれ候様にとたのみくだしけれども一向に東より音信なく餘りの戀しさに氣病となりてぶら／＼と煩ひけるがある夜只一人床の中にて情と思案をするに今の様子にては中／＼急に故郷へ歸られまじきはからひなれば所詮上方にて物を思は

んよりはいかなる業をなしたりともわが一身をやしなふほどのことは出来ざることのあらざらんやと心をさだめその夜すぐに上方の店をしのび出て路をいそぎ東に下りまづ誰よりか苦勞になるはお民なればそれをたづねて少し音信を聞出し安房上總下總常陸の國々をたづねめぐりしが少しづつそのゆかりを聞ことあれどもしかとせし在所をおしえられねば心をくるしめ身を勞らし狂氣のごとくさがし歩行ども知れず爰に松岸の里をはなれて芝崎、ゆく手の村の片山添に古たる一軒の草屋ありあるじは野出の二太郎とてこゝらに名うての悪漢なり何所よりかは連來りけん十六七の處女にていと美麗を傍に引居おき二太サアどよする松岸が否なら潮來へ往ともまた他へ行とも返事をしるな鎌倉そだちの我儘を直高にする氣で三四人雜用つかつた手めへの骸一人前に十兩づつも立めへにするのだアいくら強情を云つても元の娘になられるものか情人に逢合をして居る穴を見つけてから引出した此活業どふでたゞは通さねへいよ／＼情をこわくすりやア責殺してくれらアトひながら戸糊の中より取いだす銀銅金のいかもの作り鞘をはらへば二尺七寸重ね厚なる段平に夏なは寒きこぼりの刃すこしながめて笑みを含み二太これ切殺されりやアいたくもあるめへトひつゝまたも鏝音をしやんとならして鞘におさめ 三サアどよした返事をしねへかしかし野暮な處女の了簡ぢやア女郎をするのは地獄へでも落るやうに思ふから否だといふも尤だ

が素人のように窮屈なものぢやアねへ金をもらつてかはひがられて浮氣は仕徳情人はかけながし美味は客人が驕つてくれるしか其中ではどのいゝのを見立て思われわが儘をいつて何をすねてもかはひがつてくれる美男を撰どつて始終を任せて見ねへ素人よりは何程いゝか知れねへ此以前八日市場の泥八がさらつて來た娘なんざア極貧乏人の子だッけが松岸の橋屋へおれが判ですみ込せたが小見川の富有に請出されて田舎は否だといふと直に戸網町の方へ廣人見せを出して貰つて女男を四五人もつかつて今ぢやア兩親を引取つた上に兄弟も見せを出してもらつて店請人から旦那寺までうかみあがつたといつて先月もおれが所へ手紙と太織の羽織に金を二兩もたしてよこしておれが影で出生したから一生の間恩はわすれねへ芝崎の方へは足を向て寝ねへとまで言てよこしたア手めへも今におれがことをありがてへと思ふようにならアむすめ「ナニモウそりやア私を親の方へかえしておくんなさると随分おまへさんに禮は多分出來ますからどふぞかえしておくんさいまし」三「エ、このあまもずるひことをぬかせへ左様したらうぬが勝手にはよからふが此方の活業にならねへはドレ〜どふで只口先では承知もしめへサアうぬ覺悟しろ萬一いふことをきかねへ時は殺しても生膽をとる相談をして置たア生身で賣るより膽にするよと直打が下るけれどもそりやア此方の薄命だアヲヤ細引が見へねへイヤ〜血が付てもかまはねへようにあら繩に〜

てくれよふといつた所が繩があればいゝがトいひながら土間へ下りつゝ、麥俵の繩をほどひて水にしめし三「サア泣るなうぬが強情をいやア此方も意地だアなぶり殺しにしてくれるぞト娘を捕へ引倒し細き手元を捻かへされむすめ「アイタ、〜、アレおぢさんどふぞ御免なさいましア、イタ、〜、三「そんならば奉公をするかむすめ「アイ女郎でない奉公うならばいたしますから」三「エ、べらぼらうめへ手めへのよふなかほそひものが田舎の奉公か出来るものか勝手なことばかりいやアがらアコレよく前後をかんがへて見るヨ手めへ一人の身にモウ三十日も日を賣して居るはいくら何といつても二三年はかせがせねへければならねへ骸だアトいひつゝ、兩手をうしろへ捻あげ」三「サアこれから棟木へ釣して賣るのだア、引世話だ〜ト繩を手繰てその端を天井へ投かけんとするおそろしき娘は心に思ふやうとても退れぬとなれば責殺さるゝも覽悟なれど此くるしみを露ほども思ふ男に知らせもせず操とやらを守るとも知らず何所か亭主でも持もしたかと推量され去者は日々疎しとやら外の娘を女房にもらはれもしてそれなりにわすれられたら死んだ跡でかはひそふだと佛さまへおがんでくれることもあるまじ左様して見ると賞人もなく哀れと思ふ人もなく寔にくやしい犬死とやら身を穢しても命をたすかり時節をまつて親達にもめぐり逢ふのを待もしよふか左様した所が男にはモウ添こともなるまじと思案にくるゝ風情を看て」三「サアどふす

る責殺されても承知しねへかエ、不丁簡な女だナアト既に繩を引立んとするありさまに
 ちすめ「アレおぢさんいふことを聞て女郎になりませうから最堪忍しておくんないヨよッ
 おぢさん 三「そんならばきつとだナトいふ所へ表の方人おとすれば周章で娘をとらへ獵ぐ
 つわいましめの儘戸棚へかくし其所をかたづけ居る所へ村の歩行の定使が門口がらりと押
 あけて 定「ヨイ二太郎さん今御代官さまのお役人がお出なさつて村中へ急に仰せわたされ
 ることがあるによつて不殘よんで来いすぐにこないやつはあやしから即座にしばつて吟
 味をする今跡からといふやつがあらば呼て来るにはおよばぬ村の出口をべ切て他へ出すな
 もし左様いふやつがあらば其家で法螺の貝を吹上るそれを合圖に捕手をやるとの言付モウ
 不殘欠出して往ましたサア私と一所にごされそれとも貝を吹ならそふか 三「ハテナなんて
 其様にいそぐのだから今すこし仕かけた用があるからそれをしまつてから直にゆく 定「イヤ
 イヤいつものやうにゆるやかにしては濟ませぬそんならばすぐに貝を吹と竹の筒を吹にか
 られば 三「ア、コレ／＼氣の短いまあ待てくれア、氣が／＼りなことがあるが仕方がねへよ
 くべりをして往ふト窓をしめたり門口を錠おろしたり用心して詮方なければ定使と打連だ
 つて走り行跡に娘はやう／＼と戸棚を足にておしあけつゝ骸は出てしましめの繩とくつ
 わをとるよしなくうろ／＼まごつく折しもあれ壁の崩れを外の方よりめり／＼と踏こわし

内へおし入る曲ものあり娘はアツトおどろけども聲たてられぬさるぐつわぶる／＼ふるへ
 て居たりしが彼曲者は冠りたる手拭とつて娘に向ひ 鳥「サアお民ぼうや此ひまにちつとも
 早く此家をといひつゝさるぐつわをはづしサア／＼トいはれて娘は鳥雅の顔見るよりうれ
 しさ飛立ごとくたみ「ヲヤ若旦那さんかへ 鳥「ヲ、おれだ／＼何かのはなしは途中しよふサ
 ア／＼おの親父のかへらねへうちすこしもはやくサア／＼ト手拭をとりいましめの繩をは
 どけば夢かとぞ言葉も出ぬうれしさにまた泣出してすがりつく其手をとつていそがしたて
 かべの崩れを踏越つゝ脊中へしつかりせをひあげ息をはかりに欠出し勢れては手を引いて
 そぎまたは脊中に引かけつゝやう／＼のことにて逃延しが今はなか／＼二人とも一足も歩
 行がたく人里までとこゝろざしたる元氣もくじけ片息になり傍を見れば何の社か堂なるか
 森の中に見えたればこれ幸ひとたどり入て扉をあけんと濡縁へ足踏かける其時しも内より
 ビツト火のひかり表のかたへさしければこれはおどろくその時に扉を内より押明て立出
 る大男堂の中にも五六人いづれも猛々しき姿なりこの形勢を見るよりも鳥雅はびつくり驚
 きてとても退れぬ仕義なりと思へば悲しく聲を上げ他の助命をたのまんと當はなけれど一
 生懸命 鳥「アレ人殺し／＼と呼かけたりしわが大音にふと目を覺せばふしぎやな是なん南
 柯の一夢にて身は上方の木店の見世の二階に只一人り床の中にて冷汗を流して暫時忙然と

溜息をつくばかりなり

此時より鳥雅はいよく東の方を案じひそかに鎌倉へ下りお民にめぐり逢ひまた初編に名ばかり出し噂にのみさせたるお濱のことかつ薄雲の始終はいふもさらなり々熊梅里の戀情其外鳥雅の友なりし人々の前後など凡雑交たる縁次を委しく分解續編の發行は近きにあり其期を待てよろしく高覽を願ふといふ

友人作者を難じて曰予作る所の中本夢の段をもちひざることをなしと拙き所爲ならずや 春水曰そも予が著す草紙はいづれも人情の他をしるさずこゝにおいて其段取相同じ故に狂言の如く今の世態にあたらぬ場はとくく夢となす夢にして夢ならずかくも在けんともはるゝこともあるべしこは書組と目前の同じきを變化する所處とゆるしたまへかし

狂訓亭

風月春告鳥卷之九了

玉屋の君白玉のぬしへ序文を乞し節の返事をこゝに寫して換序ものなり

爲永春水寫

勅なればいともかしこし鶯の

やどはととはいかゞこたえむ

とは鶯宿梅とやら承はりつたへまいらせ候が其梅ならで誰が家にもひめとの達のよみ聲の音色もやさしき春告鳥のはし書をとていつぞやより御申におはしなりへど谷の戸の外をもしることならぬおさなき身にはなかくに及びまいらせ候はねばかたくいなみなり御草稿とて貸賜はり候冊子をばくりかへしく拜しなりいとけなきものも字智よりて面白う愛悦ひなり誠にく近き比人の情をうるはしくかきあらはせし艸紙數々多く世にありて徒然をなくさめいづれもおろかならぬ語りぐさと致し候もの、中にもこの冊子の様に愛たきは覺なく候定めてく世に御弘のふしは視る人のよろこび左こそとおしはかりまいらせ候狂訓亭の御許へよろしく御傳を願ひあげたりめてたくら

玉樓

彌生の日

しら玉

柳水ぬしね

江戸 為永春水 著

第十九章

傾城の晝寝ぬ程に思ひつめ問れぬつらさ待わびて無理に合せた疊算ぢれて迷ふて昏惚ぢれて憤發煙管に齒の跡が夜明の星のふたつみつ

葛の葉のかゝる恨みに袖ぬれて

暮ればむしの音にたてゝなく

爰に加田玉のおゐらん薄雲は鳥雅にわかれてよりつとめといふは承知ながらも思ひみだれてさすがには女心の前後をわするゝばかりに鬱氣つゝ果はやまひの床にふし中の町へもいでざりしが別荘へ引籠ほどのこともあらねば只二階に保養してありけるがある時彼内所養新造のお袖の客なりし吉兵衛は薄雲の住居にきたりて段々と意見を言聞せ鳥雅のためをおもはゞ出勤して親方にも客堵させまたその身の都合もよろしきやうになして鳥雅をよぶこ

そ近道なるべしと老人の實意をつくして教訓しければ發明なをおゐらんゆゑに納得して泪の眼元をぬぐひながら 薄「モシエ吉兵衛さんまことにありがたうござますヨしみとくと得度しましたは親身もおよばぬ貴君の意見今までの心をあらためて何様が出勤しませうヨマア酒をお上んなんしなト ちからなさそふに丁足のせ 吉「さすがは何様も薄雲さんほどあつてわかりが早い左様きいて貰ふと私も愚意ことをいつて言榮がするといふものだしかしながらお前のこゝろも宅して見ると苦いわけサといつていまも言通り年季の中はその身一人の體ぢやアなしたとへ苦界のうちに居ても冥利を考へないものは何様しても天のとがめでその身の思ふことが可ふ物ぢやアないヨ 薄「實正に左様ござますのサ自己の思ひをかなへやうと思ふ日には苦しい悲しい否なことも勤めないければいけませんヨしかし吉兵衛さんへこゝに一ツまことに苦しいことかありまはねマア酒をお上んなんしな面白くもないわちきのことにはばかりかゝつて居さしつてせつかく氣晴に來さしつたのに美味酒もおあがんなんせんでお氣のごくござますコレサお酌をして上申しやヨ 吉「ナニ〜お前が世話をやかねへても相應にのんで居るから打捨て置なせへさてその苦しい理は 薄「アイサそれござますヨ去頃中鳥雅さんが來さしつた節のことござますがモウ〜その晩に限つて種々なむづかしいことを言はしつて私に氣をもませなんした時もう是限貴君に逢れない其節にはと言たござます

は左様したら何様するとお言ひなましたからわちきが心にもよもやその晩限にあはれない様にならうとはトすこしこゝろを夢にも思やアしませんかんだか物が悲しい様でト涙をばらばらもう貴君にこれ限逢れなひ節は直に仲之町もひいて仕廻て髪もいはず湯にも這入らなひて貴君に別れたこの儘まで年季のうちは引籠て居て命があつたら信實尼になりすは死んで仕まへばそれでよし旦那さんへつらあてらしく自害するの身をなげるのといふことは仕ませんヨと申イしたらやつぱり命がましいのだと言て思入私をじらさしつてそれからしまひに其様に馬鹿なことをいふものぢやアねへをしてなにも別れて逢れねへ様なことがありも仕まひと言はしつてそれから翌朝歸らつしやるその節もいつもよりか機嫌をよくやさしいことを言はしつて歸つて仕まはしつた其時の思ひはトあとをいひさしなみだをふひてびんのほつれ手てなふながらためいきをほそきゆびにてなであげはれたるめのおちをお袖さんにいゝとときをまぎらしてもらつて笑つたことも有ましたりまた猶思ひの増ること考へ出してヲヤ何様せう私さやア拍子にかゝつて則自惚ようざますねへトにつこりわしかまにあひきやうあを自然のうつくしさは千金の直うちにしておぬらんのくらぬなるべし吉なにサくずつと吉サのろけもしたり醜氣もしてすこしは心をなくさめるがいゝのサしかしまたあんまり泣て癪がひどくさしこむと衆人がこまるからマア少斗氣を晴して夫からまた悲しひし咄しはしなせへヨ薄アイおありがた

ふナニもう少とも泣は仕ませんヨマアネ今お咄し申た程に鳥雅さんに言ていまさらに出勤して居りいしてはひよつと何様な能月日に鳥雅君にお目に掛つた節此様に思つてわづらつたことは知らつしやらねへでトすこしまた心になみだが出そうなりそれにお前さんがだん斯して信切にしておくんなますから出勤をしたとはおもひなんせんで口の半分にも出来ない女だともおもひなんしたらそれこそもう夫限愛相を盡されて仕まふのもまことに悔しふざますは 吉そりやアなる程思ひすごして見ればもつともだがしかしそれぢやア神さまや佛さまもねへようなものぢやアなしかへお前の不斷信心する堀の内のお祖師さまでも何様でもまことの道を欠ねへでおやかたにも損を掛ず鳥雅さんにも實をつくし他人の思はくを悪くせず少しもまがつた事がなくつて信心をする日にやアそれだけのねがひが叶ねへことがあるものかまた神さまのおちからを頼むばかりか第一條は私が何様なにでも其節の證人になつてお前を鳥雅さんに不實だと思はれる様なことはしなひからハテいゝとしをして此所なところへ来て遊ふから新造禿には馬鹿にされるけれど左様いふときの證古人にはとしよりだけに他人も用ひてくれるはナネよしかへマアよくこゝろを落着て考へて見なせへ 薄アイおありがたふざますトいふ所へ次の間のせう喜八へイ御免なさいまし吉兵衛さんへ先刻左様おつしやつたものがまいりました 吉ヲイ喜八どんか御苦勞く 喜へイ御酒も此所へ置てまいります

吉「アイよし／＼その鍋をば爰へ持て来てかけて貰はよ 新造「アイ私が其火鉢へかけますヨ
トいふところへ仕出しの臺や男「へイ御免なさいまし御あつらへが參じました 喜「ヲヤ最來たか
 早かつたノ吉兵衛さんへ今一物のおあつらへも參りました 喜「ヲイ／＼そりやア詞度い
 サア／＼此方へ入れてくんな臺やの男「へイ／＼ト立派なる肴をならべて出て行 喜「喜八ど
 ん頼に来てお飯を喰なヨ 喜「へイ有がたふ只今いつて參じますトいでて行く薄雲はこの品
 々を見て氣の毒そふに 薄「ヲヤ何ぞますへこんなにいろ／＼取寄て薄垣さん私の左様言て
 置たものは何様したへ 次の間「アイ今直だと言て來ましたがまだ來ませんからまた雲路を
かむろの 下まで見せにやりましたヨト いふを聞つけ 吉「なにせまた左様いつたのだへこれで澤山
名なり だのにおいらアまたお前に上様と思つてなまづを左様いつてやつたのだそして好な玉子蒸
 の中へつゝこんで食るといふのが極美味のだサア／＼お上り 薄「アイおありがたふア、引
 鳥雅さんが好物ぞましたツけヲヤおゆるしなましツイまた言出して 吉「そりやア何様もそ
 のはづサマア／＼早く食なせへヨしかし斯して二階に居られるから病氣でもなんでも氣儘
 が出來て能ネ 薄「アイサ旦那さんのこゝろもちも實に有難ンぞますわちきの病氣は他ぢや
 アなし鳥さんのことゆゑの病氣ぞますから別莊なんぞへ遣つて陰氣になつては猶わるひし
 まだ二階ならば常住の居所だから用も足るしなかのいゝ傍輩とも朝夕同宅にゐることだか

ら鳥雅さんの噂でもしてまた氣の晴ることも有たら自然と出勤する氣にもなるだらうと内
 室さんもいろ／＼氣をもんでくれさしツて斯して置ておくんなんすのぞますから實にお峯
 どん こればやり はじめわるくしてはくれませんのサそれだから私もだん／＼考へて見ると今
 貴君のいつてくれさつしやるとふりはんとうに如斯して居ては冥利がわるふぞますけれど
 まアお聞なんしヨ再應いふやうぞますが鳥雅さんがあいかはらず來てお在の事ならばそり
 やアもう何様な承知にくゝいやな人でもつらゝる客人でも急度辛防してとつてそのかはりト
いひかけてすこ はづかしいことぞますが鳥さんでこゝろを晴して否な客人の取返しをしてそ
いにつこりして れをたのしみに苦界の月日をたゝせたふぞますはいまの身になつて見ると何様も／＼くる
 しい悲しいことのとにかえし様がおざんせんハネト なみたをふさくやしそふにことばにちからをいし
れておしつける様にいふこれ女郎衆のくせ也 ばらく無言で居たりしがやう／＼と氣をとりなをし 薄「吉兵衛さんかんにんなんしヨ病氣
 で居るくせによく口敷をきくとおもはつしやるだらうがツイ貴君のやさしひことをいつて
 くれさつしやるのにあまへて心に思ふありたけを言たらばちつとは氣も晴様かと貴君の迷
 惑さつしやるのもおもはず面白くもなひことばかり堪忍なんしヨコレサ薄垣さんお袖さん
 は先刻から何様さしたのだノウ新造「アイサ呼ませうかねへ 吉「ナアニ打捨てお置なヨ何
 所へかいつてまたただまでも取て遊んで居るのサイまになんぞ喰たくなるよと出て來るはナ

それでもお前の事をば苦勞にして氣をもんで居るが可笑アハ、ハ、薄「アイサ何様に實者
 で在ッしやるだらう寔に年の經なひ者の様ぢやア有ませんはそしてお袖さんにかぎつて腹
 を立た貌を人に見せさしつたことはありませんヨ」隨分あの様子では全盛にもなり兼ま
 ひとおもふのササアマア私ばかり酒を吞で居てお前お飯を給ればいゝサアこれでたべなせ
 へナ薄「アイおありがたう新造」吉兵へさんへ薄雲室ぢやア子の刻をうつまでは何にもあが
 らッしやりやアしませんヨ」吉「ハ、ア左様かそりやアわりいノ小僧なんぞもこの小僧とはお袖
 ふ吉兵へがおやぢ
 かたぎのことば也ときく其様なことをいふから思入れ叱言をいつたら夫後あんまりそんなこ
 とも仕ねへ様子だトいふをりかり
 子刻のしらせ新造「ヲヤ丁度子ノ刻さすヨトうれし
 がる此時振袖新造薄の香手
 に岡持をもち片手に鐵瓶の湯のわきたるを重たさうに持つて座敷へ這入うすのが「モシエ薄
 垣さんへやつて今忠助どんが歸つて來ましたは今まで何をして居たとおもいれ叱言を言て
 やりましたはト

是よりいよくがやくとして書とるもうるさく讀倦たまはんかとしばらく筆を休む

第二十章

新造「それからあの人は何と言ましたへ」アノウッ少し用の有人に逢てよんどころなく晴間

屋へ連て往て酒を吞してゐましたから遅くなりました薄垣さんに叱られますからお座敷へ
 は往れねへといつて居ますはモすかねへやつさすヨ」否な奴さすネをしてまア外聞
 のわりい晴間屋なんぞへ往ねへでも青善か當新亭へでも往ばいゝのにねへ」吉「ハ、ハ、晴
 間屋から直に青善も可笑ソウアハ、ハ、トこゝろけてわらつて居るしんごうに
 はわからぬゆゑまじめになつて新「ヲヤなにが其様な
 にをかしふさすへコレサ薄の香さんそのお湯の冷ねへやうにしておきなましヨアイおゐ
 らんトいひながら菓子あいなこの箱を出す薄「そこへお上なましヨトあいなこ
 糸にていふ新「古兵衛さんへお
 ゐらんが貴君にお茶をあげ申すといいつてとりにお遣なましたトあのかわしの
 おりを出す吉「どふもあ
 りがたいネ酒を吞だあとで能茶をこしらへて菓子を喰ふといふのがくせだトいふところへ吉兵
 衛の相方お袖はヤ
 あしにてはたはそで薄雲さんへおやかましふトをみてにつこりわらひお袖さんさぞこゝろなしたとおもひだらふネお前
 すかトいきをきらしてせいへいつてゐる薄「お袖さんさぞこゝろなしたとおもひだらふネお前
 もまた何所に居なましたへそで「アイナアニ花鳥さんとお手玉をとつて居たらしたから挿花
 のお師匠さんが來たといつてよこしましたからすぐにしたへいつて稽古をして居たんだま
 すは吉兵衛さんだからことはらずにしたへいきましたがネひさしく來もしねへくせ」夜教
 に來てサ氣違じみて居るじやアありませんかそれから子ノ刻をうつたからさうく缺出し
 て來たんだますはモウくしたに居るといやでく」吉「ナアニうそばつかり花のお師匠さ

んがあやしいノアハ、そで「ヲヤ否な吉兵衛さんぞます。■ツ引ト おふきなこへてい 吉「ドレ
 お茶を煮てもらつて今のもをいたゞかふそで」ヲヤなんぞますわちきにもおくんなましな
 薄「ナアニめづらしいものじやアありません鳥雅さんが來さした時分おまへがよくよこ
 しておくんなんしたぎらひのおんころと金玉糖ぞますヨ 吉「サアお茶をいたゞきてへの
 そで」貴君ヤア寝さつしやらねへのかへ 吉「ナニノ今ツから寝るとまた寝わされるそで」左
 様ぞますかト 平氣で 薄「それでもすこしお休みなまし明日寝むうぞませうそで」ナニ宜ぞます
 ヨあした寝むくなつたらまた寝においでなましヨ 吉「アハ、くだらねへことばかり言
 て居ねへでそのお茶をつんでくんなしてみんなが菓子を食べればいゝのふ 薄「お袖さん
 へ夜中にお茶を呑んだりお菓子をたべるとまことにじれつたふぞますネエそで」アイサ左様
 ぞましたッけネあの朝歸してしまはしつてわちきが同床に 薄「寝てくんなまして私か鬱情
 であるのをまぎらしておくんなましたッけネエあの晩のやうに嬉しいじれつてへ夜はあり
 ませんかツたヨ 吉「ナニサまたうれしいじれつてへことは幾度もあるはなマア先刻いふと
 ほりよく手紙を書て置なせへ是非わたしがたづね當つてくはしく云てとゞけるから
 薄「アイ何様ぞモウ是非おたのみ申いヌいままでの文は何様なつたか少斗も様子がわかりま
 せんからモウく悔しくつてくなりませんから今度は唐紙をとりよせてよウく信心して

かいて切ものをつかはないでふでのさやがさでたつてそれから箕の輪の鬼子母神さまへお
 加持をたのんで遣りましたはそれだからこんどは屹度いゝたよりをきかしてくれさつしや
 るはずに願をかけておきましたから何様ぞ貴君の親切でとゞけておくんなましヨきつとぞ
 ますヨそで「おとつさんエ屹度あつて上申なましヨ 吉「ム、夫は屹度承知だヨほんに女郎衆
 といふものはおもしろいことばツかりいふもんだノウアハ、ト わらつてゐるこのうちおのお
 のちやをのみくわしにかゝる 薄「お袖さんへ喧嘩をしない様におあがんなんしヨそで」ヲヤいやぞますヨ貴嬢ぢやアある
 まいし 薄「ヲヤ私だ何時誰と喧嘩をしましたへそで」鳥雅さんとサ 薄「そりやア昔のことぞ
 んすはモウ喧嘩をする人はありませんヨト すこしなみだをめのうちにうそで「ヲヤ昔のことぞます
 エむかしのことが去年ぞますか昔といふは十年か百年のことぞますは去年のことだからま
 だ昔の中へはゐらなひからいまに鳥雅さんが來なますはネ十年と百年とからふたツ立て仕
 まうとそれこそモウ來さつしやりやア仕ますまひはほんとうのむかしになりまますから
 薄「それぢやア啞のむかしがありますかへそで」アイサ貴嬢の云はしつたのは啞のむかしぞま
 すヨ 吉「それから他所いきの昔に不斷着のむかしかアハ、そで」ヲホ、ハ、薄「ホ、ハ、
 ハ、うすがき」むかしくが重りイすねへそで「それだから花咲老父さんがひとり居ますは 吉「ア
 ハ、ハ、此方をば親父さんぢやアまだくやしひとおもつて老父と名を付たなイヤしかし花

咲老父とはありがてへ何様ぞ此方も達者な中此家の二階中はなをさかせるようなあそびをして家内中にもうれしがらせてひつこみてへものだ殊にまたおゐらんの身にどつても花がさくとは能辻占だ煎豆にはなといふほどのたとへでもねへか出勤を仕ようといふ相談のせきで花咲老父のすゝめにしたがつて薄雲さんに花がさけば老父の貰ふ賞祿のかはりに鳥雅さんを是非つれて来てその美麗かほの莞爾を見せて貰ふがこの親父のホイ老父の願だサア／＼衆人がモウ寝なせへたいそふに夜がけたサア孫は何様した老父さんをやすましてくれねへか先刻寝なひといつたから寝ずともいゝたゞすこしの中氣をやすめて往ふそアレ親父さん堪忍しておくんましヨわるひことをいひましたッけネ 吉馬鹿を言ねへ口へ出してわるく言はれるように心安くなつた此方がうれしさはわかいしゆが情人の二個も一時に出来たと同じ心持だこれが又此年になつてお客の會釋にされて見るがいゝそれこそ氣恥かしくつて此様に二階を遊んで行れるものかしは是でも情人が出来から油断をしねへがいゝアハハハ、薄ヨホハハ、サア實正に親父さんの様にやさしいとだれでもほれますはネエお袖さんそア、左様さますがこのごろちやア叱言をいつてなりませんヨそして何所へかほかに往なます二階が出来た左様でありますヨ 薄ヨヤなせさますエそア、それでも泉目吉とかの人形をふたッ持つて來なまして一ツ貌のほうをばわちぎに見付らねへように

隠して置なましたヨあれをばたしかに歸んなますとき何所かかわひがる所へ持ておいでなんすに違ひはありませんヨ 吉イヤ小僧が珍らしい勘繰を言出したはへしかしよく氣がついた此方はもつては來たがツイわすれて仕まつた早く此所へ持て來てくんなそア、いやさますヨ誰が他所へ持ていかッしやる人形をもつて參りイすものか 吉マア／＼其様に腹立ねへでもつて來なヨ左様するとちぎに人形の遺所がわかるからト いはれてお袖はやう／＼かけた入の人形を 持來たる 吉よし／＼ト とつてわらひながら すすぐもにわたし 吉サアおゐらんおまへにはこの木偶の往所が知れるだらふネトいはれて薄雲は不思議そふに手にとりあげ 薄ヨヤ／＼マア能貌さますネト情とながめ 薄ヨヤト うれしそふに 誠に／＼鳥雅さんによく似て居イすねへトいへば一座がさしのぞき ●▲×はんざますヨモウ／＼鳥雅さんが小兒のときはきつとかうさましたらふヨそア、サア／＼左様さますかわちさやア少斗も氣がつかましましたは 吉そりや何様だわかつたらふノモシおゐらんうれしくもなひネ目吉にあつらへて鳥雅さんの似貌の木偶とは随分老人のうがちにはにくゝもあるめへおゐらんへはいゝ土産のつもりだがお氣にいらぬかネ 薄ヨヤ／＼左様さますかまことにうれしふありますはんに左様お言ひなんすのでおもひ出しましたがあ目吉さんとかいふ木偶師は鳥雅さんがひるきにさつしやる人さんでいつうか一度つれて來なましたつけそれさますから鳥雅様のかほを此様によく

似るようにこしらへてくんなましたのございます吉兵衛さんへまことにおありがたふございますヨ
 ト木偶を抱て貌をおしつけてうれしき思入れそで「ヲヤ薄雲さんがモウすぐに亂氣なますヨ
 ホ、ハ、ハ、●▲×ヲホ、ハ、ハ、ハ、薄「アレサお袖さん其様にいじめておくんなますなヲホ、
 ハ、トわらふをしほに吉兵衛はたちあがり 喜「ヤレ、久しぶりておぬらん的笑ひがほを
 見たサア、チツトやすみやせう 薄「それぢやアおやすみなましヨまことにモウおありが
 たうございますお袖さんへそで「アイ 薄「ごふぞよウくお禮をお願ひ致しますヨそで「アイそれぢや
 ア久しぶりて鳥雅さんと同床におやすみなましヨそして明日はすぐに木偶の着物をおあつ
 らへなましな私もこしらへてもらひますからト言つゝ立て廊下へいで吉兵衛とならびても
 のしづかに發明なればそは、せずさりとて元氣のよき生質自然の愛敬ふかくしてあつば
 れ大立者トなるべきお袖の風情はつたなき筆に書うつしがたし看官の通君よろしくさつし
 てよみたまへされば座しきにて他人のおほく居る節に吉兵衛をとりあつかふ行状とさし向
 ひになりたる節の會釋とははるかに違ひ老人なればとてなかくに兎略なることをせずさ
 りとていやらしき姿も見せずおのづから實意の情をふくみしなるべしさて又薄雲の座しき
 薄垣薄の香杯大勢にて其邊を片付それ、に休み薄雲も床にいりてお袖が明察のごとく彼
 人形を枕の際に抱そへてしげくと貌を見てまた思ひ出す鳥雅の事只何となくかなしさか

増りて涙をはら、兼言つもありし枕の上ぬれてホロリと人形のかほに落せしなみだを
 拭口のうちにて 薄「ヲヤ堪忍なんしヨ

此時町内の主人達當番の衆三四人戸を明させて家内に入不寢番にむかひ 且那方「火の用
 心を氣を付さッせへヨトいつて出て行

風月花情 春告鳥卷之十了

五月 水春木卷

風月花情 春告鳥卷之十二

江戸 爲永春水 著

第二十一章

住居の雑作をいふも常に珍らしからねば記さず言葉づかひにてよろしく察したまへ年齢二十八九の好風なる内儀今歸りし夫に向ひおき、秋しやア案じきつて居たヨトいへば三十七八歳主筆はおりをぬきながら居座裏の際に安座をかき、甚「なぜ案じた今日も女が歸すめへとおもつてかト笑ひながらいへば女房も莞爾としておき、お洒落でない能好男の風俗をして誰が幾日も止宿て置ものか必定今朝らア追出されて来る時分だとは思つたけれどもお店からア三度も呼に來たしそれにお前今日は苦味英の和睦ぢやアねへか仲人の癖に怠慢ヨ 甚「ア、ほんに左様だッけ誰ぞ來たかナア 甚「ア、寮房町の頭に誰だかまだ四五人來なすつたからまだ歸りませんともいはれないから今朝ほど店へ參じましたから只今歸りますと直にお跡から上ますと云て歸したは甚「左様か權次やア何様したりき、風まはりに往たヨ 甚「鐵は何所へいつたまたあの野郎めへ

371
遊行やアしねへかりき、ナアニ昨夜仕合が能ったから今日は直に活業に行といつて出て往たハネ 甚「ム、今日は大又の砂糖藏の建前だナそりやアい、が店の用は何の用だか聞たかりき、番頭さんが最初に呼によこして又其次は二度ながら跡髪結の小僧が來て祿母さまが隠居所へ來てくれるとおつしやる口上だヨ 甚「ハテナそれぢやアたしかに鳥雅さんの事はへ何卒い、鹽梅にして上てへ物だしかし本店の威光で言はれたら鳥雅さんの兄さんも否とは言めへスドレまアちよつと店へ往て來へ若旦那に左様申て置ねへヨお前さんの事でお店へ參りましたから何れ近い中何様かなりませうから餘り外へ遊びにおいてなせへますナお宅の方へ知れるとわるふござりますとよく左様申ねへそしてモウ起して上ねへナ餘り寝ると毒だアリき馬鹿アお言ひナ今時分寝て居るものが在ものかネモウ已ツ刻過だヨ 甚「それを吐へたッた今辰刻を途中で聞たアそりやア左様と若旦那は鳥雅のとなり何所へかお出なすつたかりき、ア、今奥の家へ遊びに出たは 甚「奥の家たアお園さんの所かりき、イ、エあの隣のおやなさん所さ 甚「アヤそいつアむつかしいナアリき、なぜだい 甚「なぜといつて兩方が好物たのに双方も獨身同様だからあぶねへわけだア 甚「ア、お前もとんだ嫉妬だねエ 甚「べらぼらうめへ此方ヤア女はうるせへといふ勘だア 甚「おふざけでなひヨ自惚るもほどがあるはネトといふ所へ出入店の小僧來り「甚五郎さんに手間はとれなひ用だからちよつ

と来ておくんなさいトいいながら犬にからかつて居る 小「黒ヤアイおしきく」 甚「ヲイ
 コウお見世かお奥か 小「御隠居さまが先刻から待つてお出なさるから 甚「左様かそれぢや
 ア直に往ふト 麻付のぞうり 甚「コウお力長太郎どんに何ぞ喰はせねへかりき」アイはんに美味
 物かあつたッけト をばきなごら 甚「コウお力長太郎どんに何ぞ喰はせねへかりき」アイはんに美味
 しく申しておくれヨ 小「ハイトあいそもなく欠出して行 甚「ヲイその喜世留をくんねへ
 リき」アレサ腰に提てお在ぢやアなひかネ 甚「ナニこれせ持て往とまた隠居番頭が白眺つけ
 らアリき」ヲホ、、あの番頭さんをば誰ても否がるねへト いふを開きし お力は甚五郎の脱
 捨たる革羽織を疊で戸棚へ入て居る所へ障子の外から女のことにて「おききさん宅にお在たネ
 トいひつゝ入来る婀娜ものは二十六七才の年増女此節少し不都合と思はれて上田紬の茶見
 盡の小袖下には縞縮緬の大縞の縷々を着てじゅばんの半襟は媚茶の花絞り袖口は御納戸の
 山まゆ本紅の裏を付平ぐけの一寸幅の帯をくるくゝ巻にして袂をとつて白き足を見せ髪は
 油氣もなく亂したる姿持病が起りて化粧も半月ほどかまはずやうく昨夜久しぶりにて泉
 湯へ這入たといふ風俗一向に色家は含まねども自然とうつくしく垢のぬけたる苦勞人たし
 か去年の極月あたり北廓を出たるなご、評をせらるべき婦人なりりき」ヲやおやなさんサア
 お上りナ今日は顔色がいいネやな」ア、昨日から大きに能ヨリき」ヲヤ今鳥雅さんがお前の所
 へお出ぢやアなひかネ」ア、またお出たヨ 甚「ヲホ、、たつた一人捨てお出か
 やな」イ、エお園さんが何だか浮て居る様だから所爲と對坐にして小用の風で外して来たん
 だアネりき」ヲヤくゝこまるねへ今も甚五郎さんが ていしゆのことを甚五郎さんとい お前の宅へ鳥
 雅さんが往てまたこぢつけねへけりやアいと噂をして出て往た所だはネやな」ヲヤありが
 たうどうぞ左様だと嬉しいけれどモウ私なんぞは老こみだからいけないヨリき」フウム大そ
 う下からお出かけ遊ばすネ此裏も能婦女揃ひであつたッけがお前が来てから年増はいふに
 不及十六七の娘たちまで不残おやなさんに押付られたといふ評判だはネやな」氣味のわりい
 其様にいぢめておくれでないヨしかし鳥雅さんは餘程より好男だねへりき」ア、それだから
 かへつて身が保ないのだヨやな」イ、エ鳥雅さんの方よりか相手になるものゝ方が身の困窮
 だはネ私が廓へ這入つてからも薄雲さんのところへ鳥雅さんがお出のを二三度見かけたッ
 けがネ其時の衣裳なんぞは何様によかつたか知れないヨ寔にモウくゝ女の好風俗で誰ても
 賞ないものはなかつたはそれだから薄雲さんが惚きつて眞に苦勞をして煩らふくらおだッ
 けがネ程なく鳥雅さんも勘當されさしつて其後といふものはモウくゝ鬱氣でばかり居た所
 へ寔に可笑ことが出来たはりき」また薄雲さんの情人が出来たのかへやな」イ、エくゝ全體薄
 雲さんは生質が眞實で情人なんぞをこしらへる氣を少しもないヨ先の鳥雅さんはネりき」エ

と来ておくんなさいトいいながら犬にからかつて居る 小「黒ヤアイおしきく」 甚「ヲイ
 コウお見世かお奥か 小「御隠居さまが先刻から待つてお出なさるから 甚「左様かそれぢや
 ア直に往ふト 麻付のぞうり 甚「コウお力長太郎どんに何ぞ喰はせねへかりき」アイはんに美味
 物かあつたッけト をばきなごら 甚「コウお力長太郎どんに何ぞ喰はせねへかりき」アイはんに美味
 しく申しておくれヨ 小「ハイトあいそもなく欠出して行 甚「ヲイその喜世留をくんねへ
 リき」アレサ腰に提てお在ぢやアなひかネ 甚「ナニこれせ持て往とまた隠居番頭が白眺つけ
 らアリき」ヲホ、、あの番頭さんをば誰ても否がるねへト いふを開きし お力は甚五郎の脱
 捨たる革羽織を疊で戸棚へ入て居る所へ障子の外から女のことにて「おききさん宅にお在たネ
 トいひつゝ入来る婀娜ものは二十六七才の年増女此節少し不都合と思はれて上田紬の茶見
 盡の小袖下には縞縮緬の大縞の縷々を着てじゅばんの半襟は媚茶の花絞り袖口は御納戸の
 山まゆ本紅の裏を付平ぐけの一寸幅の帯をくるくゝ巻にして袂をとつて白き足を見せ髪は
 油氣もなく亂したる姿持病が起りて化粧も半月ほどかまはずやうく昨夜久しぶりにて泉
 湯へ這入たといふ風俗一向に色家は含まねども自然とうつくしく垢のぬけたる苦勞人たし
 か去年の極月あたり北廓を出たるなご、評をせらるべき婦人なりりき」ヲやおやなさんサア
 お上りナ今日は顔色がいいネやな」ア、昨日から大きに能ヨリき」ヲヤ今鳥雅さんがお前の所
 へお出ぢやアなひかネ」ア、またお出たヨ 甚「ヲホ、、たつた一人捨てお出か
 やな」イ、エお園さんが何だか浮て居る様だから所爲と對坐にして小用の風で外して来たん
 だアネりき」ヲヤくゝこまるねへ今も甚五郎さんが ていしゆのことを甚五郎さんとい お前の宅へ鳥
 雅さんが往てまたこぢつけねへけりやアいと噂をして出て往た所だはネやな」ヲヤありが
 たうどうぞ左様だと嬉しいけれどモウ私なんぞは老こみだからいけないヨリき」フウム大そ
 う下からお出かけ遊ばすネ此裏も能婦女揃ひであつたッけがお前が来てから年増はいふに
 不及十六七の娘たちまで不残おやなさんに押付られたといふ評判だはネやな」氣味のわりい
 其様にいぢめておくれでないヨしかし鳥雅さんは餘程より好男だねへりき」ア、それだから
 かへつて身が保ないのだヨやな」イ、エ鳥雅さんの方よりか相手になるものゝ方が身の困窮
 だはネ私が廓へ這入つてからも薄雲さんのところへ鳥雅さんがお出のを二三度見かけたッ
 けがネ其時の衣裳なんぞは何様によかつたか知れないヨ寔にモウくゝ女の好風俗で誰ても
 賞ないものはなかつたはそれだから薄雲さんが惚きつて眞に苦勞をして煩らふくらおだッ
 けがネ程なく鳥雅さんも勘當されさしつて其後といふものはモウくゝ鬱氣でばかり居た所
 へ寔に可笑ことが出来たはりき」また薄雲さんの情人が出来たのかへやな」イ、エくゝ全體薄
 雲さんは生質が眞實で情人なんぞをこしらへる氣を少しもないヨ先の鳥雅さんはネりき」エ

先のとほへや「アレサ今私の所へ来てお在のアノ鳥雅さんは素人の節からの情合だからしたひこがれてお在だがネ其後來る今の蝶賀さんといふのはネリキ「ヲヤ／＼それぢやア私の所にお在の鳥雅さんの他にまた同じ名の人^{なつやといふは茶}が薄雲さんの所へ往のかへや「ア、字は書様が違ふさうだけれども蝶賀さんといふ客人が夏屋の宅から^{ヤのことなるべし}送られて来るのさ實名號は僕さんといふ名でモウ／＼／＼氣障アな否な人だから薄雲さんが否がり降て居てネなまなかに以前の鳥雅さんの名と同じ名で今のは餘り否な人だから雪と墨のたとへより最少かみがつてお在だはネそれだから外のおゐらん達が不斷左様いつて笑うはネ勘當された鳥雅さんが上方から歸つてお在の節は直に名をかへてお貫ひとすゝめてゐるはネ妙なものて好風な名でも否な人が名號と否な名に思はれるし否な名でも好た人が名號と意氣な名のように思はれるねへ以前の鳥雅さんと今の僕さんの蝶賀さんとはなぜア違ひ様が大そふだらうと僕さんをば新造衆まで否がつて居るのに以前の鳥雅さんの噂をしても自分のことだと思つて今來る蝶賀の僕さんか自惚きつて居るから薄雲さんでも誰でもモウ／＼否がりきつて此頃ぢやア茶屋の夏屋まで衆人が憎がりますはリキ「ヲヤ／＼左様かへ何様してまア同じ名の人が其様に幾人も在だらうねへ

因日狂訓亭は生質野夫にて世間の事をすこしも知らずたゞ古き机に倚かゝつて下手な

る推量をのみ綴りて御伽の物語となし筆墨の料をもらふて同族をやしなふゆゑ青樓妓院は夢にも見たることなしされば通君子の誇り少なからずまた卷中の人物其の名前はからず現在の人の的中してもしやその人の事を作りしかと思はるゝ憎しみ毎度なりと噂を聞たりかならずしも手が作の中本に似寄の御名があればとてそれならんかとの御評判はくれ／＼ゆるし給へと願ふになん

375
や「俗名は何人も同じことのあるけれど俳名とやらは其様になさそうなものだけれど一人のおゐらんに同じ俳名の人^{リキ}が二人來るといふ廣ひ世の中だねへ「そりやアいゝがマア鳥雅を呼んで來ておくれな今詫言最中ひよつとお園さんと出來てもすると大變だはネや「宜はネ打捨てお置き不躰だけれどもお園さんの手際ぢやア鳥雅さんの相手には出來ないヨリキ「イ、エ／＼あれでも鳥雅さんは其方が少々早業方だから撰嫌ひをしては居ないヨまたお園さんも愛敬のある娘だものヲまんざらではなひのサや「ア、ねへ隨分即席惚のする嬢だから油斷をするもわるひねエリキ「それだからマア見て來ておくれヨ其間に私やア煮花を拵へてお前に上るからサア早く往てお出ヨや「ハイ／＼かしこまりましたト笑ひながら下駄をはきてお力の髪を見て「ヲヤ結髪さんが來たのかへリキ「ナアニなで付たんだはネ今日はたしか來るヨや「ヲヤそれぢやア待て居るといつておくれナドレ先情合の邪魔をし

て来ようト欠出して我家へ行看ればいと静なる中敷居のうちにてお園は爪弾の童唄を唄ひ居る

うた「鶏も鳥も憎ひ早起よはれて雀のものがたり障子へうつる春の日に梅が枝つたふ鶯はなひた寢覺のわらひごへ」アレ淺草の鐘の音が隅田の堤に向ごしてがれておそき巳の刻にいとどつづけの庵のきぬく

鳥「オヤその唄は世間の人の知らぬへはづの唄だがお前は何様して知つてお在だ かニナニこりやア此頃はやりますヨ初手は相坂町の唄女のお花といふのが唄ひはじめたので私やヤそのお花さんに被成ましたヨ

一人ト聞テ鳥雅は不思議をなし胸にわすれぬお民が事そもく只今お園の弾し唄は迎鳥の別荘にて鳥雅がつらねし文句にてお民にさしづして三味線の調子を付させ只二人がなぐさみにせしのみにてなかく世の中へ弘まる道理なし殊にお民は遠き田舎へ追やられたるよしをほのかに聞たればいよく世間に傳ふべきことにあらずいかゞして此邊に唄ふやお花といふ唄女こそゆかしけれとお園にくはしく其模様を聞糺して居るやな「オヤくなんてございますエ鳥雅さんお園さんの様な美しいのをつかまへてまた他の女のことを根をはつてお聞なさるのかへかこイ、エおやなさんお前はまたお知己で在ま

ひがネお花さんといふのは寔にかはいらしい能唄女衆でござるますはやな「オヤ左様かへをれも若旦那の情人かねヲホ、、、鳥「なんだナおやなさん私しとお園さんを置逃げをして何所へお出だやな「ヲヤ私やア所爲と氣をきかして上たのだがねへまだお園さんと情人におなりでないのかへかニヲホ、、、どふしてく私か種々口説てもお聞でなひヨおやなさんが先へ口をかけたからまア私の方はお断だとさトさすかにしやれたる女同士わらひの中に只のむすめのおよばぬわざにて、さる交情やな「ヲヤく私しやア先かも知れなひがモウ前は断はられてしまつたのだはネヲホ、、、トいふときしも長家の子どもふたりばかりおやなの家のま女の子、いへにあそび居たりしが六才ばかりの女の子なにを聞てかイろヤくおやなさんとお園さんいいろヤく鳥雅おやなおかこの三アハ、、、ヲホ、、、ホ、、、やな「ア、おかしひ子だねへかニ「あの子は毎度何かを聞かぢつてはあんな可笑ことをいふヨヲホ、、、トさまでにあらぬとにても笑ふは若き花の貌おもしろそふに思はるれ折からお力も此所に来りりき「なにを其様にお笑ひだ私しにもチツトお聞せナネへトまた鳥雅にりき若旦那ちよつとお歸んなさいまし 鳥「アイ何だへりき「アノウ御家の小僧さんが参りました 鳥「ハテナ誰だかりき「アノお前さんが御ひゐきになさつた發明らしい小僧さんでござるますヨ

第二十二章

再説鳥雅の上方より立歸りしは古郷の人々を戀しくなつかしくまた夢の中にもお民が必死の難義など正々しく見たるゆへわけて不便に案じられ彼地に安閑と時節を待たざらず其家の許へは置手紙をしてはるゝと逃下りしが何れの家にも立寄に便りわれば本店の抱にて祖父の代から出入する甚五郎は前々より目をかけて置しもの殊に祖母のひびきにする男ゆゑ萬事に都合よければまづ此家に身を落着其身の家へたよらず内々甚五郎をもつて本店の祖母の許へ謔言を言入しなりされば甚五郎も出入店の出見世とはいへ實は血筋の鳥雅なれば兇略にならずまた當時勘當同前なればとて始終は三箱と四箱の元手を出して別家をさせねばならぬ息子のこゝゆゑ大事にして其家に置しなりさて鳥雅はおやなの家より歸り來て見れば十五才ばかりの若衆の小僧千松といふものこれ鳥雅の目をかけてつかひし我家の小僧なり生得實情の深き者と思はれて久しく出されし鳥雅を見て涙ぐみ手をついて千「御機嫌ようございませすかト ちいさなるこゑにていひながら 鳥「ヲヤ千松かよく此所へ寄たッけナ何所ぞへ使に往たのか 千「ハイ諸方へ參じましたをして今朝御母堂さまが内所で御用を被仰ましたト懷中より財布を出して金を十兩紙に包しまゝ鳥雅に渡し 千「エ、アノ左様被

仰ます若旦那に今の間餘り他人に合てはわるひから外へ出てはならなひから其氣で本店の御隠居さまの方へよくお頼みなさいしとそして着衣類は明日櫻川三孝が持て行はづにして置たからそのつもりでお在なさいましといづれ四五日の内に御寺參りから此家へ内々ていらッしやいますそふて御ざいますトいはれてさすがに前後をかえり見もせぬ息子氣質も今さら母の慈悲を聞勿躰なくも嬉しさを何にだとへん方もなきありがた涙にしばらくは言葉も出ぬ風情なり 千「アノウお前さんは迎島にお在なつた節かはひがつておやりなつたお民さんをば何様なさいましたト思ひがけなく問ひかけられて鳥雅はにが笑ひをして鳥「ナゼそれを聞のだお民はおれが上方へやられた後で田舎へとかやられたぢやアねへか 千「ハイたしか左様でございましてがそれぢやアお前さんも其時限りで後は御存はございませんか 鳥「なぜ／＼そのお民かとふかしたか 千「イ、エ何様も仕ませんが先達中私が爲島の方へお使に參つた節相坂町の泉湯から浴衣を抱へて出て行のを見かけましたからトいはれておどろく鳥雅の胸いかなるわけかとせきたちて 鳥「エ、ナニお民を見かけたと啞言でなけりやア人違だらふ何様してお民が浴衣を抱へて泉湯へ行く様な横しまな出世をするものか 千「イ、エナニうそでも人違ひてもござぬません私やア急度覺ておりますアノお民さんの右の耳の後はくるが二ツあつて眼元が杜若の様で物言でございませす 鳥「ハテナそ

して何方の方へ往たりき。若旦那大分お氣がもめますネト笑ひながらいへば鳥雅はまじめに鳥「左様サトいつたばかり考へて居る。千「私やアそれから後を付て行て見ましたら相坂町の格子造作の家へ這入まされその後また通りかゝつて見ましたらあのお民さんが立派な姿をして三味線箱を男に脊負して出て行のをたしかに見ましたト目角のつよき小僧の言葉さてはと思ふはたつた今お園が弾た端唄の一條彼はお民に符合すればもしや唄女になりたるか左もあらんには何者が其一件の世話をなしたるぞと安心ならぬも惚たる人情胸さはぎのみしたりけるがやうく押鎮。鳥「それぢやア手前は其家を知つて居るナ。千「ハイ能看てをきましたお手紙でも被遺ますならば持て參じませうか。鳥「ナニ手紙ではいかねハコレ斯して吳な今度外て其唄女に出合たらばナ其方が聞にはかまはず遠慮はいらねへから聞て見てくりやお前は以前迎鳥の別荘に居た事はなひかそうして元の名はお民さんと號やアしなひかと直にやらかして見て下ッし。千「ハイ左様申ませう又御用があるならば明日參じます鳥「ム、何様ぞ左様してくんなをして他人に知れねへ様に母人さんにありがたふ存じますと。千「ハイくト歸り行此節巳ノ刻の鐘ボランく。水「今日はどうござぬますかナ水屋でござぬますりき。水「水やさん看て入れておくれヨ。水「ハイくかしてまりました水や宜しふ。ハイ半荷の口もござぬませう。鳥「イヤおるらは水やぢやア氣がすまねへ今ッから往て見て

來ようりき。千「何方へ。鳥「エ今のはなしの相坂町へサ。りき。千「何々貴君出て歩行なすつちやアおわるかアござぬませんか。鳥「ナニくかまはねへちよつと欠出して往て來よう左様ならばお羽織を出しませうか。鳥「エ左様サネト帯をべ直してお力に羽織を引かけもらひ立出んとする所へ櫻川三孝道具屋の友次郎兼て諸方の旦那方にひゐきさるれば其恩の爲には欲の勤にあらで實意をあらはす見舞もの尋て此家に來りける

風月花情 春告鳥卷之十二了

江戸 爲永春水著

第二十三章

こはいろをけいこす
 るひとふたりづれ
 ▲梅に木づだふ鶯の。音色やさしきあの唱歌たしかにそれと知りながら
 向方に知れぬ我心 ●コレサ／＼吉ツ子それぢやア息の繼目がわりいやア最ちつと跡を引
 様にしねへな ▲左様か跡を引なア大傳か平庄が癖だア ●違へねへ菊幸も跡を引ぜヲヤ
 見さつし奇奴な繪が出たぜ ▲ム、ナア向へ町の狂言だらうハテナア、引役者がまじつて
 晝であると思つたら見立だアナト 繪ぞうしといやの山本上るり □割めへがまだ
 貸になつて居るから今夜田舎しることを奢らツト ●ヲイ／＼承知だ／＼エコウしるこより
 か天麩羅に仕やナ □それぢやア高く上るぜ ●また其様なしはひことをいふヨあすの晩
 自己が澤山とおひるから今夜まア其方が天麩羅を奢らツしな □ヲヤ／＼おかしなことを
 いふぜそれぢやア其方が奢るのではねへのか道理で大びらにしるこよりか天麩羅かいゝな

んどといふと思つたむしのいゝ男だぜ ●アハ、／＼そりやア左様と明日の晩の浚は何様
 する □エ何所の浚だ ●ヲヤ／＼まだ知らねへか昨夜龜の子がお前に左様いふはづだッ
 けがナ □ナアニ龜の奴めエきのふしかも二度逢たけれども何とも言やアしねへ ●左様
 か他でねへから往てやらねへけりやアならねへ □誰の浚だ ●岡本歳太夫サ □歳太夫
 ぢやア往ざアなるめへト いひながらよし町のたへまがりゆくこれよりすべて往來 ●ヲヤ／＼大變に人
 が込合て來たぜ ●ムン何だア吹矢町が打出たんだア ●ハア左様かヲヤ／＼大そふに娘
 がそろつて來たぜ何れもみんな美容なア ●ほんになア人がらのいゝ娘ばかりそろつたが
 何だらふ ●ア、引知れた／＼東連の見物だぜしかも坂東三津代の弟子か大勢まじつて居
 らア祭に出て心やすくした娘が三人ばかりゐらア あきんど ●おでんやおでんあまひとからゐ
 おでんやおでん ○アレサお停さんといふのに △ヲホ、／＼私やアまたじやうだんだと
 思つたアネ ○アノネ先刻左様言つたことネお前は何様おしだ △あしたの事か ○ア
 、△三津代さんは往はしまひねへ ○イ、エお師匠さんは往ておくれではなひがお歌さ
 んが同道に往とお云だからお出な △それぢやアお前と私とお歌さんと三人かへ○ア、そ
 れにお津多さんが參るヨ△清元のかへ○ア、岩附町の延津多さんサト がやがやばなしながらお
 やちばしをわたりゆく
 ●御存じしられし玉藥鐵砲玉とはことかはり ●へん榮こらナア鐵砲ぐれへぢやアねへ大

筒だア ○ヤイおれが何時啞を吐た事があるへ其方こそ石火矢だアト いふうしろから座しきよりかえるけいしやそのいてた
 ちのいきなること筆にのへがたしはこま はしにちやうちんをもたせすれちがひに げいしや「榮さん市さん喧嘩をしておしてなひヨト笑ひながらいふ榮と市はふふ」アハ、おふしくじりだお花さん相かはらずに御繁昌だネお熊さんへよろしく、げいしや、ハイありがたふチツト遊びにお出なねへト よしやの家の方 ○エコウ何様もいゝ唄妓だぜ氣障な所は少しもねへナア ○左様ヨあの嬢ナア世事をいふのが上ツつらでねへから頼母しいぜ ○今ぢやアあの嬢につゞく唄女はあるめへ ○何でも藝がいゝのに容儀がいゝときて居るから鬼に鐵棒だア ○それに性が堅くつていやみな座しきは何程金になつても勤めねへといふのだから俠氣だアヤヤ、最う亥刻だぜ ○今夜アすてきに夜が短けへぜ ○左様でもあるめへ延登代の所に餘ほど久しく遊んで居たぜ ○そんならあしたアはやく往ふぜ ○「ヨイ承知だぐウツと早く巳刻目覺か ○ナニ、それぢやアいかねへ明六ツにやア路次を開ておくぜ ○へん左様うまくいけばいゝがト わかれてみぎとひだりのわたへかへりゆく また唄女お花は金たが鮓の前の所にて小僧の持たる弓張燈の印を見て 花「モシ、小僧さん店の小僧さんぢやアなひかへ 小「ハイ左様でござるますト いひながらおほなの 小アノおまへさは迎島の別荘にお在なすつたお民さんでござるますネ 花「ヤヤ、私を知つて居ておく

れか嬉しいねへアノ若旦那さんは去頃上方へやられてお出だと聞たがまだお歸りでないかへ 小「イ、エモウお歸んなさいました 花「エ、ト びつくりするあんじてきまなぐもま お歸りだとへ啞ぢやアなひかへ 小「イ、エ啞ぢやアござるませんまだ實家へお歸りなさりはしませんが上方をば逃出してお出なすつて御本店の抱への甚五郎さんといふ頭の宅に隠れてお在なさいます 花「ヤヤ、左様かへト いふうちにもうれしきなし 小「實はお前さんがお民さんに違ひなひかどふだかお聞申せと若旦那に一昨日私が被言付ました 花「ヤヤ何様じてエ 小「ナニわたくしが先達お前さんの湯から上ツてお歸り被成のを見とがござるましたから其ことを若旦那に一昨日おはなし申た 花「ヤヤ、左様かへ私やアさつぱりわすれて仕まつたのにお前はよく覺へて居ておくれたッけねへト いひつゝうしろをふりむき 花「理介どんお待遠だネチツト待ておくれヨト すこしかんが 花「それぢやアネ小僧さんエ、引何だッけヲ、それ、その甚五郎さんのお宅は何といふ町内だエト だん、てまがとれるゆへ 小「へい何いたしませう若旦那に左様申てお前さんと逢れる様にいたしませうお前さんのお宅も知つて居りますからト いふうちに往來にけんぞわが出来てさはおしくのしりたて 隔てられたる朧月小僧は脊負ひたる風呂敷を大事にかけてちやうちんの消たを其儘くらやみを走りて去れば箱まはしもお花に怪我をさせまじとすゝめて曲る相坂町急ひで家にかへりゆく此節お熊は何事やらん腹を立し様

子にて門口を出るを下女のお清は小聲にて「アレサ姉さんマアお待なさいましヨト抱止るくま」ナニかまはなひから放してくんや恥をかひてもいひから伊勢本やの宅へ往て梅里さんに逢てわけをつけて貰ふから案じなさんな 清「イ、エそれでも最亥刻過ぎてござるますからマア明日になさいましなくま」ナニ／＼梅里さんが寝てお在の所へ往方がよひヨトふりはらひ欠出さんとする向へ歸りしお花は驚き 花「ヲヤ姉さんかへくま」お花お歸りか丁度よかつた留守をしておくれといひ捨にして欠出すを理介は引とめ無理無體に宅へ抱入るお花はやさしく泣きおゑにて 花「姉さん何だか知らないが堪忍被成ヨお清どん何様したもんだねへ姉さんの欠出してお出のをなぜお止でなひヨ 清「イ、エモウモウ先刻からいろ／＼と御意見申たけれどもお聞なさらずに今伊勢本の宅へ往て梅里さんに逢と被仰んでござるますはネ

そも此一條はいかなるわけといふに彼梅里といふ好漢いつしかお熊と深き中となりしが何ゆゑか此頃は少し足を遠くして來らず他の噂にて聞ば鳥居町の舟宿伊勢本の家に預けられて居る娘にお八重とて寔にうつくしき嬢のあるをいかゞしてか梅里がいひより互に合惚となり日毎に其所にのみ遊びくらすと聞しよりお熊は心を惱して今夜も斯る仕義におよぶなり

さてもお花は理介とくもにお熊をやう／＼中の間へ落着せて 花「姉さんマアお前さんにも似合なひねへ今かけ出してお出だつても梅里さんが彼家にお在でなひと耻をおかきなさるばかりでいけませんはネ 理「たとへあの旦那が伊勢本にお在なさるにもしろお前さんが其様に軽々しくお出なさるといふことがあるものでござるますかよくお考なすつて御覽じましくま」それだつても餘り悔しひものヲ 花「アノウ私が左様言てもお前さんは啞だと思ひだらふがネ先刻他の人に梅里さんの噂を聞ましたがネお前さんの思つてお在のわけとは違つて何だかつまらなひ事で氣をもんでお在だそうてござるますヨくま」ナアエ何も他に苦勞せする様な身分でお在ぢやアなひものヲ何でも私しやア先の娘と喰合て死んでもかまはなひ氣になつて居るものヲト泪を拭て眼をすりながらお花の吸付て出したる煙草を吞溜息を吐て居る 清「お花さんお着かへなさいまし温てありますヨ 花「アイありがたふヨちよつと着かくて仕まはふト言ながら二階へ着類を着替に行跡にお熊は兎に角に心すまねばまた帯を直してくま」理介お前今歸つて氣の毒だが私と同伴に鳥居町へ往てお呉な 理「ナニ氣の毒も太義も入ませんが今夜アマアお止なさいましそしてマア不斷世間で賞られてお在なざる才智なお前さんが引になる様なことがあつちやア私どもまで悔しふござるます殊に今お花さんが誰にか梅里さんのとを聞たと被仰つたぢやアござりませんかよくマア先から先の

ことまでも聞糺してそれから取極と談じつけるがいぢやアござるませんかナニそれは並の掛合をする氣ならば常八さんの中へはゐつてゐる事だから何様でもなるけれども肝心の梅里さんの氣がそれた日にやアいよ／＼私の恥だから是非直にしなくつてはいけなひからト鬱氣で居る

嗚呼才女の類ひまれなるお熊なれども眞實惚たる梅里の心が變りしといふに思ひ亂れて常の發明なる胸のかゞみ曇りて其理のわからざるがごとし

第二十四章

抱しめて餘念のなきを憎そふに只突はなすあかつきの鐘とよみたる明の鐘ならて丑滿の鐘ものすぐくコウ／＼として告わたる眞夜中なれども戀ゆゑに寝られぬお熊が浮思ひ飛立胸をおし鎮めてこらゆるつらさもお花が思はく理介お清か親切に引止られてくよ／＼と前後案じて中の間に延たる床の中に座し煙草くゆらし居る折節表の戸をドン／＼／＼「お熊さん／＼ドン／＼ドン」ヲイお清どん／＼といふ聲さけばたしかに梅里お熊は胸もとろさて何ゆゑなるか知らねども腹立中に戀しき人戸べりの際へ立よりてくま誰人てござるますエ「アイ私だヨはやく明ておくれくま」梅里さんかへ梅「アイ私だが同道人があるからどふ

ぞはやくあけておくんなせへトいはれてお熊は不思議ながら理介を起してあけさせれば急ひで家へ欠入る梅里十七八の美艶娘を伴ひ來りし故お熊はいよ／＼胸騒ぎ兼ての人を速立てか餘りのこと、悔し涙に挨拶もせず立て居れば梅里はそれ共氣が付ず入たる跡の戸をべさせ梅「ア、引ヤレ／＼怖ろしひことて在たサアママ奥へおいでなせへまし此家は決して知る所ではござるませんヲイお熊さん此娘をどふぞ奥へ連申てくん今にママ理を咄すからトいはれてお熊は不承／＼にくま」サアママ此方へお出なさいまし何様いふ事だかさつばり解なひこととでござるませぬへト梅里を尻目に白眼で奥へ伴ふ梅里も跡から奥へ行お熊にかまはず理介を寝かして仕まひお花も二階にて目覺せし様子ゆゑ挨拶をしてお清には火を發して貰ひ火鉢へ土瓶などをかけさせて是をも次へ立てて連て來たる娘にむかひ梅「何様してママ伊勢本をかき付て踏込ましたらふネまづ第一お前さんを男だと思ふものは伊勢本の夫婦ばかり彼家の婢女も舟頭も知らねへのにあの横島悪八が知つて参りましたらふ何ても彼奴めが此度の一件で殿さまにへつらつて貴君の御親父さまをしくじらせて其身が御家老にもなる了簡と見へますトひそ／＼と話すをお熊はあやしく思ひ考へながら娘の顔をじろ／＼とよく着れども男らしき所もなければ何れ梅里がこしらへごとならんと様子をうかゞひ一言も口を出さず默然として火鉢の際梅里の心をはかりかね常の風情はさらになく其

座もしらけて見へにける

さて梅里の連て來りし娘をいかなる者とたづぬるに元來女にあらずして梶原家の老臣番場忠太夫の次男にて忠之亟と名を呼れ御小性を勤めて今年十六才なりしが今梶原家の殿といふは平次郎殿とていたつて心よからぬ性質にて兄源太郎殿死去有しより幸ひに家督となられて我儘増長たとへるにもものもなく此ほど兄源太どの御愛妾に召れんと既に其事極りし腰千鳥といはれたるが有けるにいまだ御寢所へ出て源太どのに添伏もせざる中殿は御死去となりしゆゑ常の御妾にすみし者ならば直においとまとなるべき所を家中の娘にて御小性に御殿へ出いまだ御手は付すといへども源太どの深く御氣にかなひし者なれば御菩提を吊ひたてまつるこそ忠貞の道なるべしと老女などの申出せしゆゑ情なくも歳十九才にて切髪の尼となされ滑川の向なる御下家敷に佛間をしつらひ侍女一人と婢女一人を付て置れしが千鳥はさすがに年壯く肌さへしらぬ殿の爲に詮方なくも後世の修行縁の髪はそぎながら心に悟れぬ佛の教朝夕香花を手向ても十種香ほどは身に染す遠州流ほど詠めもなし浮氣といふにはあらぬごもまだやう／＼に咲初る花の姿を我ながらそぐはぬ珠數を爪ぐりて春心院と法の名を付られたるも恥かしく春の心に庭面を見ればつがひの蝶々も羨しやと思ふより自然なる化粧風俗白綾重

着て紫の被布を羽織し出立は故人の路考が女鳴神猶それよりか美麗ければ是を見る他人毎に賞ざるものゝあらばこそあつたら者を後家さまとはいとしいことやと噂せぬ日もなき程に評判せしが當主平次景高どのには家督の後在國して病氣ゆゑ三年ほど鎌倉に出勤せざれば此千鳥のことなどは一向に心つかざりしが全快してかまくらに參勤し或とき下屋敷へいたりて風と春心院を見初められ所爲と其夜は下屋敷に酒宴を催しかの春心院を酒の席へまねかれ酒興にことよせ種々と戯れ説れしかども男ぶりより心までいと憎らしき平次どのなれば千鳥は以前より身ぶるひして否がりし次男景高ゆゑなか／＼に承引せず前殿のことを言立菩提の道に入りたる身をかこつけてきびしく斷りを申上しかば平次殿には心中にはなほだいかり憎き女の心ざし故人源太に操立も實はわれを嫌ふてのことなるべし其義ならば思ひ知らする憂目を見せんとて役人に言付扶持小遣ひ等までやう／＼其日／＼に不足程をわたし困窮をさせける所に先殿の母公櫻の禪尾御秘藏の先殿源太どのゆゑに姿を替たる千鳥のことなれば其由をばのかに聞しめされいと／＼不便のことなりとて此度御隠居所を改めて御下屋敷に移し建られ表方にて心やさしき侍のみをゑらみ出してその身の附人とあそばされそれより彼春心院を多分その御殿に呼置れて不自由のなき様にやしなひたまひぬ平次殿はこれを聞れ